SGU指標の取組状況

2023年3月

目次

１．分析方法 …… 2

２．分析結果 …… 5

３．SGU採択大学の指標グラフ …… 19

４．SGU採択大学とSGU非採択校の比較 …… 54

1. 分析方法

1. 分析方法

(1) SGU採択大学必須指標（※1）ごとに、①全体推移、②タイプ別推移、③単科大学・総合大学別推移、④国公私大学別推移、⑤SGU非採択校との比較に分けて分析

（※）必須指標

〈国際化関連指標〉

①教員に占める外国人及び外国の大学で学位を取得した専任教員数・割合(5/1時点)
②職員に占める外国人及び外国の大学で学位を取得した専任職員数・割合(5/1時点)
④全学生に占める外国人留学生数・割合割合（5月1日時点、通年）
⑤日本人学生に占める留学経験者数・割合（通年）
⑥-1 大学間協定に基づく派遣日本人学生数・割合（通年）
⑥-2 大学間協定に基づく受入外国人留学生数・割合（通年）
⑦外国語による授業科目数・割合(通年)
⑧-1 外国語のみで卒業できるコースの設置数・割合(5/1時点)
⑧-2 外国語のみで卒業できるコースの在籍者数・割合(5/1時点)
⑨学生の語学レベルの測定・把握、向上のための取組 外国語力基準を満たす学生数・割合

〈ガバナンス関連指標〉

⑭-1 年俸制導入　年俸制適用教員数・割合(5/1時点)
⑭-2 年俸制導入　年俸制適用職員数・割合(5/1時点)
⑯ 事務職員の高度化への取組　外国語力基準を満たす専任職員数・割合

〈教育の改革的取組関連指標〉

⑩ ナンバリング実施状況・割合(5/1時点)
⑪ シラバスの英語化の状況・割合(5/1時点)
⑱ TOEFL等外部試験の学部入試への活用対象学部定員数・割合(通年)

（各分析枠組みの大学数）

タイプ別	Aタイプ：13校	Bタイプ：24校	
単科大学・総合大学別	単科大学：14校	総合大学：23校	
国公私大学別	国立大学：21校	公立大学：2校	私立大学：14校

(2) 任意指標である入学時期の弾力化、混住型学生宿舎の有無についてSGU非採択校と比較

(3) その他指標として、日本人留学生数の推移についてSGU非採択校と比較

（参考）各評価軸の大学

タイプ別	Aタイプ：13校 北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、東京医科歯科大学、東京工業大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学、慶応義塾大学、早稲田大学	Bタイプ：24校 千葉大学、東京外国語大学、東京藝術大学、長岡技術科学大学、金沢大学、豊橋技術科学大学、京都工芸繊維大学、奈良先端科学技術大学院大学、岡山大学、熊本大学、国際教養大学、会津大学、国際基督教大学、芝浦工業大学、上智大学、東洋大学、法政大学、明治大学、立教大学、創価大学、国際大学、立命館大学、関西学院大学、立命館アジア太平洋大学	
単科大学・総合大学別	単科大学：14校 東京医科歯科大学、東京工業大学、東京外国語大学、東京藝術大学、、長岡技術科学大学、豊橋技術科学大学、京都工芸繊維大学、奈良先端科学技術大学院大学、国際教養大学、会津大学、国際基督教大学、芝浦工業大学、国際大学、立命館アジア太平洋大学	総合大学：23校 北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学、慶応義塾大学、早稲田大学、千葉大学、金沢大学、岡山大学、熊本大学、上智大学、東洋大学、法政大学、明治大学、立教大学、創価大学、立命館大学、関西学院大学	
国公私大学別	国立大学：21校 北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、東京医科歯科大学、東京工業大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、広島大学、九州大学、千葉大学、東京外国語大学、東京藝術大学、長岡技術科学大学、金沢大学、豊橋技術科学大学、京都工芸繊維大学、奈良先端科学技術大学院大学、岡山大学、熊本大学	公立大学：2校 国際教養大学、会津大学	私立大学：14校 慶応義塾大学、早稲田大学、国際基督教大学、芝浦工業大学、上智大学、東洋大学、法政大学、明治大学、立教大学、創価大学、国際大学、立命館大学、関西学院大学、立命館アジア太平洋大学

2. 分析結果

2. 分析結果（まとめ）

(1) 必須指標

〈国際化関連指標〉

■ 2019年度（コロナ影響前）とSGU実施前の2013年度を比較すると、11個の指標の全てで数値・割合ともに増加。最新年度と2013年度でも9個の指標で数値と割合が増加

■ タイプ別では、以下の特徴がみられる
- 両タイプとも、全ての指標でSGU実施前から2019年度まで数値・割合を増加させている
- 最新年度もしくは2019年度（コロナ影響がみられる④-1から⑥-2までの指標は2019年度、それ以外は最新年度、以下同様）において、全体的にBタイプの方が割合が高い（Aタイプの方が割合が高いのは④全学生に占める外国人留学生の割合、⑦外国語による授業科目割合、⑧-1外国語のみで卒業できるコースの設置割合、⑨外国語力基準を満たす学生割合の4指標のみ）
- 2013年度から最新年度もしくは2019年度までの増加率の点では、⑧-1外国語のみで卒業できるコースの設置数と割合、⑧-2外国語のみで卒業できるコースの在籍者数と割合、⑨外国語力基準を満たす学生数と割合の3指標でBタイプの方が顕著に増加幅が大きくなっている。それ以外の指標に関しては、タイプ毎で大きな相違はない

■ 単科総合別では、以下の特徴がみられる
- 最新年度もしくは2019年度において、全ての指標で単科大学のほうが割合が高い
- 2013年度から最新年度もしくは2019年度までの増加率の観点では、⑤日本人学生に占める留学経験者数と割合、⑥-1派遣日本人学生数と割合、⑨外国語力基準を満たす学生数と割合、の3指標については単科大学の方が大きく増加、一方で、⑦外国語による授業科目数と割合、⑧-1外国語のみで卒業できるコースの設置数と割合、⑧-2外国語のみで卒業できるコースの在籍者数と割合、の3指標については総合大学の方が増加率が大きくなっている

■ 国公私別では、以下の特徴がみられる
- 最新年度もしくは2019年度において、全ての指標で単科大学が最も割合が高い
- 一方、2013年度から最新年度もしくは2019年度までの増加率の点では、⑨外国語力基準を満たす学生数と割合、の指標を除く10個の指標で公立大学よりも国立大学や私立大学のほうが増加幅が大きくなっている

■ SGU非採択校との比較では、以下の特徴がみられる
- 全ての数値でSGU採択大学の割合が高い
- ①外国人教員等専任割合、④留学生割合では増加幅もSGU非採択校と比較し大きくなっている

2. 分析結果（まとめ）

〈ガバナンス関連指標〉

■ 3つの指標全てで2013年度から最新年度までに2倍ほど増加しており順調に推移

■ タイプ別については以下の特徴がみられる
- 最新年度において、⑭-1年俸制適用教員割合、⑭-2年俸制適用職員割合に関してはAタイプが、⑯外国語力基準を満たす専任職員割合についてはBタイプのほうが高くなっている
- 一方で、2013年度から最新年度までの増加率の点からは、⑭-1年俸制適用教員数と割合、⑭-2年俸制適用職員数と割合に関してはBタイプが、⑯外国語力基準を満たす専任職員数と割合についてはAタイプのほうが高くなっている

■ 単科総合別については以下の特徴がみられる
- 最新年度において、全ての指標で単科大学の割合が高い
- 2013年度から最新年度までの増加率の点では、⑭-1年俸制適用教員数と割合は単科大学、⑭-2年俸制適用職員数と割合および⑯外国語力基準を満たす専任職員数と割合については総合大学の方が増加率は高くなっている

■ 国公私別については以下の特徴がみられる
- 最新年度において、⑭-1年俸制適用教員割合は国立大学が高く、⑭-2年俸制適用職員割合と⑯外国語力基準を満たす専任職員割合は公立大学が高い
- 2013年度から最新年度までの増加率については、いずれの指標も公立大学がSGU実施前とほぼ変化がないのに対し、国立大学と私立大学は1.5倍以上増加している

■ SGU非採択校との比較では、以下の特徴がみられる
- 比較を行ったすべての指標において、SGU大学はSGU非採択校と比較し非常に割合が高い

2. 分析結果（まとめ）

〈教育の改革的取組関連指標〉

■ 全体として顕著に増加しており、特に⑩ナンバリング実施科目数と割合、⑪シラバスの英語化の実施科目数と割合に関しては、2013年度から直近の2022年度までに5倍以上も増加している

■ タイプ別については以下の特徴がみられる
- 2022年度において、⑩ナンバリングについてはAタイプの方が高く、⑪シラバスの英語化や⑱外部試験の活用割合はBタイプの方が高い
- 2013年度から2022年度までの増加率の点では、全ての指標でBタイプの方が大きい

■ 単科総合別については以下の特徴がみられる
- 2022年度において、⑩ナンバリング実施科目割合と⑪シラバスの英語化の実施割合については単科大学が高く、⑱外部試験の活用割合は総合大学の方が高い
- 2013年度から2022年度までの増加率の点では、⑩ナンバリング実施科目数と割合、⑪シラバスの英語化の実施科目数と割合、は単科大学と総合大学でほぼ相違がない一方で、⑱外部試験の活用割合については総合大学が顕著に高く、約5倍増加している

■ 国公私別については以下の特徴がみられる
- 2022年度において、⑩ナンバリング実施科目割合、⑪シラバスの英語化の実施科目割合は公立大学が最も高い
- 一方、⑱外部試験の活用割合に関しては、SGU実施前は公立大学の割合が高かったが、公立大学がほぼ増加せず、私立大学における当該割合が大きく増加したことことから、2022年度では私立大学の割合が最も高くなっている

■ SGU非採択校との比較では、以下の特徴がみられる
- 比較を行ったすべての指標において、SGU大学はSGU非採択校と比較し非常に割合が高い

2. 分析結果（まとめ）

(2) 任意指標

<入学時期の弾力化>

- SGU採択大学では5割を超える制度設定率であり、実際に受け入れている学部・研究科比率もSGU非採択校が10%前後であるのに対し、タイプAは学部比率52.7%、タイプBは学部比率29.8%と顕著に高い

<混住型学生宿舎の有無>

- SGU非採択校における混住型学生宿舎を設けている大学割合が27.5%であるのに対し、SGU採択大学は100%の設置率と顕著な成果が出ている

(3) その他指標

<日本人留学生数の推移>

- 1年以上留学をしている日本人学生数に関しては、SGU採択大学では事業開始以降、順調に推移し、2013年度から2019年度で2.3 倍となり、全体に占める割合も 74%超となる。一方で、SGU非採択校においては、派遣者数が2013年度から2019年度で半分以下と減少している

2. 分析結果（詳細）

項目	指標名	①各年度の数値・割合 ②SGU前後の数値の変化 a. 2019年度−2013年度 b. 最新年度−2013年度	タイプ別	単科総合	国公私	SGU非採択校との比較
国際化関連	① 教員に占める外国人及び外国の大学で学位を取得した専任教員数・割合（5/1時点）	①外国人教員等人数、外国人教員等割合 2013年度：12,401人、27.6% 2019年度：15,976人、34.5% 2022年度：16,382人、35.1% ②外国人教員等人数の変化 a. 増加数：+3,575人 増加率：1.28倍 b. 増加数：+3,981人 増加率：1.32倍	・SGU実施前からBタイプの方がAタイプよりも外国人教員等割合が大きい ・SGU実施前後でタイプ毎の推移に大きな相違はなく、いずれのタイプも順調に推移	・SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも外国人教員等割合が大きい ・SGU実施前後で単科大学、総合大学の推移に大きな相違はなく、いずれも順調に推移	・SGU実施前より公立⇒私立⇒国立の順番で外国人教員等割合が高い ・SGU実施前と2022年度を比較すると、公立は外国人教員等割合にほぼ変動がないのに対し、国立と私立については増加している	・SGU非採択校と比較しSGU採択大学は外国人専任教員割合が高く、また2013年度から2022年度までの増加幅も大きい
	② 職員に占める外国人及び外国の大学で学位を取得した専任職員数・割合（5/1時点）	①外国人職員等人数、外国人職員等割合 2013年度：1,215人、5.0% 2019年度：1,823人、7.2% 2022年度：2,072人、8.0% ②外国人職員等人数の変化 a. 増加数：+857人 増加率：1.50倍 b. 増加数：+883人 増加率：1.70倍	・SGU実施前はBタイプの方がAタイプよりもわずかに外国人職員等割合が大きい ・SGU実施前後でタイプ毎の推移に大きな相違はなく、いずれのタイプも順調に推移	・SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも外国人職員等割合が大きい ・SGU実施前後で単科総合の推移に大きな相違はなく、いずれも順調に推移	・SGU実施前より公立⇒私立⇒国立の順番で外国人職員等割合が高い ・公立はSGU実施前と比較し2019年度まで外国人職員等人数および割合が減少していたが、2020年度から増加。一方で、私立・国立については人数・割合とも年々順調に増加	・外国人専任職員の採用計画ありの比率が、SGU非採択校は5%程であるのに対し、SGU採択大学は計画ありの比率が50%超と高い比率となっている

2. 分析結果（詳細）

項目	指標名	①各年度の数値・割合 ②SGU前後の数値の変化 a. 2019年度−2013年度 b. 最新年度−2013年度	タイプ別	単科総合	国公私	SGU非採択校との比較
国際化関連	④ 全学生に占める外国人留学生数・割合（5/1時点、通年）	（5/1時点） ①外国人留学生数、外国人留学生割合 2013年度：36,545人、6.5% 2019年度：55,699人、9.8% 2022年度：53,279人、9.5% ②外国人留学生数の変化 a. 増加数：+19,154人 増加率：1.52倍 b. 増加数：+16,734人 増加率：1.46倍 （通年） ①外国人留学生数、外国人留学生割合 2013年度：49,608人、8.8% 2019年度：82,835人、14.6% 2021年度：71,633人、12.8% ②外国人留学生数の変化 a. 増加数：+33,227人 増加率：1.67倍 b. 増加数：+22,025人 増加率：1.44倍	・SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりも外国人留学生割合が大きい ・両タイプとも外国人留学生数、外国人留学生割合は2019年度まで順調に増加 ・SGU実施前後でタイプ毎の推移に大きな相違はない	・SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも外国人留学生割合が大きい ・SGU実施前後で単科大学、総合大学の推移に大きな相違はない	・国公私別でみると、SGU実施前から2019年度まで公立⇒国立⇒私立の順番で外国人留学生率が高い ・ただし、通年での2013年度から2019年度までの増加率の点では、外国人留学生数とその割合は公立ではほぼ変化がない一方で、国立および私立に関しては1.5倍以上増加している	・SGU非採択校と比較し割合も高く、また<u>2013年度から2022年度までの増加幅も大きい</u>

2. 分析結果（詳細）

項目	指標名	①各年度の数値・割合 ②SGU前後の数値の変化 a. 2019年度−2013年度 b. 最新年度−2013年度	タイプ別	単科総合	国公私	SGU非採択校との比較
国際化関連	⑤ 日本人学生に占める留学経験者数・割合（通年）	①留学経験者数、留学経験者割合 2013年度：16,077人、3.1% 2019年度：29,035人、5.7% 2021年度：10,613人、2.1% ②留学経験者数の変化 a. 増加数：+12,958人 増加率：1.81倍 b. 増加数：▲5,464人 増加率：0.66倍	・両タイプとも2019年度まで留学経験者数、留学経験者割合は増加 ・SGU実施前からBタイプの方がAタイプよりも留学経験者割合が大きい ・SGU実施前後でタイプ毎の推移に大きな相違はない	・SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも留学経験者割合が大きい ・単科大学は2019年度の留学経験者数および留学経験者割合がSGU実施前と比較し約3倍と大きく増加	・SGU実施前より公立⇒私立⇒国立の順番で留学経験者割合が高い ・2019年度とSGU実施前を比較すると、公立は留学経験者人数および割合にほぼ変化がないが、国立・私立は増加	・SGU非採択校と比較しSGU採択大学の方が留学経験者割合はわずかに高くなっている。
国際化関連	⑥−1 大学間協定に基づく派遣日本人学生数・割合（通年）	①派遣日本人学生数、派遣日本人学生割合 2013年度：14,503人、2.6% 2019年度：25,989人、4.6% 2021年度：11,222人、2.0% ②派遣数の変化 a. 増加数：+11,486人 増加率：1.79倍 b. 増加数：▲3,281人 増加率：0.77倍	・SGU実施前からBタイプの方がAタイプよりも派遣学生数および派遣学生割合が大きい ・両タイプとも2019年度派遣学生数と割合は順調に増加 ・SGU実施前後でタイプ毎の推移に大きな相違はない	・SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも派遣学生割合が大きい ・SGU実施前から2019年度にかけての増加率の点でも、派遣学生数および派遣学生割合のいずれも単科大学のほうが大きく、2倍以上増加	・SGU実施前より公立⇒私立⇒国立の順番で割合が高い ・しかし、公立はSGU実施前から2019年度にかけて派遣学生数およびその割合を減少させているが、国立・私立は2019年度まで派遣学生数と割合を順調に増加させている	・SGU非採択校と比較し、SGU採択大学の方が割合は高く、全体の底上げに繋がっている

2. 分析結果（詳細）

項目	指標名	①各年度の数値・割合 ②SGU前後の数値の変化 a. 2019年度−2013年度 b. 最新年度−2013年度	タイプ別	単科総合	国公私	非対象大学との比較
国際化関連	⑥-2 大学間協定に基づく受入外国人留学生数・割合（通年）	①受入外国人留学生数、受入外国人留学生割合 2013年度：8,740人、1.5% 2019年度：20,341人、3.6% 2021年度：13,666人、2.4% ②受入数の変化 a. 増加数：+11,601人 増加率：2.33倍 b. 増加数：+4,926人 増加率：1.56倍	・SGU実施前からBタイプの方がAタイプよりも受入留学生数およびその割合が大きい ・2019年度までは両タイプとも受入留学生数とその割合は増加。コロナ影響により、2020年度には一旦減少するも、2021年度では両タイプとも回復傾向にある	・単科・総合別でみると、SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも受入外国人留学生率が大きい ・2019年度までは両タイプとも受入学生数および受入留学生率は2倍以上増加している	・国公私別でみると、2013年度から2019年度まで公立⇒国立⇒私立の順番で受入外国人留学生率が高い ・一方、2019年度までの受入学生数およびその割合の増加率に関しては、国立と私立は2倍以上となっており、公立よりも増加幅が大きい	・SGU非採択校と比較し、SGU採択大学は外国人留学生割合が高くなっており、全体の平均の底上げに繋がっている
	⑦ 外国語による授業科目数・割合（通年）	①外国語授業科目数、外国語授業科目割合 2013年度：19,533科目、7.2% 2019年度：48,664科目、16.9% 2021年度：54,455科目、18.6% ②科目数の変化 a. 増加数：+29,131科目 増加率：2.49倍 b. 増加数：+34,922科目 増加率：2.79倍	・SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりも外国語による授業科目数およびその割合が大きい ・両タイプとも2013年度から2021年度にかけて授業科目数と割合いずれも2倍以上増加 ・SGU実施前後でタイプ毎の推移に大きな相違はい	・SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも割合が大きい ・2013年度と2021年度を比較した際の授業科目数とその割合の増加率については総合大学のほうが大きく約2.5倍となっている。	・SGU実施前より公立⇒国立⇒私立の順番で割合が高い ・2013年度から2021年度までの伸び率に関しては国立大学が最も大きく、科目数とその割合を約3倍にまで増やしている	・SGU非採択校の割合が3.3%であるのに対し、SGU採択大学は15%以上と高い

2. 分析結果（詳細）

項目	指標名	①各年度の数値・割合 ②SGU前後の数値の変化 a. 2019年度−2013年度 b. 最新年度−2013年度	タイプ別	単科総合	国公私	非対象大学との比較
国際化関連	⑧−1 外国語のみで卒業できるコースの設置数・割合 （5/1時点）	①外国語のみで卒業可能なコース数、 外国語のみで卒業可能なコース割合 2013年度：652コース、18,9% 2019年度：1,058コース、28.3% 2021年度：1,147コース、30.9% ②コース設置数の変化 a. 増加数：+406コース 増加率：1.62倍 b. 増加数：+495コース 増加率：1.76倍	・SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりも外国語のみで卒業できるコース設置数およびその割合が大きい ・一方で、2013年度から2022年度までの増加率の点からは、コース設置数およびその割合はBタイプの方が大きくなっており、約2倍程度増加	・SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも外国語のみで卒業できるコースの設置割合が大きい ・2013年度から2022年度でのコース設置数とその割合の増加率については、総合大学のほうが大きく約2倍となっている	・SGU実施前より公立⇒国立⇒私立の順に外国語のみで卒業できるコースの設置割合が高い ・一方、公立と比較し国立と私立は2013年度から2022年度の増加幅は大きい	・外国語のみで卒業できる課程の設置割合は、SGU非採択校と比較しSGU採択大学の割合が20%以上も高く、全体の底上げに繋がっている
	⑧−2 外国語のみで卒業できるコースの在籍者数・割合 （5/1時点）	①外国語のみで卒業可能なコース在籍者数、 外国語のみで卒業可能なコース在籍割合 2013年度：22,252人、3.9% 2019年度：41,950人、7.4% 2021年度：46,382人、8.3% ②在籍者数の変化 a. 増加数：+19,698人 増加率：1.89倍 b. 増加数：+24,130人 増加率：2.08倍	・タイプ別でみると、SGU実施前はAタイプの方がBタイプよりも外国語のみで卒業できるコースの在籍者数およびその割合が大きかったが、2013年度から2022年度にかけてBタイプは2.5倍程度増加した結果、2022年度では逆転し、Bタイプの方が在籍者数とその割合が大きくなっている。	・SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも外国語のみで卒業できるコースの在籍者割合は高い。 ・一方で、2013年度から2022年度にかけて在籍者数とその割合の増加率は総合大学が約3倍と大きい	・2013年度では公立⇒国立⇒私立の順に外国語のみで卒業できるコースの在籍者割合は高かったが、2022年度では公立⇒私立⇒国立の順に高くなっている。 ・2013年度から2022年度にかけて在籍者数とその割合の増加率では、国立と私立は公立に比べて伸び幅が大きく、2倍程度まで増加。	−

2. 分析結果（詳細）

項目	指標名	①各年度の数値・割合 ②SGU前後の数値の変化 a. 2019年度−2013年度 b. 最新年度−2013年度	タイプ別	単科総合	国公私	非対象大学との比較
国際化関連	⑨ 外国語力基準を満たす学生数・割合	①外国語力基準を満たす学生数、 外国語力基準を満たす学生割合 2013年度：78,262人、13.8% 2019年度：134,520人、23.6% 2021年度：155,945人、27.9% ②学生数の変化 a. 増加数：+56,258人 増加率：1.72倍 b. 増加数：+77,683人 増加率：1.99倍	・タイプ別でみると、SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりも外国語力基準を満たす学生数およびその割合が大きい ・一方で、2013年度から2021年度までの外国語力基準を満たす学生数およびその割合の増加率の点からは、Bタイプの方が大きく、3倍以上増加している。	・SGU実施前は総合大学の方が単科大学よりも外国語力基準を満たす学生割合が大きかったが、2017年度より単科大学が逆転 ・2013年度から2021年度の外国語力基準を満たす学生数および学生割合のいずれの増加率の点においても、単科大学のほうが大きく約3倍となっている	・2013年度は私立⇒公立⇒国立の順に外国語力基準を満たす学生割合が高かったが、公立が2013年度から2021年度にかけてその割合を約3倍にまで増加させたことから、2021年度では公立⇒私立⇒国立の順に高くなっている	・外国語力基準を設定している大学はSGU非採択校では6.7%しかないが、SGU採択大学は全大学で設定 ・設定している大学における外国語力基準を満たす学生割合はSGU採択大学のほうが高く、特にタイプAとSGU非採択校では10%以上の差がある
ガバナンス関連	⑭−1 年俸制導入　年俸制適用教員数・割合（5/1時点）	①年俸制適用教員数、 年俸制適用教員割合 2013年度：7,676人、17.1% 2019年度：14,513人、31.3% 2022年度：19,135人、41.0% ②教員数の変化 a. 増加数：+6,837人 増加率：1.89倍 b. 増加数：+11,459人 増加率：2.49倍	・SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりも年俸制適用教員数およびその割合が大きい ・2013年度から2022年度にかけて、年俸適用職員数およびその割合のいずれもBタイプのほうが増加率が大きく、3.5倍も増加	・2013年度は総合大学の方が単科大学よりも年俸制適用教員割合が大きかったが、単科大学は2022年度までで約5倍程度増加したことにより、単科大学のほうが大きくなっている	・2013年度は公立⇒国立⇒私立の順番で年俸制適用教員割合が高かったが、その後国立大学が大きくその割合を伸ばし、2022年度では国立⇒公立⇒私立の順に割合が高くなっている	・年俸制を適用している大学はSGU非採択校では39.3%しかないが、SGU採択大学は全大学で設定 ・設定している大学における基準を満たす教員割合はSGU非採択校が30%未満であるのに対し、SGU大学では30%を超えている

2. 分析結果（詳細）

項目	指標名	①各年度の数値・割合 ②SGU前後の数値の変化 a. 2019年度−2013年度 b. 最新年度−2013年度	タイプ別	単科総合	国公私	非対象大学との比較
ガバナンス関連	⑭−2 年俸制導入年俸制適用職員数・割合（5/1時点）	①年俸制適用職員数、年俸制適用職員割合 2013年度：2,230人、9.2% 2019年度：3,669人、14.5% 2022年度：4,377人、16.9% ②職員数の変化 a. 増加数：+1,439人 増加率：1.65倍 b. 増加数：+2,147人 増加率：1.96倍	・SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりも年俸制適用職員数とその割合が大きい ・2013年度から2022年度にかけての年俸制適用職員数とその割合の増加率については、Bタイプの方がAタイプよりも大きく増加しており、約2.5倍程度伸びている。	・SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも年俸制適用職員割合が大きい ・増加率の点では、総合大学の方が伸び率が大きく、2013年度から2022年度まで年俸制適用職員数およびその割合が約2倍と大きく増加させている	・SGU実施前より公立⇒国立⇒私立の順番で年俸制適用職員割合が高い ・国立および私立については当該割合を順調に増やしている一方で、公立大学はSGU実施前よりもその割合を減らしている	−
	⑯ 事務職員の高度化への取組外国語力基準を満たす専任職員数・割合	①外国語力基準を満たす職員数、外国語力基準を満たす職員割合 2013年度：2,080人、8.6% 2019年度：4,402人、17.4% 2022年度：5,234人、20.3% ②職員数の変化 a. 増加数：+2,322人 増加率：2.12倍 b. 増加数：+3,154人 増加率：2.52倍	・SGU実施前からBタイプの方がAタイプよりも外国語力基準を満たす専任職員割合が大きい ・2013年度から2022年度にかけての外国語力基準を満たす専任職員数とその割合の増加率については、Aタイプの方がBタイプよりも大きく増加しており、約2.5倍程度伸びている。	・SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも外国語力基準を満たす専任職員割合が大きい ・いずれの大学も外国語力基準を満たす専任職員数およびその割合は2013年度から2022年度までおよそ2倍にまで増加しており、順調に推移	・SGU実施前より公立⇒私立⇒国立の順番で外国語力基準を満たす専任職員割合が高い ・一方で、2013年度から2022年度までの外国語力基準を満たす専任職員数とその割合の増加率については、公立大学はほぼ変化がないのに対し国立大学は約3倍、私立大学は約2倍と大きく増加	・外国語力基準を設定している大学はSGU非採択校では僅か1.9%しかないが、SGU採択大学は全大学で設定している ・設定している大学における基準を満たす職員割合も、SGU採択校と比較しSGU採択大学の方が大きくなっている

2. 分析結果（詳細）

項目	指標名	①各年度の数値・割合 ②SGU前後の数値の変化 a. 2019年度−2013年度 b. 最新年度−2013年度	タイプ別	単科総合	国公私	非対象大学との比較
教育の改革的取組関連	⑩ ナンバリング実施状況・割合 （5/1時点）	①ナンバリング実施科目数、ナンバリング実施科目割合 2013年度：23,939科目、11.2% 2019年度：214,196科目、95.5% 2021年度：225,700科目、97.8% ②科目数の変化 a. 増加数：+190,257科目 増加率：8.95倍 b. 増加数：+201,761科目 増加率：9.43倍	・SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりもナンバリング実施科目数およびその割合が大きい ・両タイプとも2017年度までで急増しその後は緩やかに増加、2022年度にはほぼ100%となっている	・SGU実施前は単科大学、総合大学ともナンバリング実施科目割合は15%未満であったが、2017年度には90%以上に急増し、2022年度にはほぼ100%となっている。	・国公私別でみると、SGU実施前は公立⇒私立⇒国立の順にナンバリング実施科目割合が高かったが、2022年度では公立⇒国立⇒私立の順に変化。なお、ナンバリング実施科目割合は2022年度にはいずれのタイプもほぼ100%と高い水準になっている	・全体として、ナンバリング実施割合は8割を超えており高い水準で推移しているが、さらにSGU採択大学は95%以上と非常に高くなっている
	⑪ シラバスの英語化の状況・割合 （5/1時点）	①シラバスの英語化実施科目数、シラバスの英語化実施科目割合 2013年度：37,560科目、11.8% 2019年度：171,752科目、49.7% 2021年度：233,976科目、67.7% ②科目数の変化 a. 増加数：+134,192科目 増加率：4.57倍 b. 増加数：+196,416科目 増加率：6.23倍	・SGU実施前はAタイプの方がBタイプよりもシラバスの英語化を実施している科目数とその割合が高かったが、Bタイプは2013年度から2022年度までに約8倍と伸びたことで、2022年度はBタイプのほうがAタイプよりも大きくなっている。	・SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりもシラバスの英語化を実施している科目割合が大きい ・単科大学については2017年度で既に2023年度目標を達成	・SGU実施前より公立⇒国立⇒私立の順番でシラバスの英語化を実施している科目割合が高い ・公立については、シラバスの英語化を実施している科目割合がほぼ100%に達している	・シラバスを英語化している科目割合に関し、SGU非採択校は9. 7%であるのに対し、SGU採択大学は60%以上を超え、高い割合となっている

2. 分析結果（詳細）

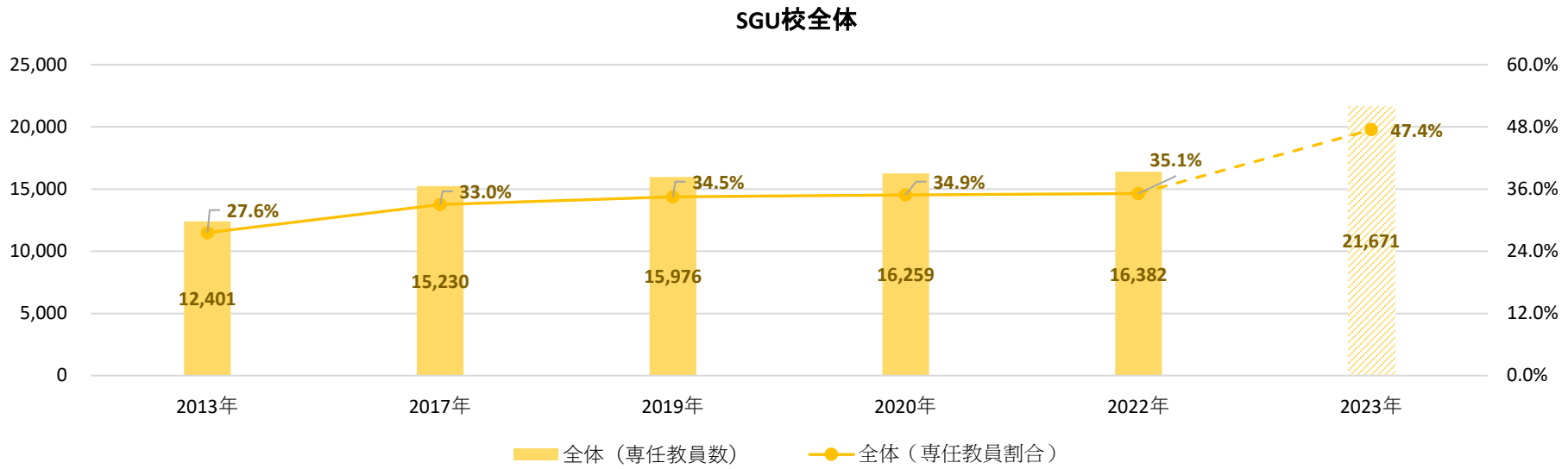
項目	指標名	①各年度の数値・割合 ②SGU前後の数値の変化 a. 2019年度-2013年度 b. 最新年度-2013年度	タイプ別	単科総合	国公私	非対象大学との比較
教育の改革的取組関連	⑱ TOEFL等外部試験の学部入試への活用対象学部定員数・割合 （通年）	①外部入試活用学部定員数、外部入試活用学部定員割合 2013年度：7,360人、7.8% 2019年度：25,803人、26.1% 2021年度：33,912人、34.4% ②定員数の変化 a. 増加数：+134,192人 増加率：3.51倍 b. 増加数：+196,416人 増加率：4.61倍	・SGU実施前からBタイプの方がAタイプよりも英語外部試験を学部入試に活用する学部の定員数とその割合が大きい ・2013年度から2021年度までの増加率の点からも、Bタイプの増加幅は約5倍とAタイプより大きい	・2013年度は単科大学の方が総合大学よりも英語外部試験を学部入試に活用する学部の定員割合が大きかったが、総合大学が当該割合を2022年度までにおよそ5倍程度増加させたことで、<u>2022年度には総合大学の方が高くなっている</u>	・SGU実施前は公立⇒私立⇒国立の順番で割合が高かったが、2022年度では私立⇒公立⇒国立に変化 ・SGU実施前から2022年度にかけ国立および私立は増加した一方で、公立はほぼ増加せず	・SGU非採択校における外部英語試験の入試利用率が26.7%であるのに対し、SGU採択大学は40%以上を超え、高い割合となっている

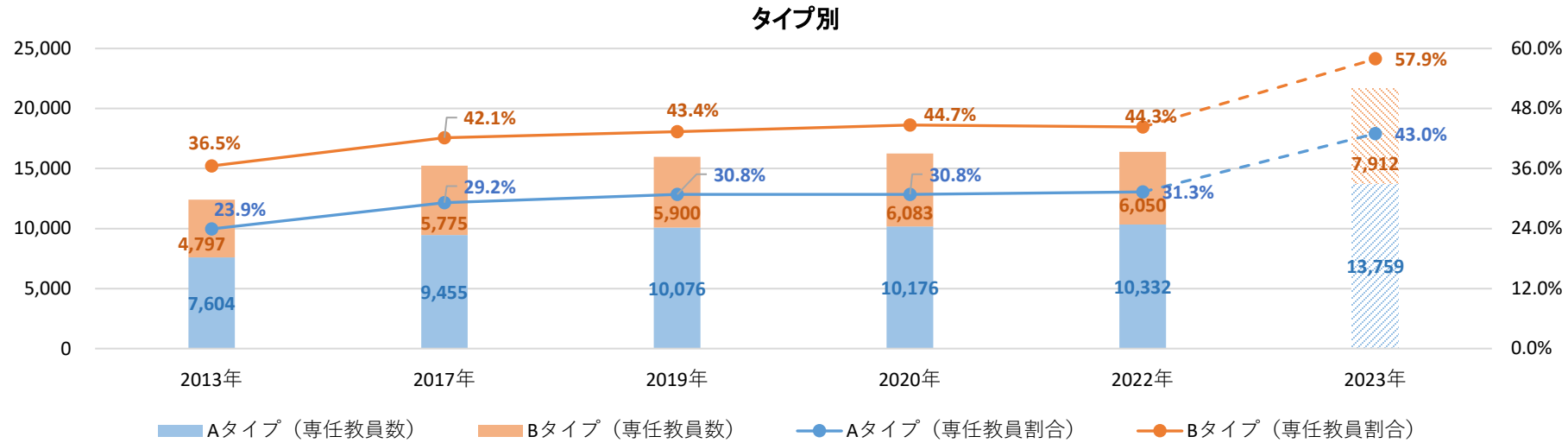
３．SGU採択大学の指標グラフ

国際化関連指標

①教員に占める外国人及び外国の大学で学位を取得した専任教員数・割合(5/1時点)

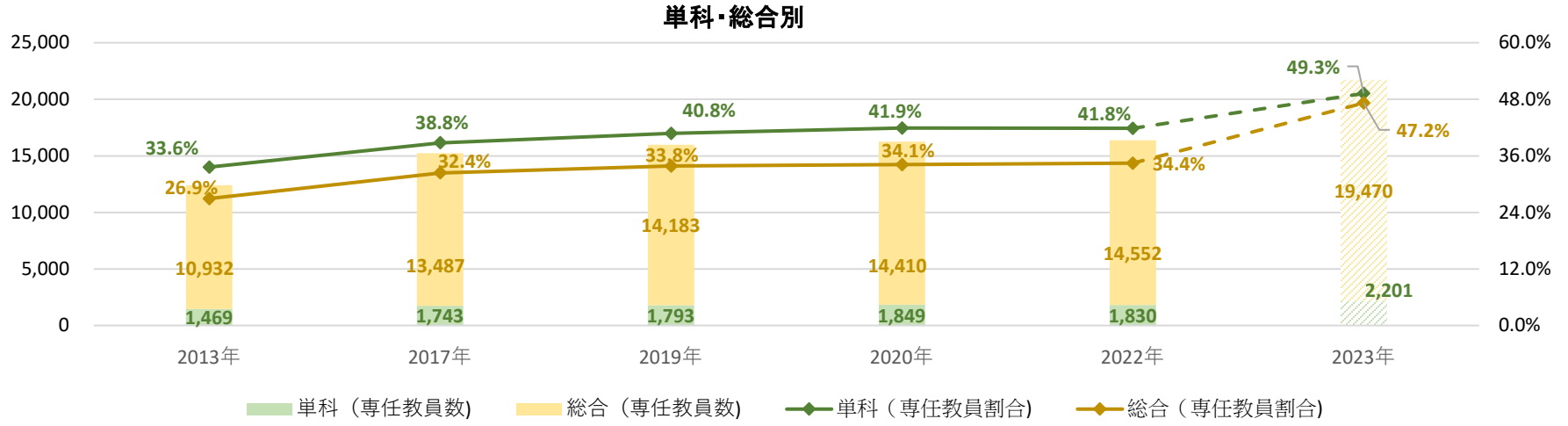
- 全体的に2013年度から2022年度まで外国人教員等人数および外国人教員等割合いずれも約1.3倍増加しており順調に推移。
- タイプ別でみると、SGU実施前から2022年度までBタイプの方がAタイプよりも外国人教員等割合が大きい。タイプ毎で推移に大きな相違もなく、いずれのタイプも順調に増加。

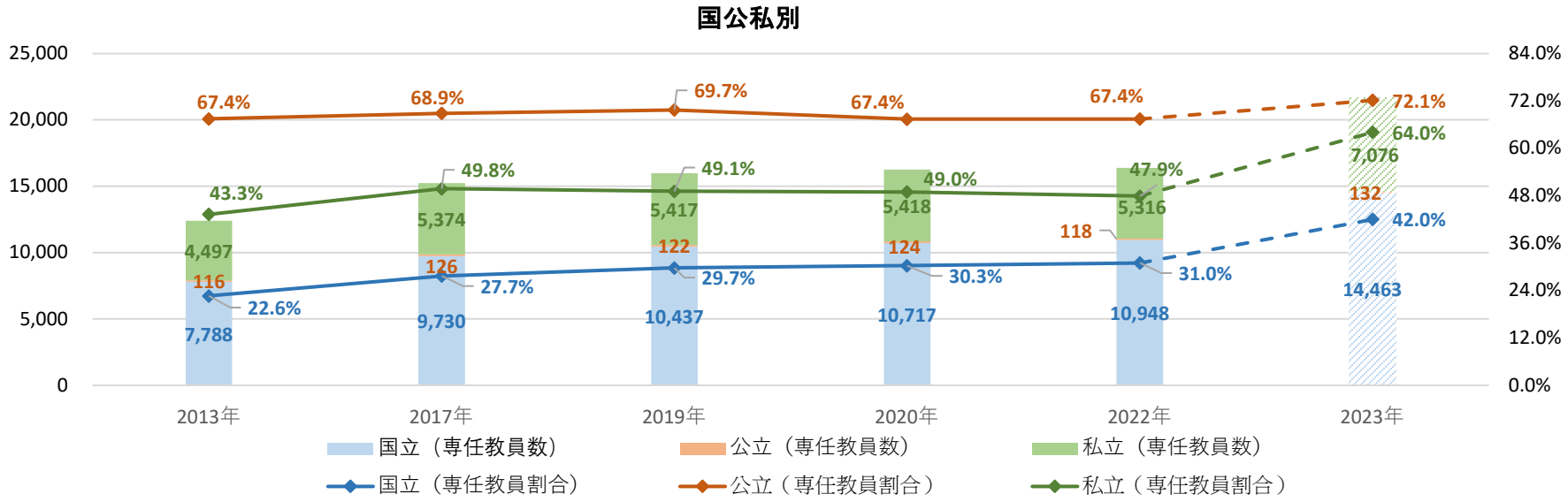




国際化関連指標 ①教員に占める外国人及び外国の大学で学位を取得した専任教員数・割合(5/1時点)

- 単科・総合別でみると、SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも外国人教員等割合が高く、その後の推移に大きな相違はない。
- 国公私別でみると、SGU実施前より公立⇒私立⇒国立の順番で割合が高い。ただし、SGU実施前と22022年度を比較すると、公立は外国人教員等の割合にほぼ変動がないのに対し、国立と私立については増加している。

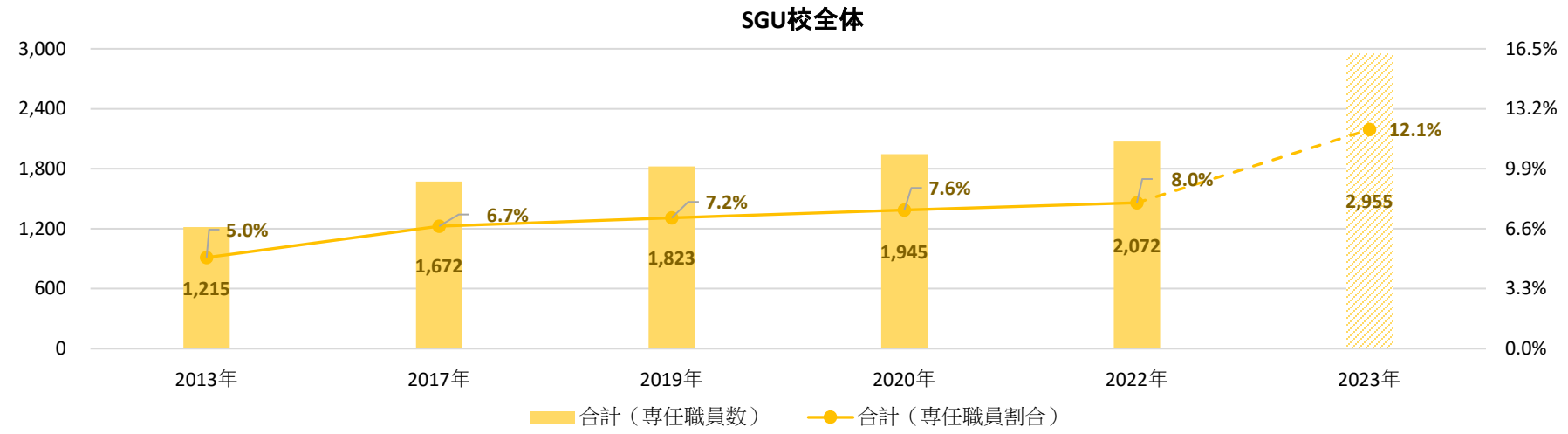


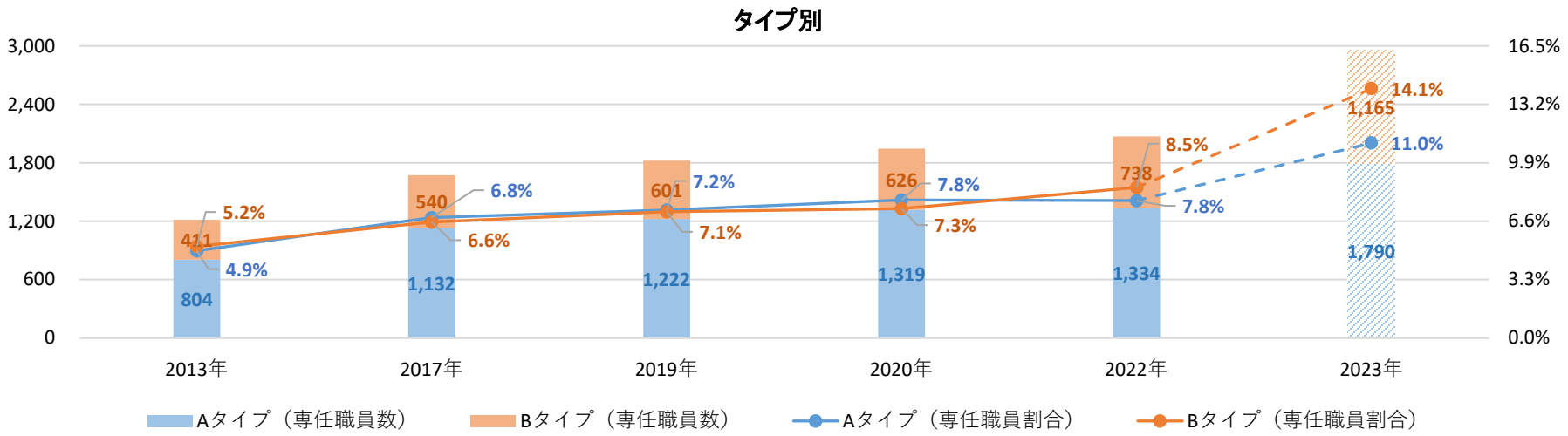


国際化関連指標

②職員に占める外国人及び外国の大学で学位を取得した専任職員数・割合(5/1時点)

- 全体的に2013年度から2022年度まで外国人職員等人数は約1.7倍にまで増加、また、外国人職員等割合も1.6倍ほど増加している。
- タイプ別でみると、SGU実施前はBタイプの方がAタイプよりもわずかに外国人職員等割合が大きく、2022年ではさらにその差が大きくなっている。

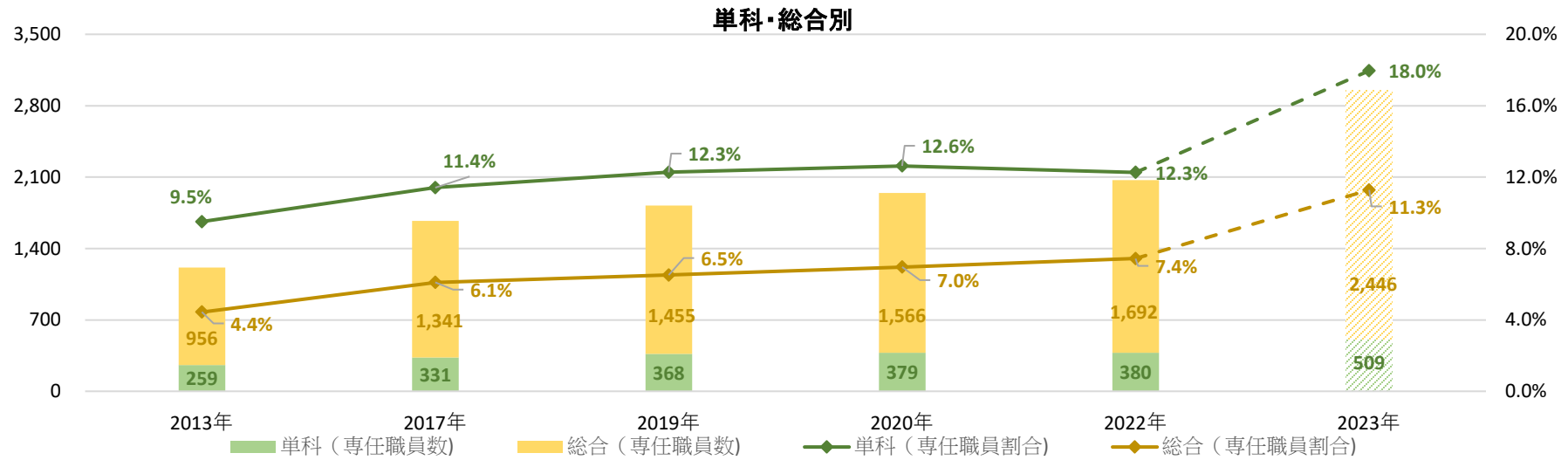


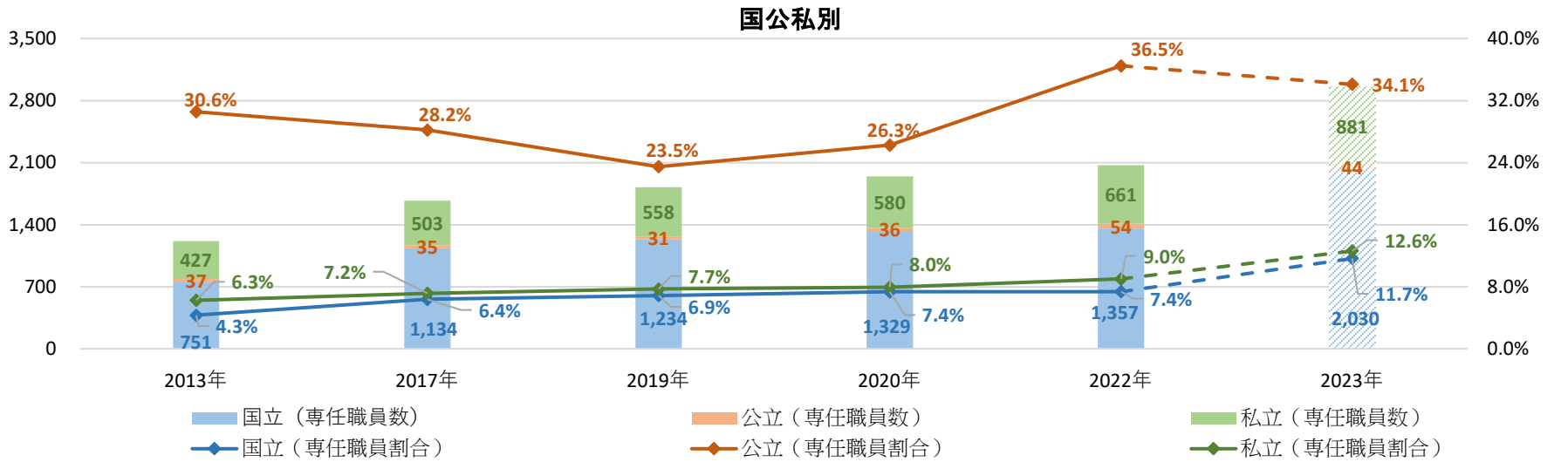


国際化関連指標

②職員に占める外国人及び外国の大学で学位を取得した専任職員数・割合(5/1時点)

- 単科・総合別でみると、SGU実施前より単科大学の方が総合大学より外国人職員等の割合が大きく、SGU実施前後で単科総合の推移に大きな相違はない。
- 国公私別でみると、SGU実施前より公立⇒私立⇒国立の順に外国人職員等の割合が高い。公立はSGU実施前と比較し2019年度まで外国人職員等人数および割合が減少していたが、2020年度から増加。一方で、私立・国立については人数・割合とも年々順調に増加。

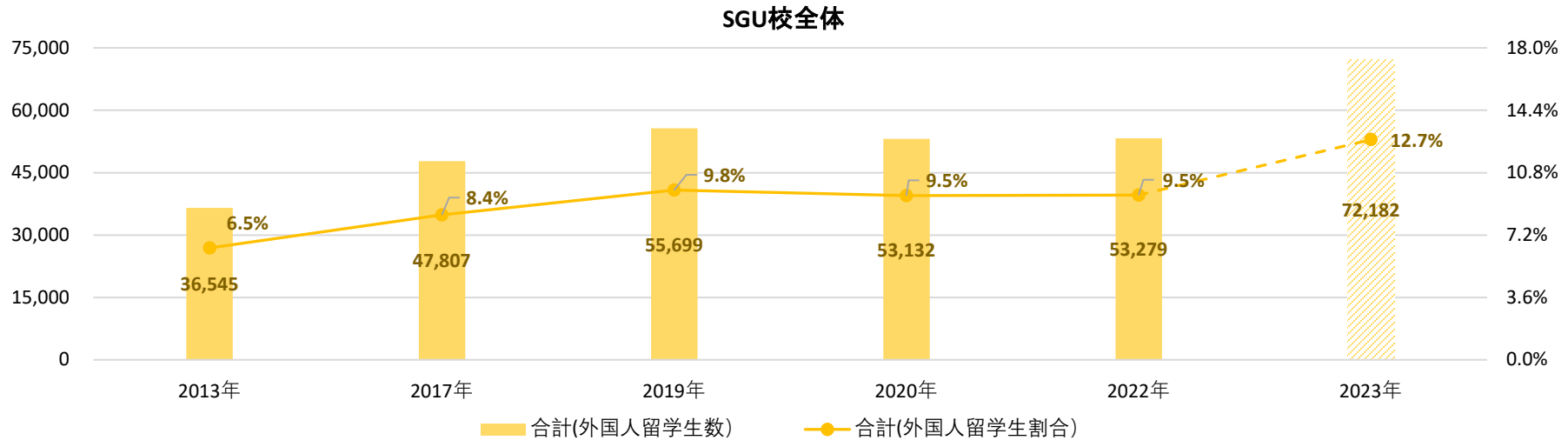


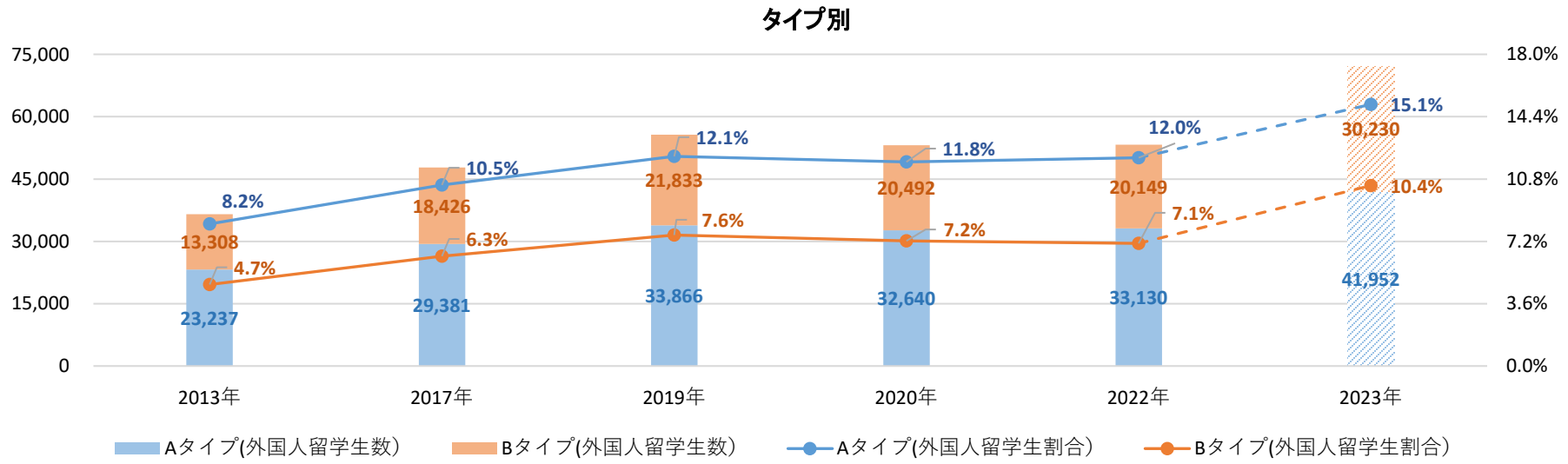


国際化関連指標

④－1 全学生に占める外国人留学生数・割合（5月1日時点）

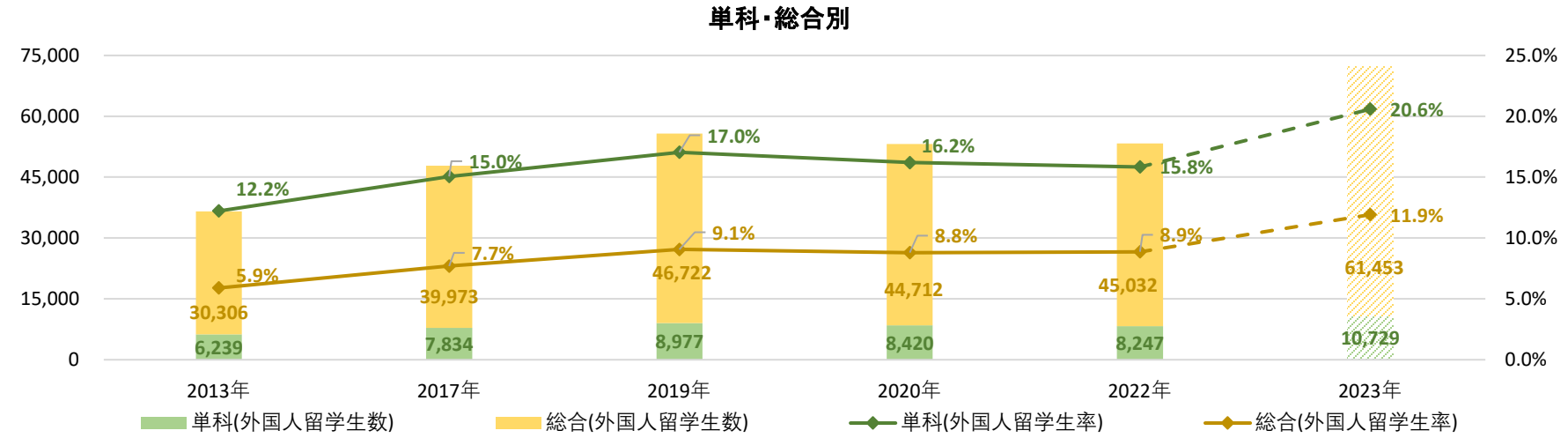
- 全体的に2013年度からコロナ影響前の2019年度まで外国人留学生数とその割合は順調に増加している。
- タイプ別でみると、SGU前からAタイプの方がBタイプよりも外国人留学生割合が大きく、両タイプとも2019年度まで順調に増加。

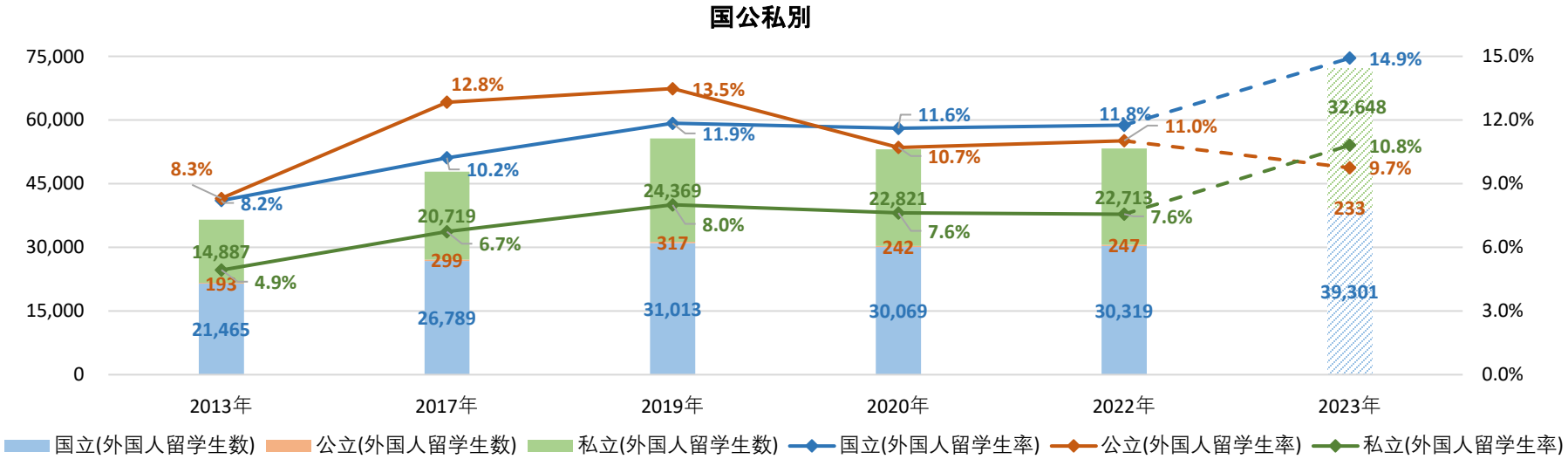




④－1 全学生に占める外国人留学生数・割合（5月1日時点）

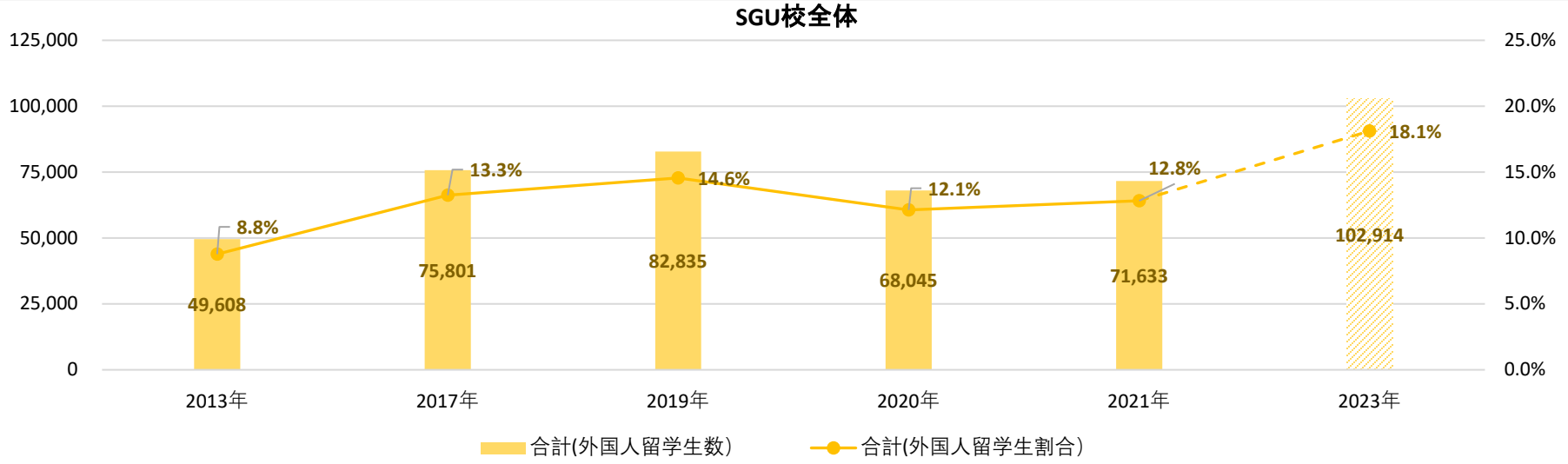
- 単科・総合別でみると、SGU実施前より単科大学の方が総合大学より外国人留学生率が大きく、SGU実施前後で単科総合の推移に大きな相違はない。
- 国公私別でみると、SGU実施前から2019年度まで公立⇒国立⇒私立の順番で外国人留学生率が高く、いずれのタイプも順調に増加している。

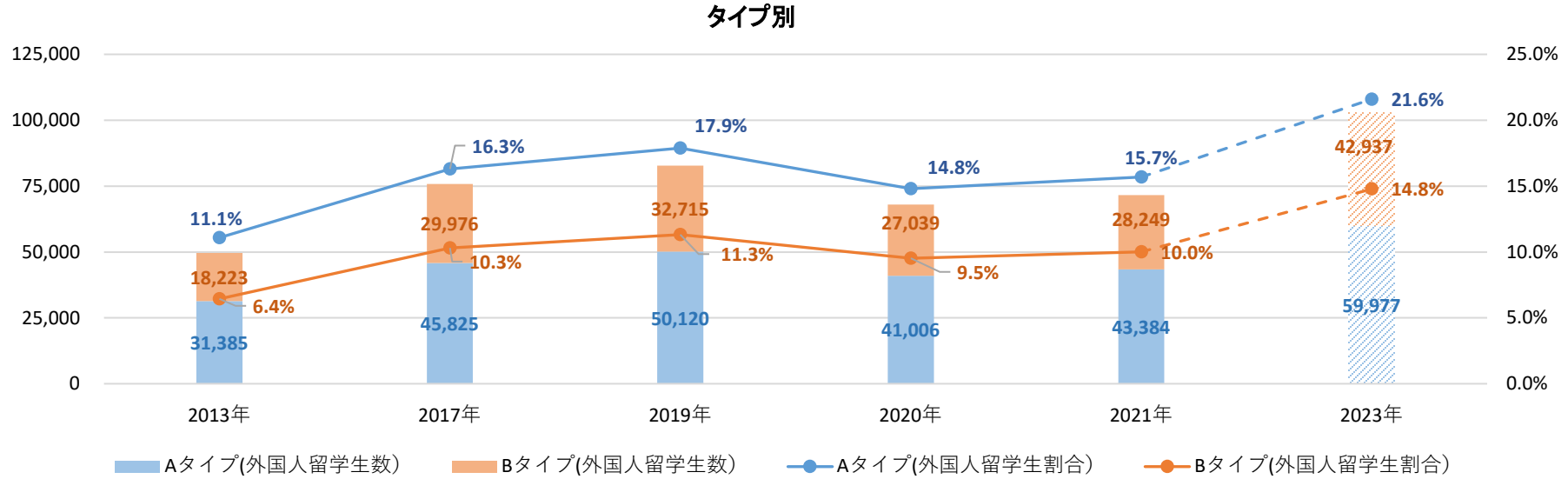




④－2 全学生に占める外国人留学生数・割合（通年）

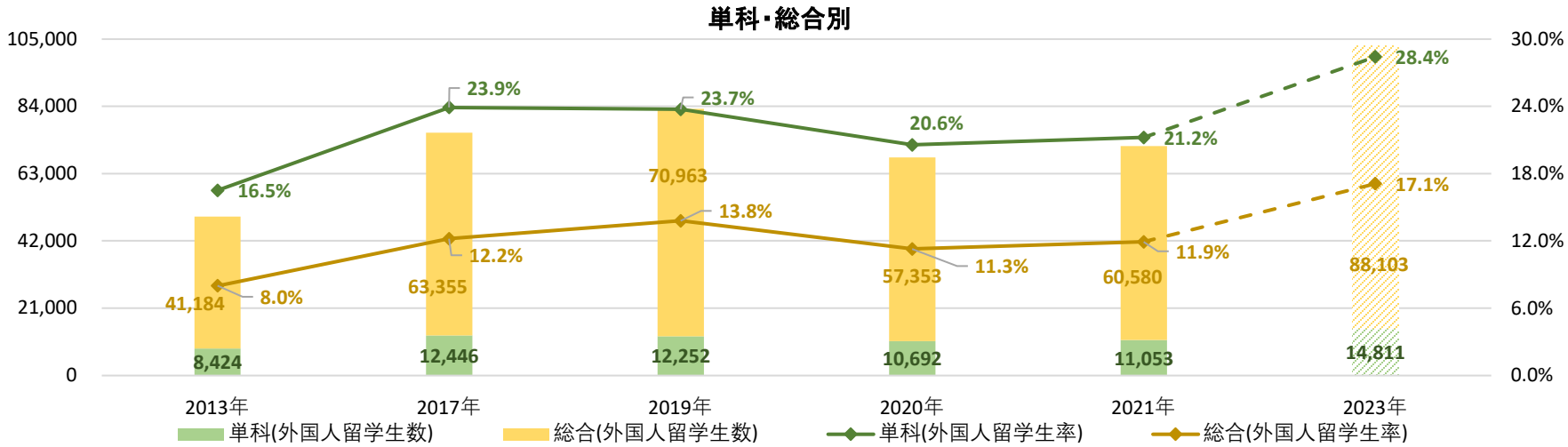
- 全体的に2013年度からコロナ影響前の2019年度まで外国人留学生数とその割合は順調に増加しており、留学生数とその割合のいずれも約1.7倍程度の増加率となっている。
- タイプ別でみると、SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりも割合が大きく、両タイプとも2019年度までは順調に増加。2020年度はコロナ影響により一旦減少に転じるも、2021年度には両タイプとも回復傾向にある。

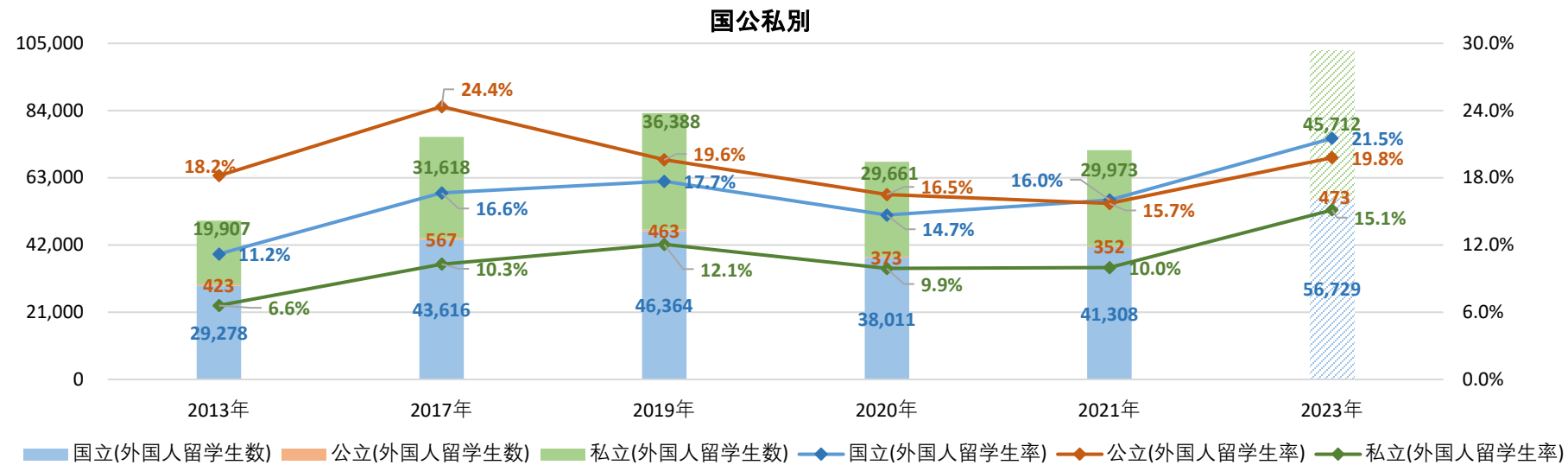




④－2 全学生に占める外国人留学生数・割合（通年）

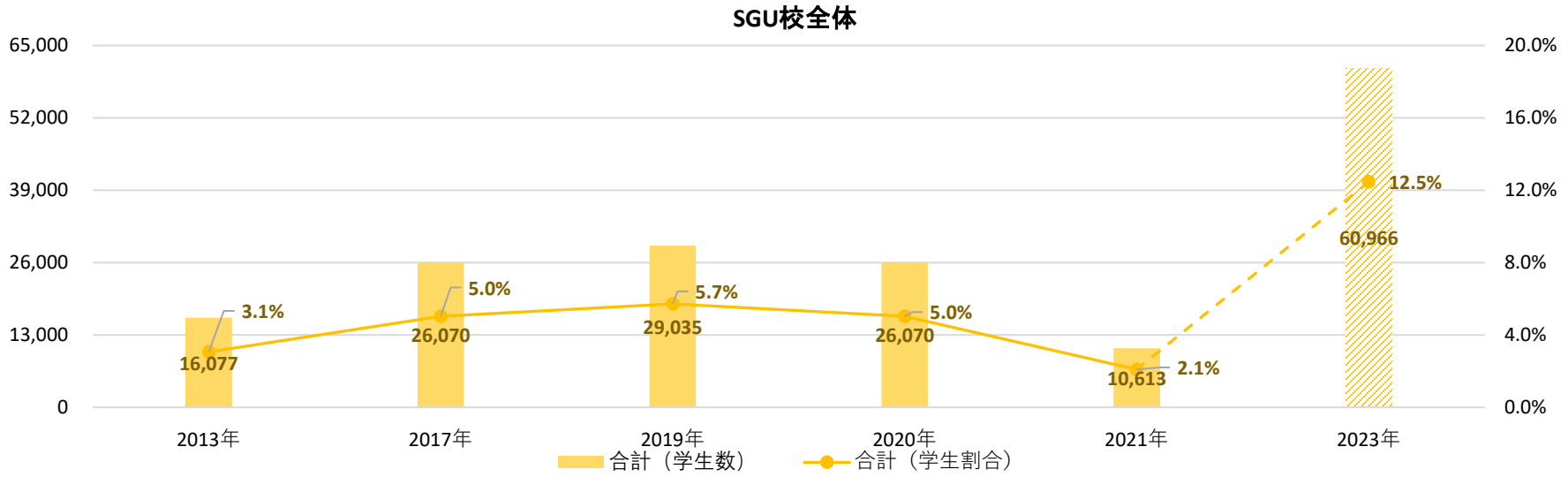
- 単科・総合別でみると、2013年度から2019年度まで単科大学の方が総合大学より外国人留学生率が高い。
- 国公私別でみると、SGU実施前から2019年度まで公立⇒国立⇒私立の順番で外国人留学生率が高い。ただし、2013年度から2019年度までの増加率の点では、外国人留学生数とその割合は公立ではほぼ変化がない一方で、国立および私立に関しては1.5倍以上増加している。

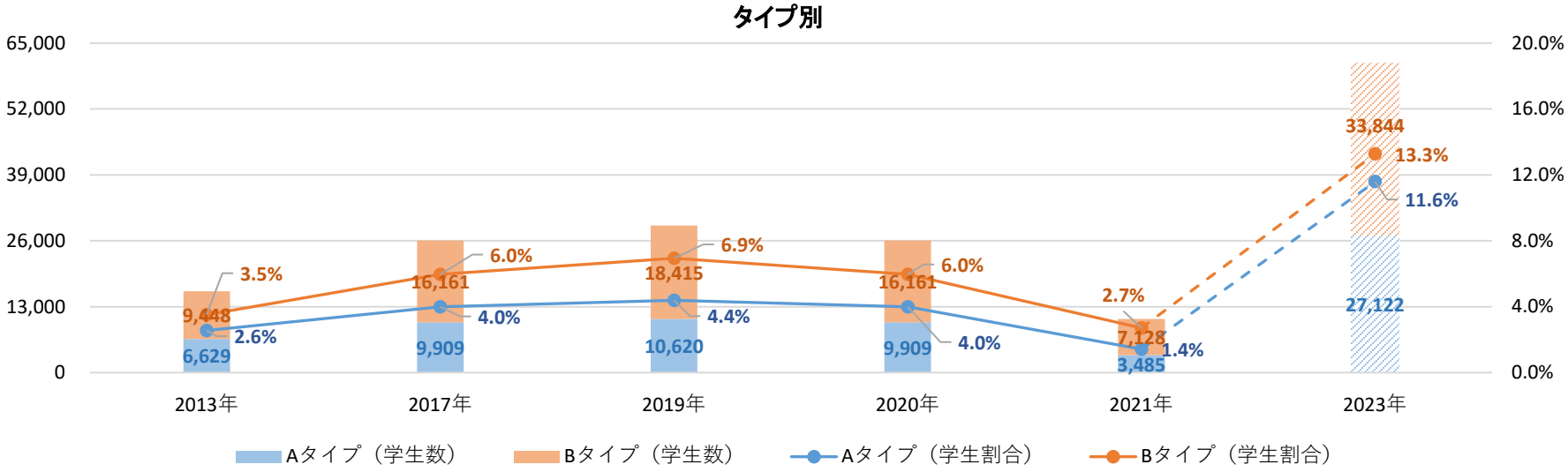




⑤ 日本人学生に占める留学経験者数・割合（通年）

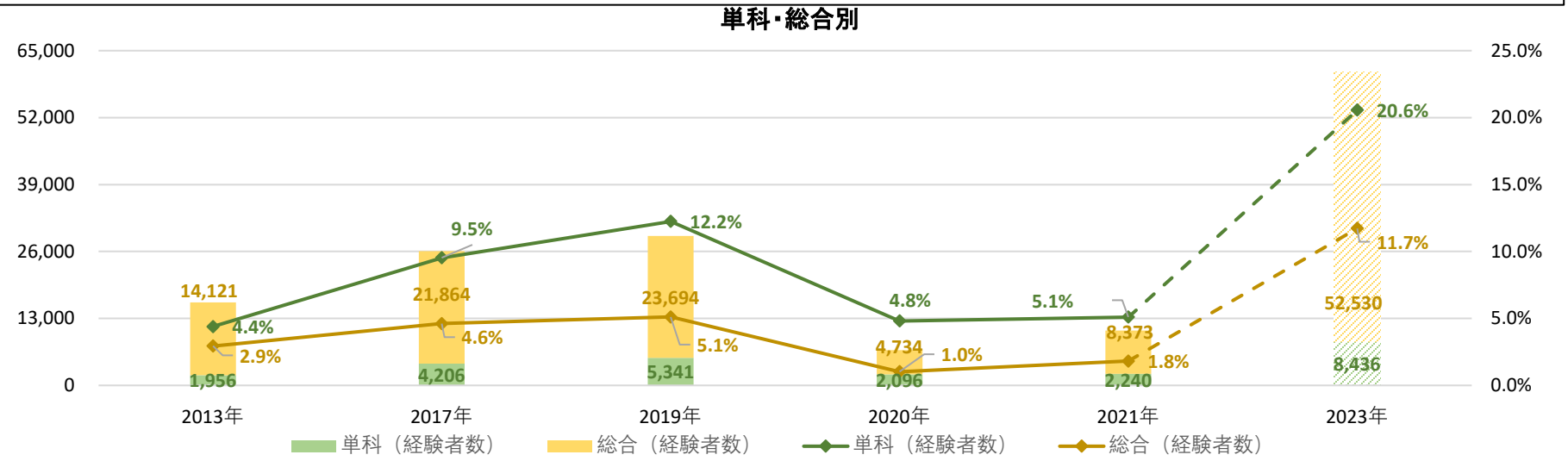
- 全体的に2013年度からコロナ影響前の2019年度まで留学経験者とその割合は約1.8倍まで増加しており、順調に推移。
- タイプ別でみると、SGU実施前からBタイプの方がAタイプよりも留学経験者割合が大きい。また、両タイプとも2019年度までは留学経験者数および留学経験者割合は順調に増加。

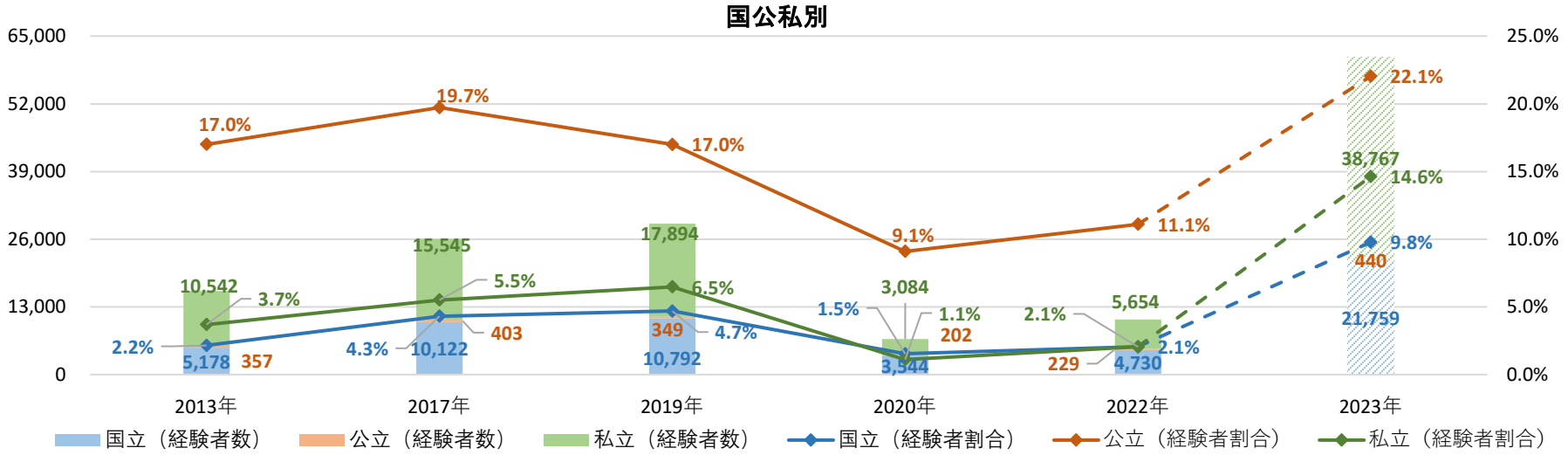




⑤ 日本人学生に占める留学経験者数・割合（通年）

- 単科・総合別でみると、SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも留学経験者率が大きい。また、単科大学は2019年度の留学経験者数および留学経験者割合ともSGU実施前と比較し約3倍と大きく増加している。
- 国公私別でみると、SGU実施前より公立⇒私立⇒国立の順に留学経験者率が高い。ただし、2019年度とSGU実施前を比較すると、公立は留学経験者人数および割合にほぼ変化がないが、国立および私立は順調に増加している。

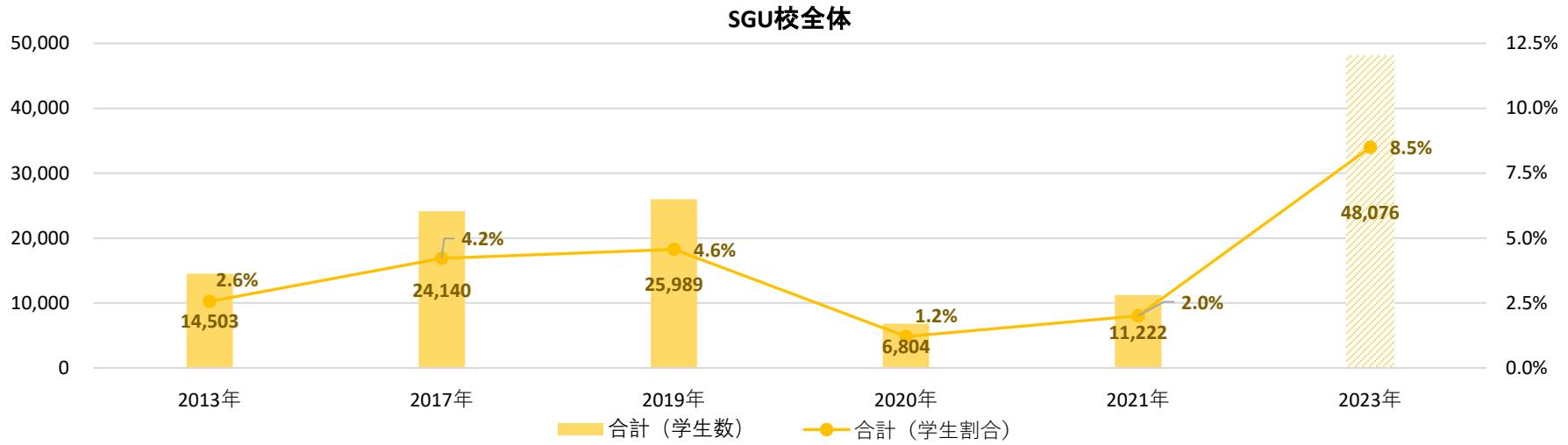


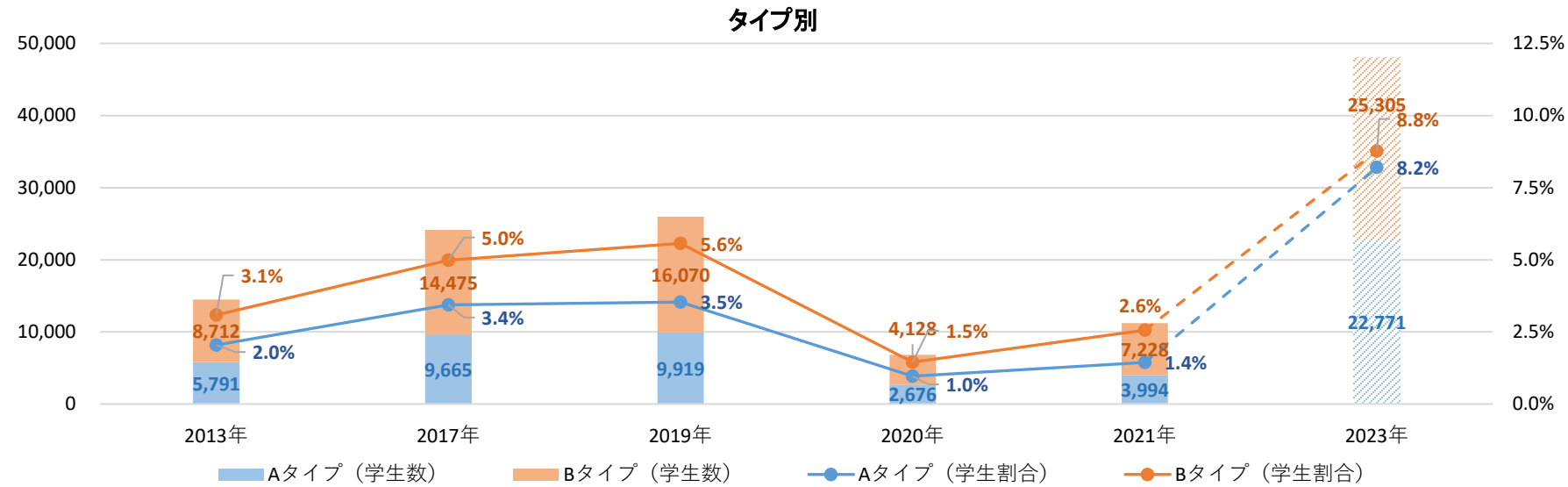


国際化関連指標

⑥-1 大学間協定に基づく派遣日本人学生数・割合（通年）

- 全体的に2013年度からコロナ影響前の2019年度まで派遣日本人学生数とその割合は増加。2020年度はコロナ影響でいったん大きく減少するも、2021年度では徐々に回復傾向にある。
- タイプ別でみると、SGU実施前からBタイプの方がAタイプよりも派遣学生数およびその割合が大きく、両タイプとも2019年度まで派遣学生数と割合は順調に増加している。

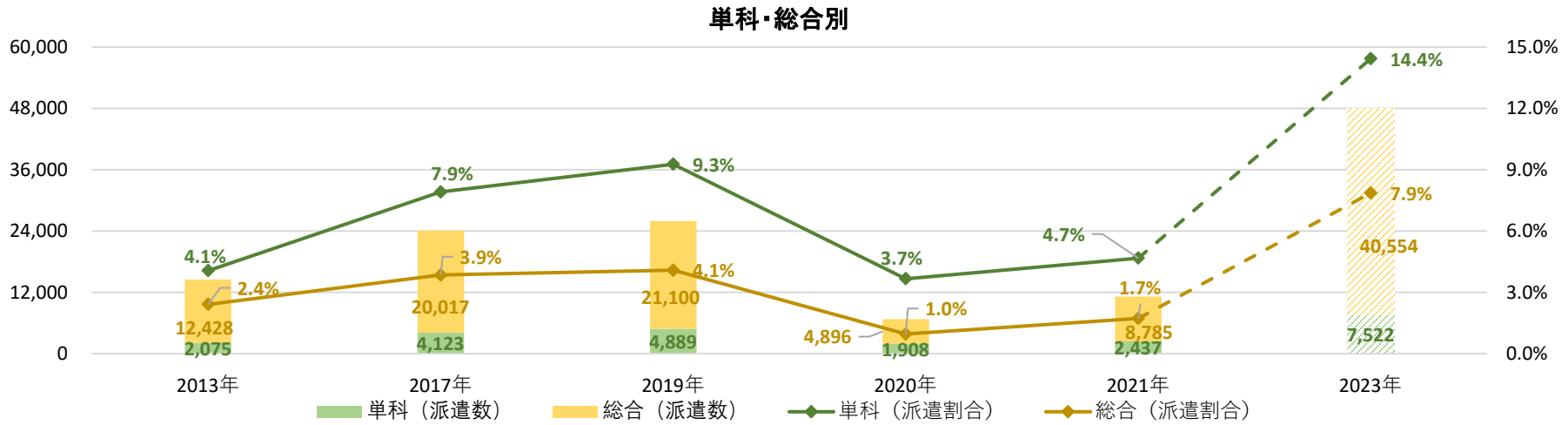


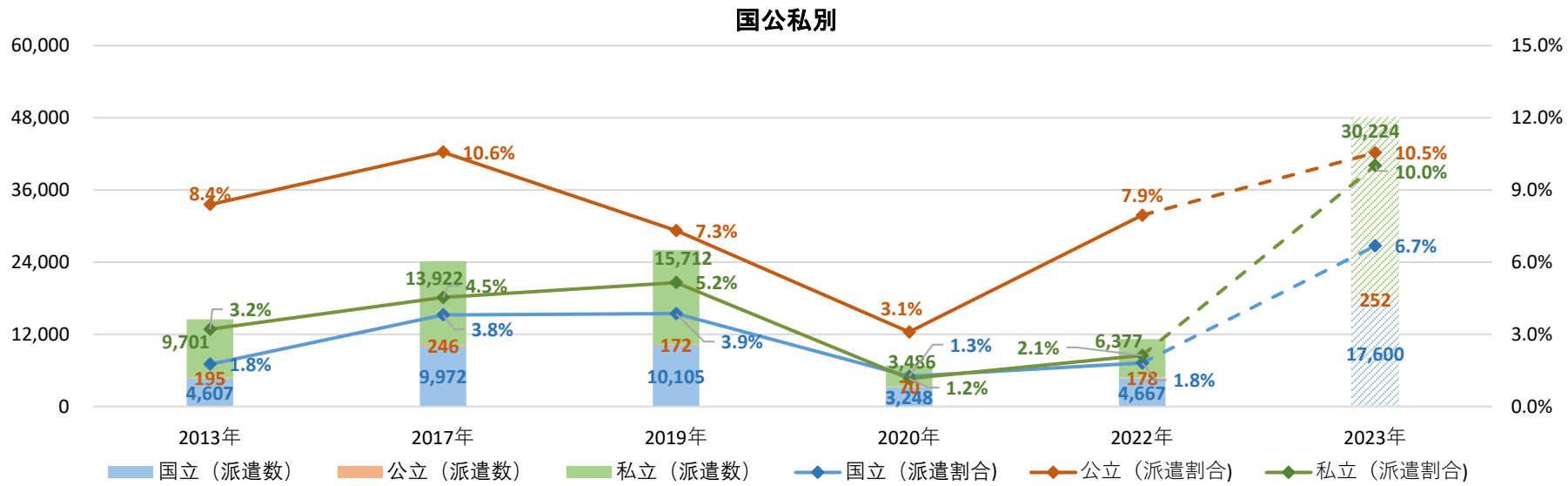


国際化関連指標

⑥-1 大学間協定に基づく派遣日本人学生数・割合（通年）

- 単科・総合別でみると、SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも派遣学生割合が大きい。また、SGU実施前から2019年度にかけての増加率の点でも、派遣学生数および派遣学生割合のいずれも単科大学のほうが大きく、2倍以上増加している。
- SGU実施前より公立⇒私立⇒国立の順番で割合が高い。しかし、公立はSGU実施前から2019年度にかけて派遣学生数およびその割合を減少させているが、国立・私立は派遣学生数と割合を順調に増加させている。

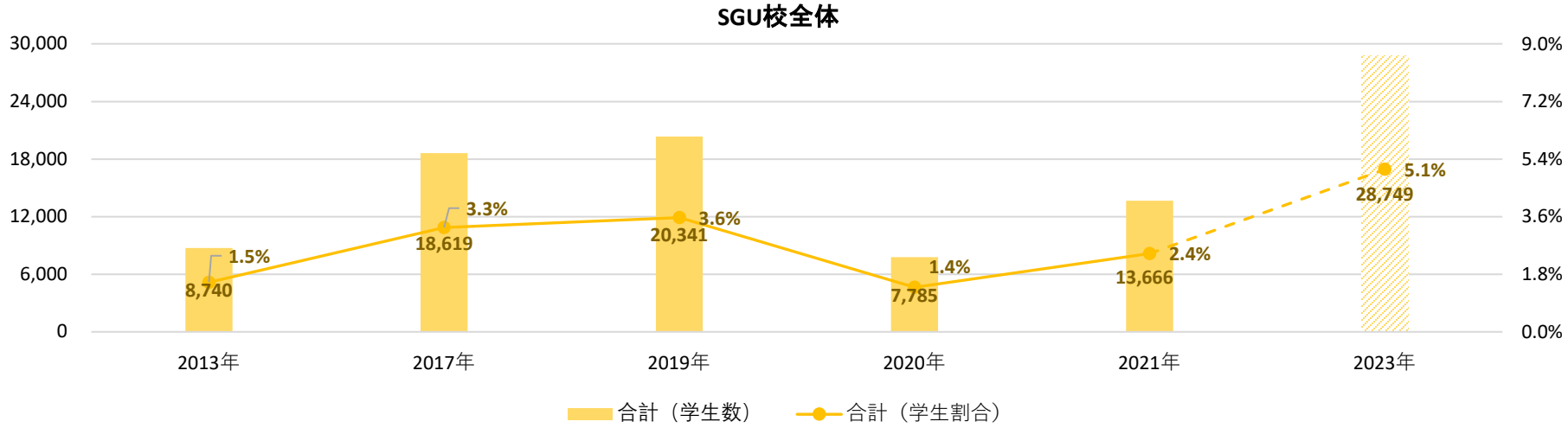


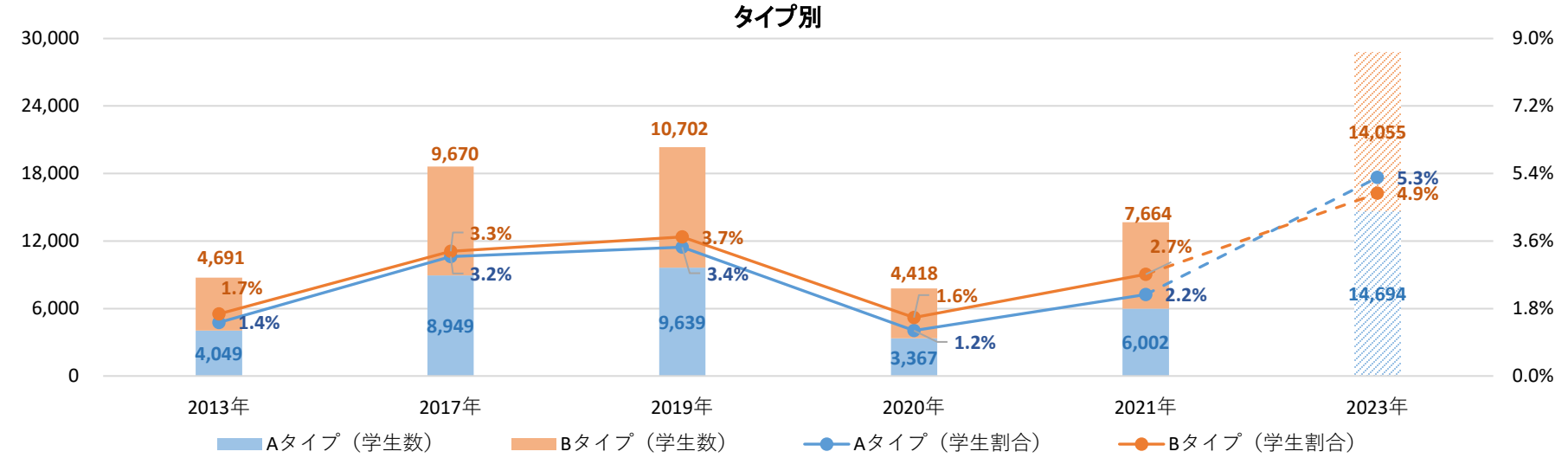


国際化関連指標

⑥-２ 大学間協定に基づく受入外国人留学生数・割合（通年）

- 全体的に2013年度からコロナ影響前の2019年度まで受入外国人学生数とその割合は2倍以上も増加。2020年度はコロナ影響でいったん大きく減少するも、2021年度では徐々に回復傾向にある。
- タイプ別でみると、SGU実施前からBタイプの方がAタイプよりも受入外国人留学生数および受入外国人留学生比率が高い。2019年度までは両タイプとも受入留学生数とその割合は順調に増加している。またコロナ影響により減少した受入留学生数とその割合は、2021年度にはいずれのタイプも回復傾向にある。

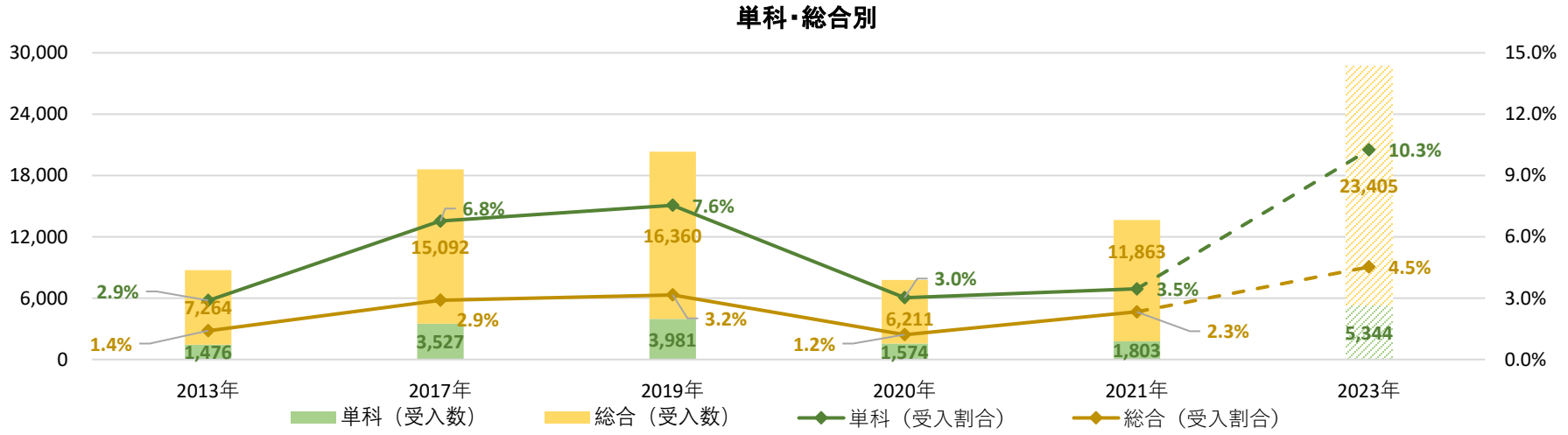


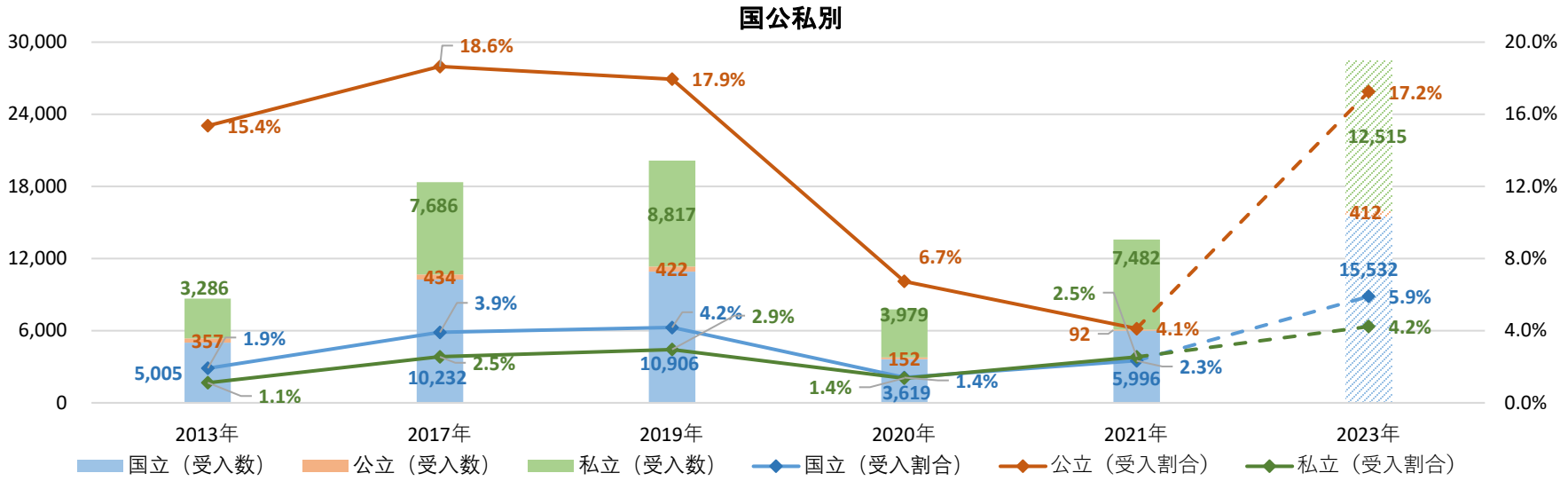


国際化関連指標

⑥-２ 大学間協定に基づく受入外国人留学生数・割合（通年）

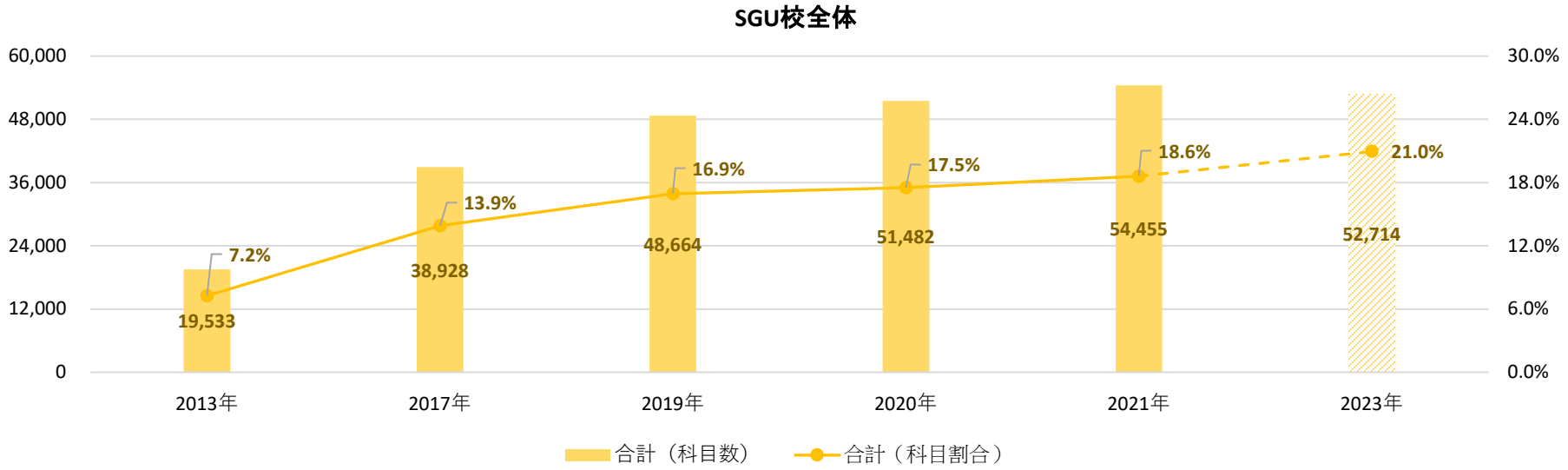
- 単科・総合別でみると、SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも受入外国人留学生率が大きい。また、2019年度までは両タイプとも受入学生数および受入留学生率は2倍以上増加している。
- 国公私別でみると、2013年度から2019年度まで公立⇒国立⇒私立の順番で受入外国人留学生率が高い。一方、2019年度までの受入学生数およびその割合の増加率に関しては、国立と私立は2倍以上となっており、公立よりも増加幅が大きい。

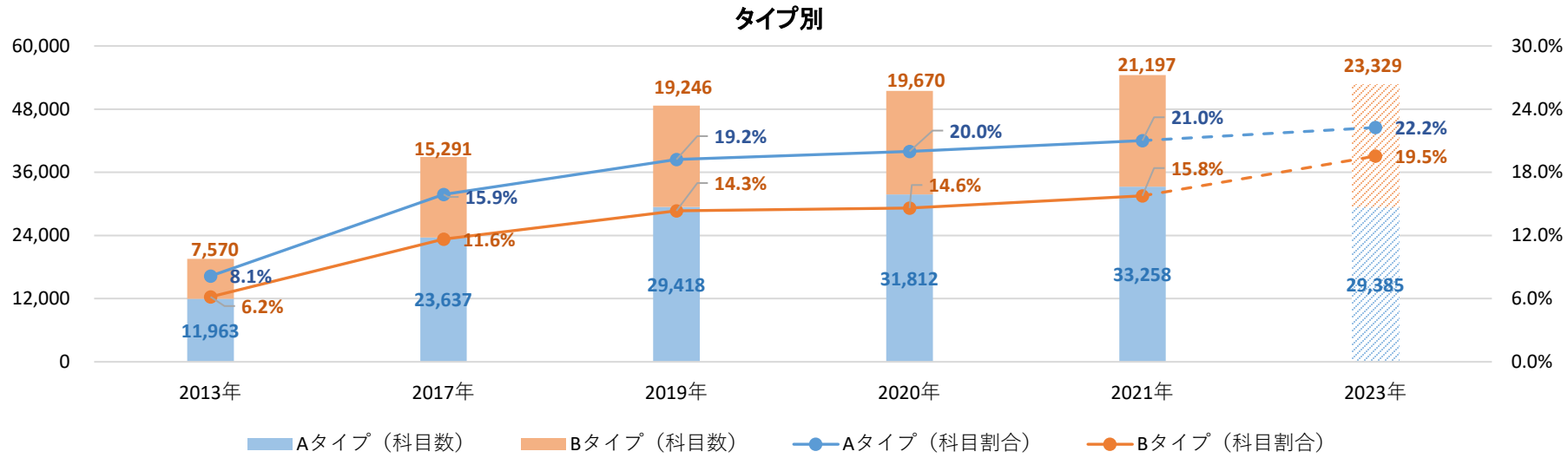




⑦ 外国語による授業科目数・割合(通年)

- 全体的に2013年度から2021年度まで外国語による授業科目数とその割合は順調に増加しており、2.5倍以上の伸び率となっている。
- タイプ別でみると、SGU前からAタイプの方がBタイプよりも外国語による授業科目数およびその割合が大きい。また、両タイプとも2013年度から2021年度にかけて授業科目数と割合いずれも2倍以上増加している。

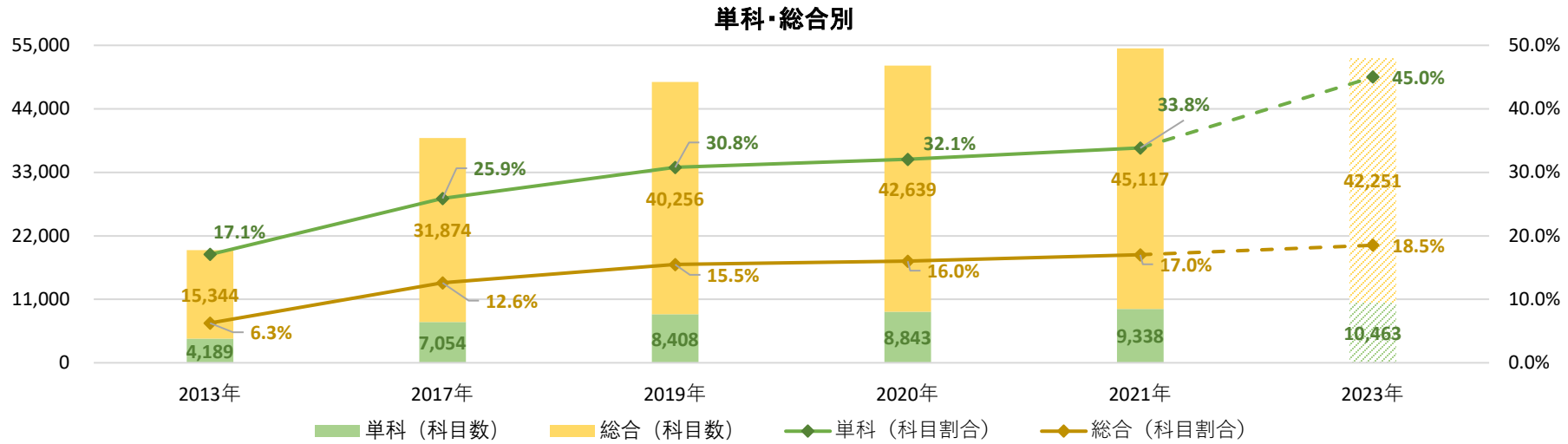


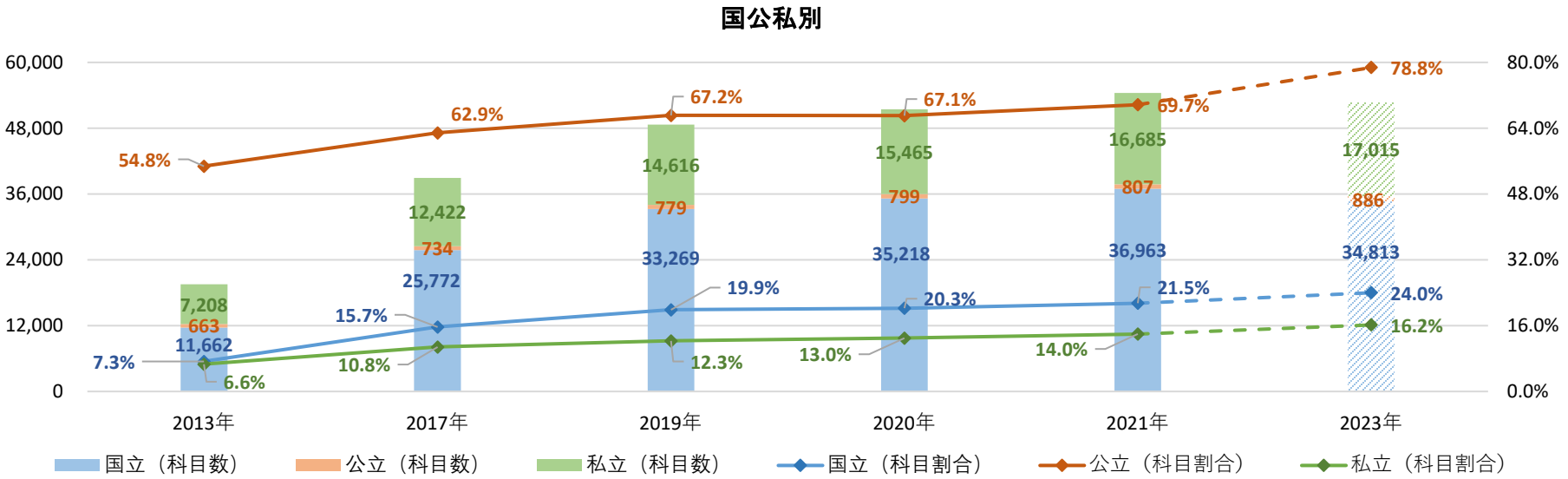


国際化関連指標

⑦ 外国語による授業科目数・割合(通年)

- 単科・総合別でみると、SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも外国語による授業科目割合が大きい。一方で、2013年度と2021年度を比較した際の授業科目数とその割合の増加率については総合大学のほうが大きく約2.5倍となっている。
- 国公私別でみると、SGU前より公立⇒国立⇒私立の順に外国語による授業科目割合が高い。2013年度から2021年度までの伸び率に関しては国立大学が最も大きく、科目数とその割合を約3倍増やしている。

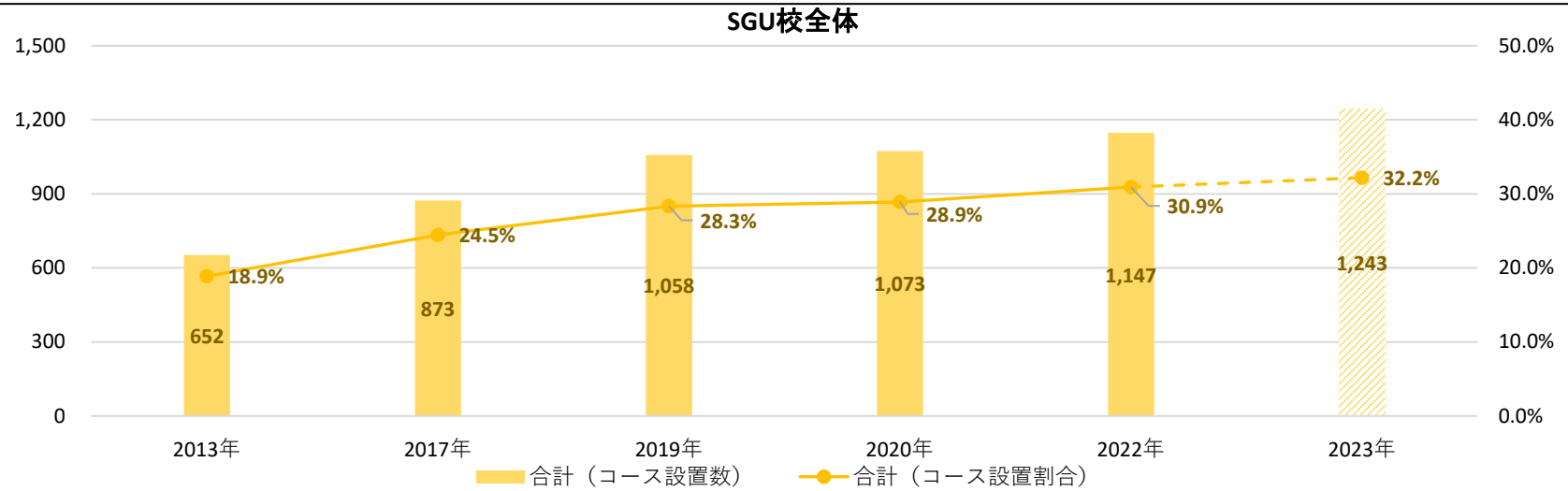


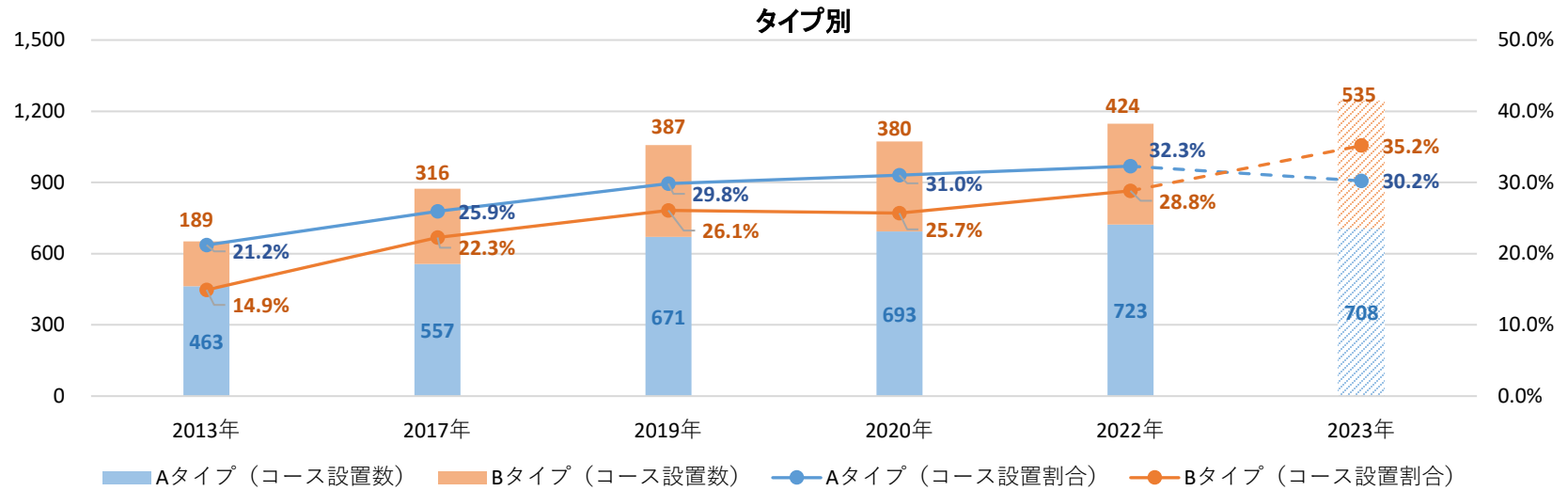


国際化関連指標

⑧-1 外国語のみで卒業できるコースの設置数・割合(5/1時点)

- 全体的に2013年度から2022年度まで外国語のみで卒業できるコースの設置数とその割合は約1.7倍まで増加しており、順調に推移。
- タイプ別でみると、SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりも外国語のみで卒業できるコース設置数およびその割合が大きい。一方で、2013年度から2022年度までの増加率の点からは、コース設置数およびその割合はBタイプの方が大きくなっており、約2倍程度増加している。

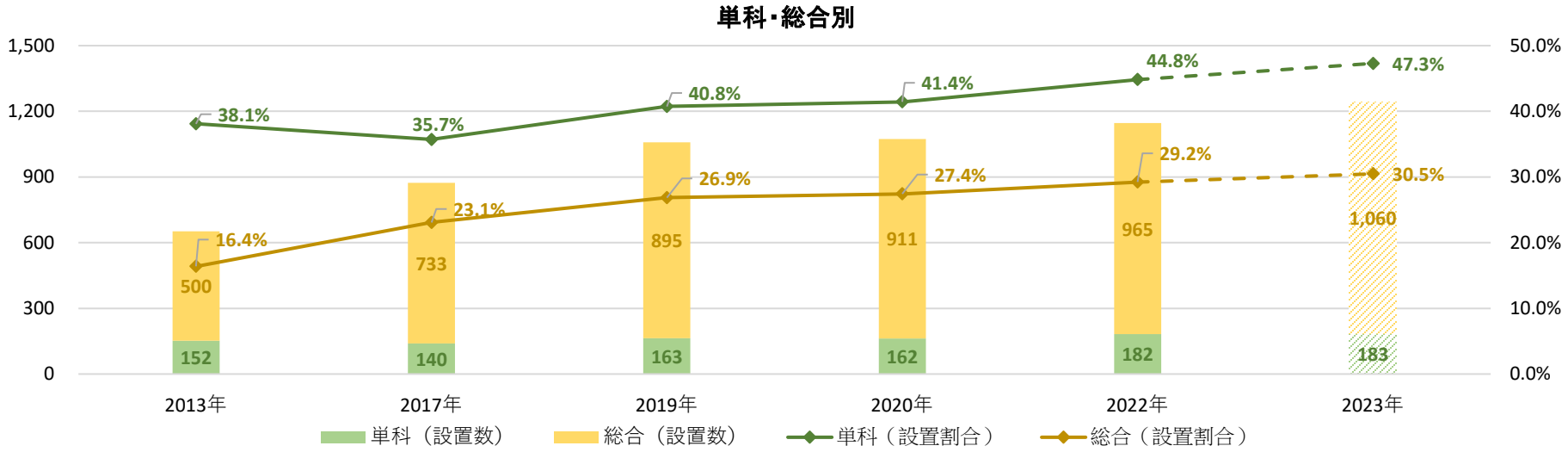


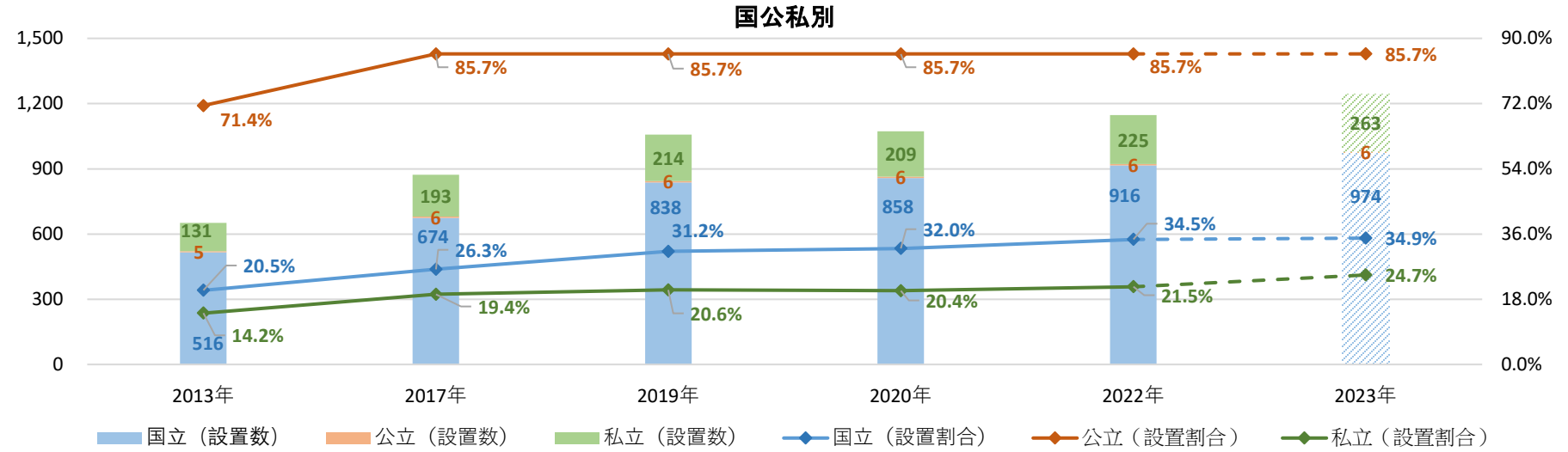


国際化関連指標

⑧-1 外国語のみで卒業できるコースの設置数・割合(5/1時点)

- 単科・総合別でみると、SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも外国語のみで卒業できるコースの設置割合が大きい。一方で、2013年度から2022年度でのコース設置数とその割合の増加率については、総合大学のほうが大きく約2倍となっている。
- 国公私別でみると、SGU実施前より公立⇒国立⇒私立の順に外国語のみで卒業できるコースの設置割合が高い。一方で、公立と比較し国立と私立は2013年度から2022年度の増加幅は大きくなっている。

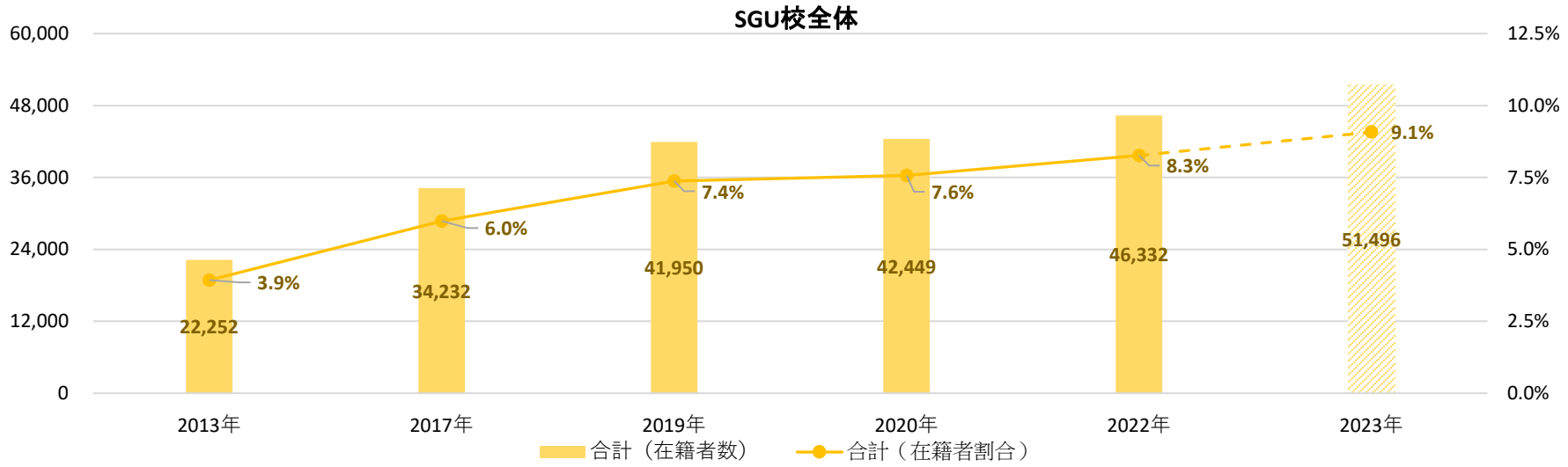


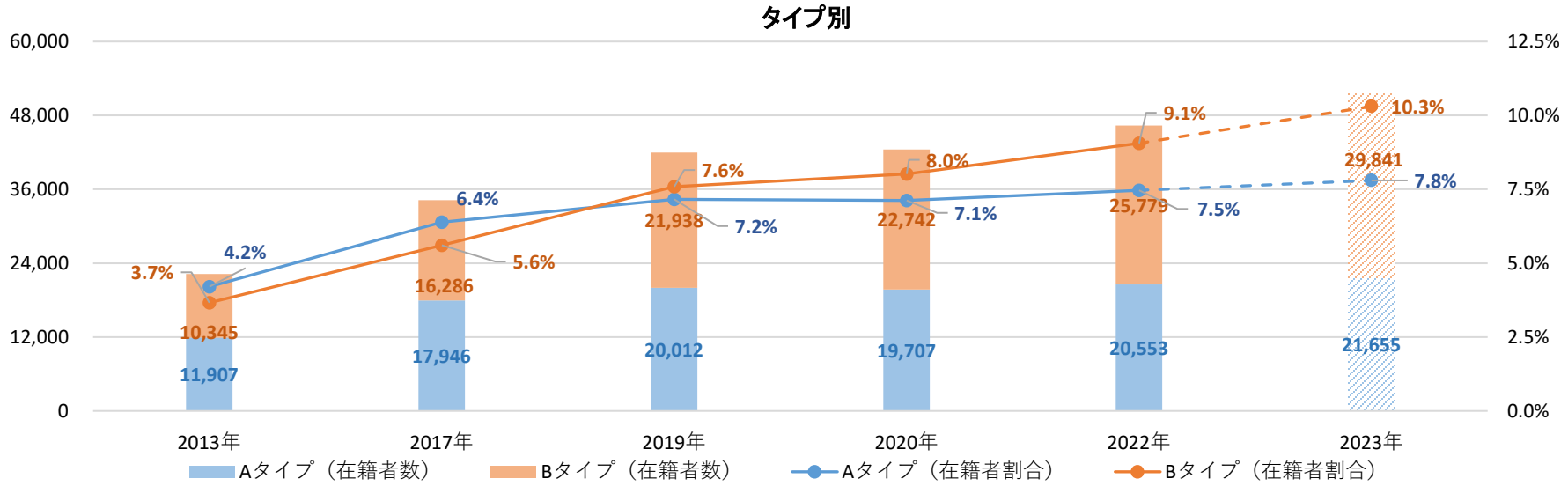


国際化関連指標

⑧-2 外国語のみで卒業できるコースの在籍者数・割合(5/1時点)

- 全体的に2013年度から2022年度まで外国語のみで卒業できるコースの在籍者数とその割合は2倍以上と順調に増加。
- タイプ別でみると、SGU実施前はAタイプの方がBタイプよりも外国語のみで卒業できるコースの在籍者数およびその割合が大きかったが、2013年度から2022年度にかけてBタイプは2.5倍程度増加した結果、2022年度では逆転し、Bタイプの方が在籍者数とその割合が大きくなっている。

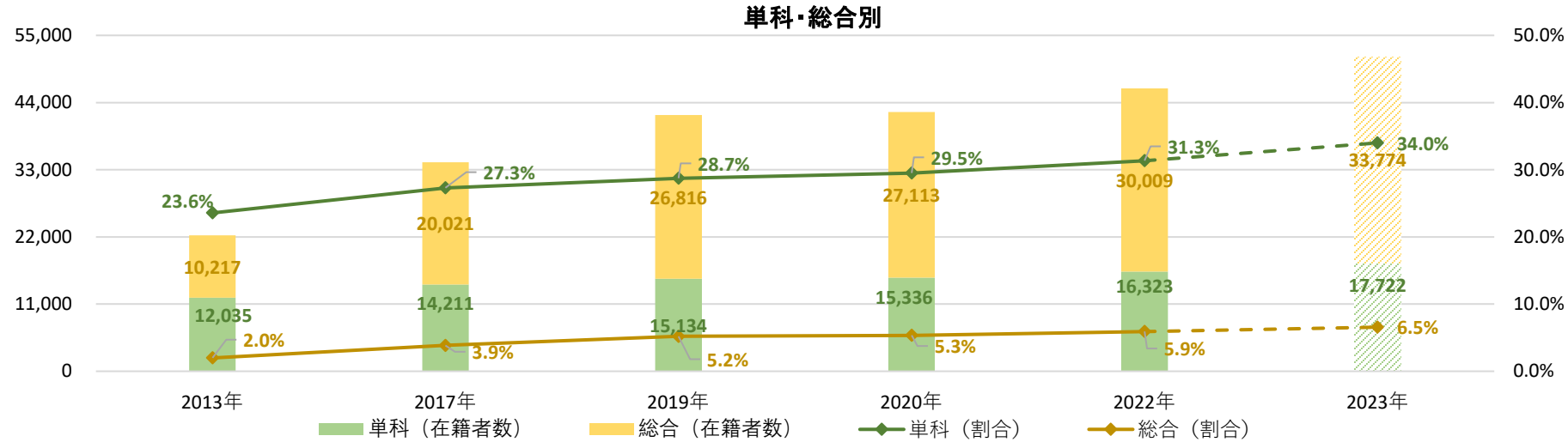


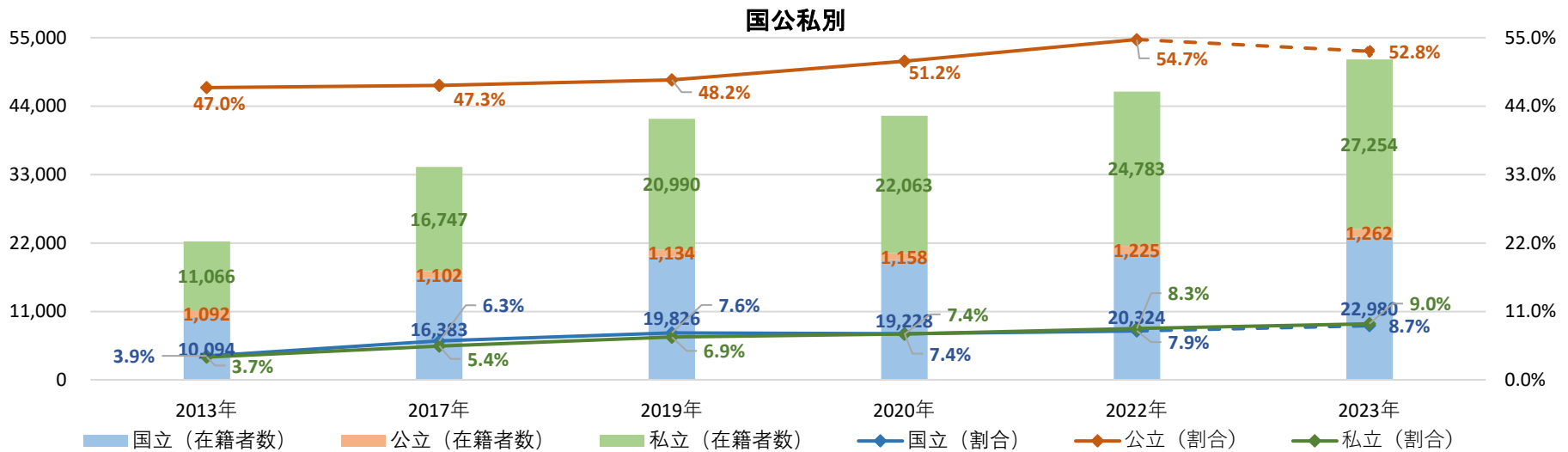


国際化関連指標

⑧-2 外国語のみで卒業できるコースの在籍者数・割合(5/1時点)

- 単科・総合別でみると、SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりも外国語のみで卒業できるコースの在籍者割合は高い。一方で、2013年度から2022年度にかけて在籍者数とその割合の増加率は総合大学が約3倍と大きい。
- 国公私別でみると、2013年度では公立⇒国立⇒私立の順に外国語のみで卒業できるコースの在籍者割合は高かったが、2022年度では公立⇒私立⇒国立の順に高くなっている。また、2013年度から2022年度にかけて在籍者数とその割合の増加率では、国立と私立は公立に比べて伸び幅が大きく、2倍程度まで増加している。

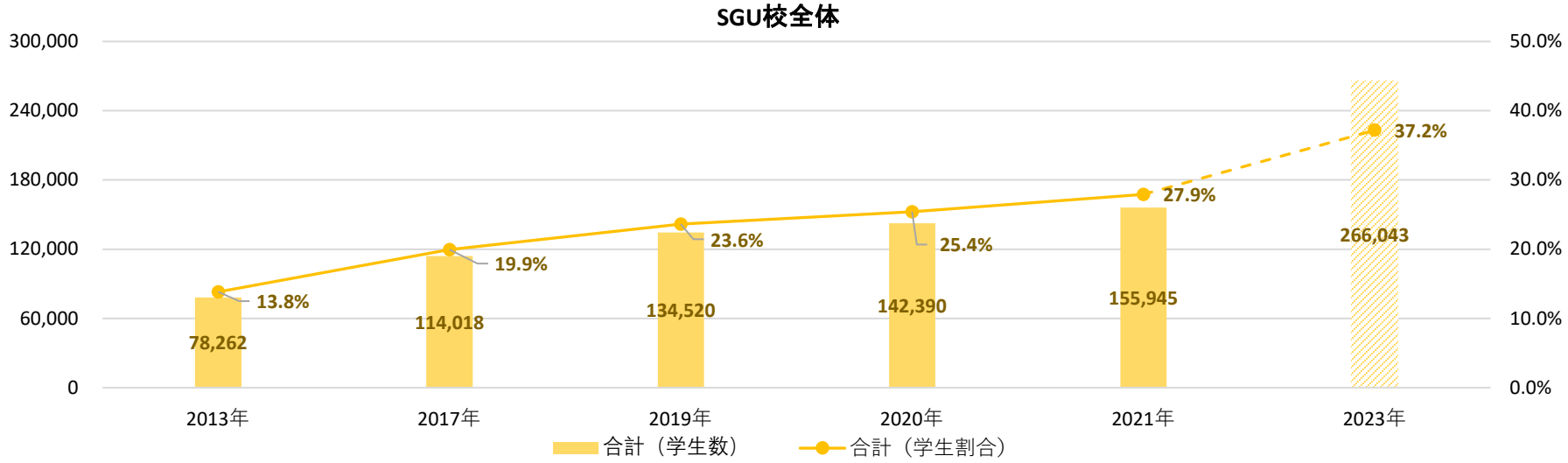


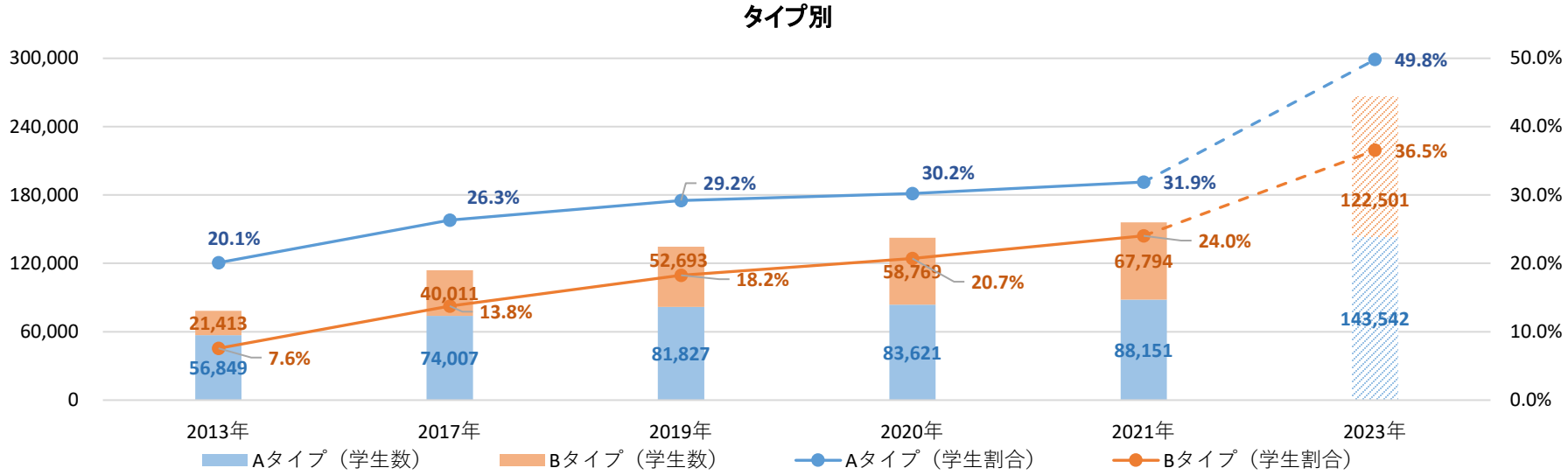


国際化関連指標

⑨ 学生の語学レベルの測定・把握、向上のための取組 外国語力基準を満たす学生数・割合

- 全体的に2021年度における外国語力基準を満たす学生数とその割合は2013年度と比較し約2倍と大きく増加。
- タイプ別でみると、SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりも外国語力基準を満たす学生数およびその割合が大きい。一方で、2013年度から2021年度までの外国語力基準を満たす学生数およびその割合の増加率の点からは、Bタイプの方が大きく、3倍以上増加している。

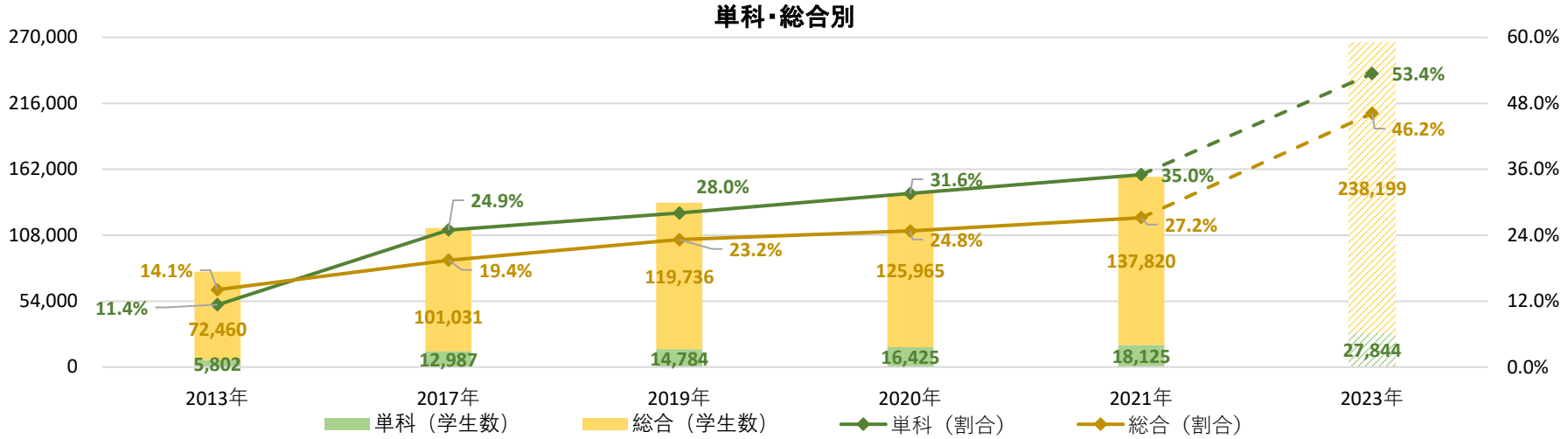


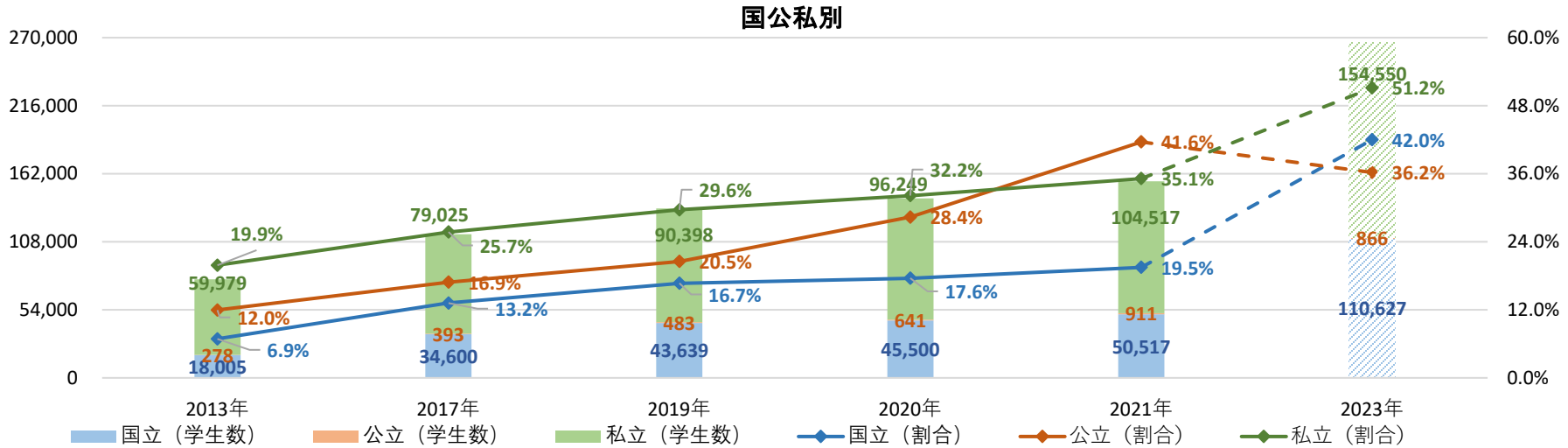


国際化関連指標

⑨ 学生の語学レベルの測定・把握、向上のための取組 外国語力基準を満たす学生数・割合

- 単科・総合別でみると、SGU前実施は総合大学の方が単科大学よりも外国語力基準を満たす学生割合が大きかったが、2017年度より単科大学が逆転。2013年度から2021年度の外国語力基準を満たす学生数および学生割合のいずれの増加率の点においても、単科大学のほうが大きく約3倍となっている。
- 国公私別でみると、2013年度は私立⇒公立⇒国立の順に外国語力基準を満たす学生割合が高かったが、2021年度では公立⇒私立⇒国立の順に高くなっている。2013年度から2021年度の外国語力基準を満たす学生数とその割合の増加率についても、公立が最も大きく、約3倍にまで増加させている。

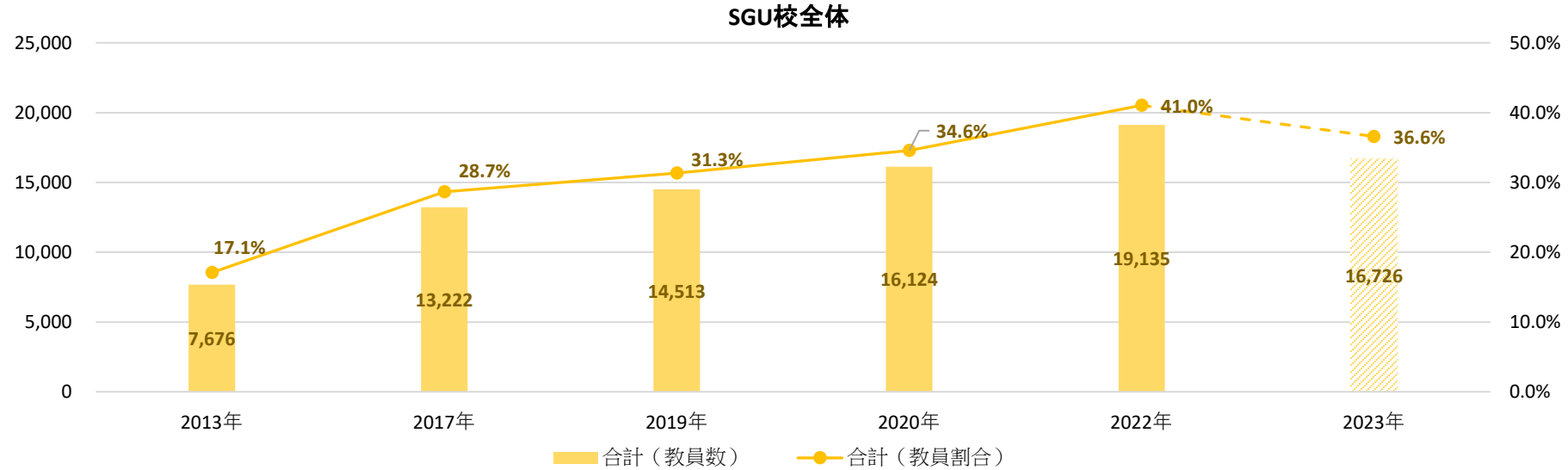


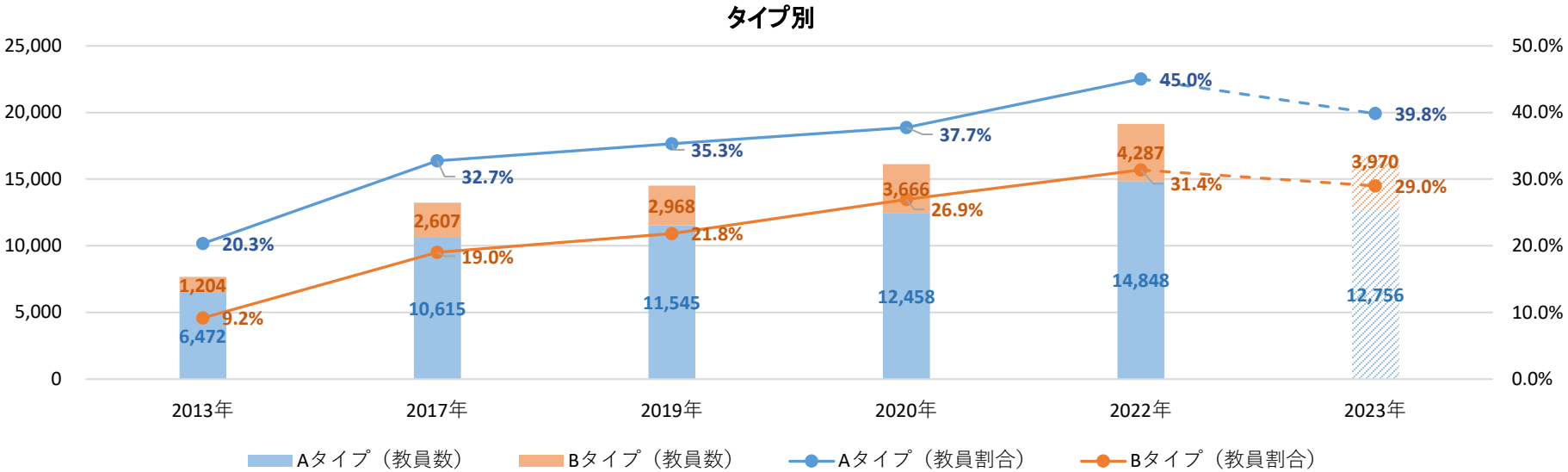


ガバナンス関連指標

⑭-1 年俸制導入　年俸制適用教員数・割合(5/1時点)

- 全体的に2013年度から2022年度まで年俸制適用教員数とその割合は約2.5倍と大きく増加。
- タイプ別でみると、SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりも年俸制適用教員数およびその割合が大きい。また、2013年度から2022年度にかけて、年俸適用職員数およびその割合のいずれもBタイプのほうが増加率が大きく、3.5倍まで増加している。

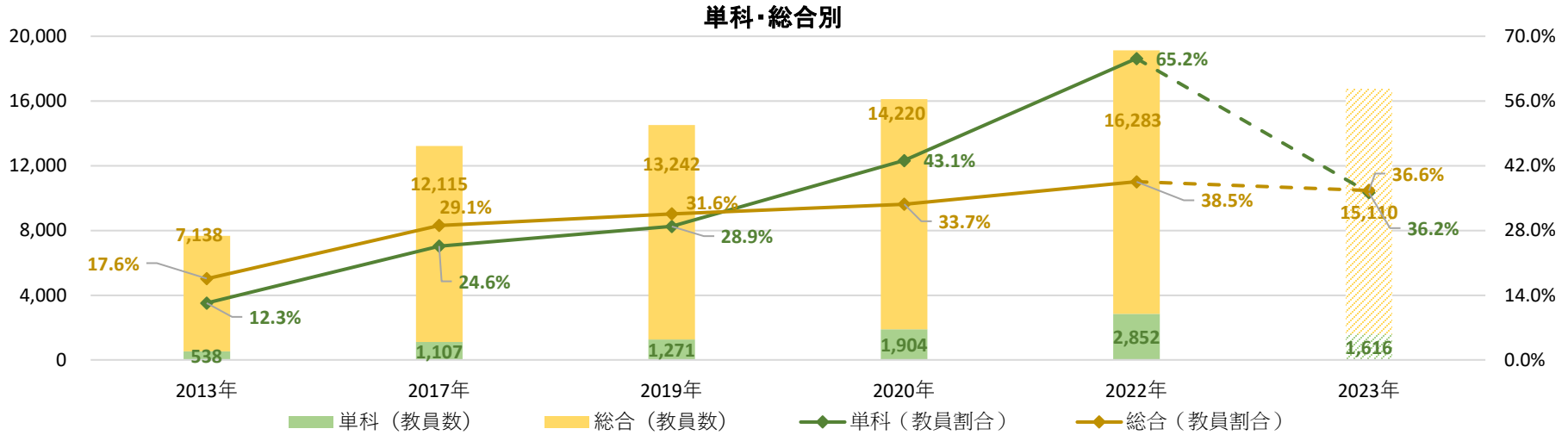


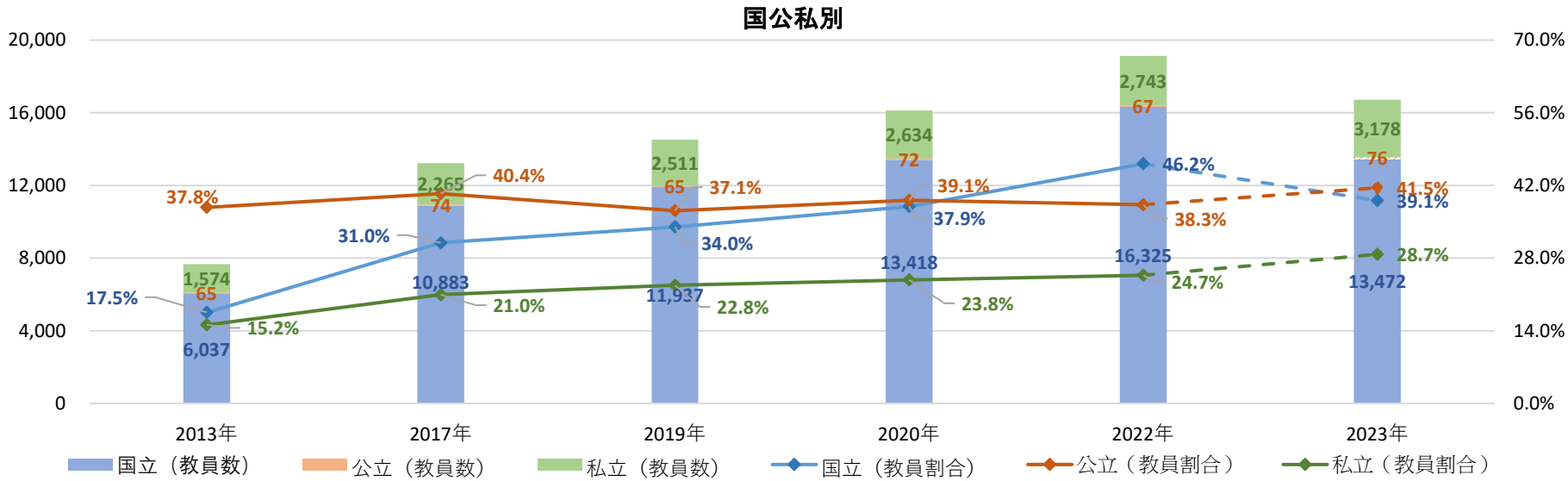


ガバナンス関連指標

⑭-1 年俸制導入　年俸制適用教員数・割合(5/1時点)

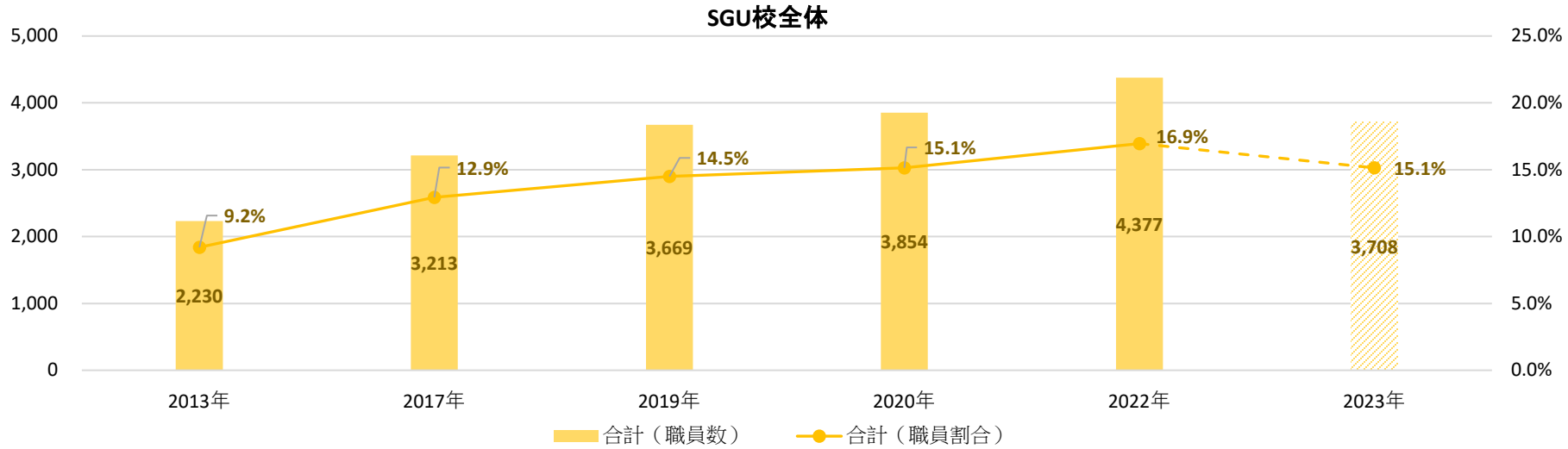
- 単科・総合別でみると、2013年度は総合大学の方が単科大学よりも年俸制適用教員割合が大きかったが、単科大学は2022年度までで約5倍程度増加したことにより、単科大学のほうが大きくなっている。
- 国公私別でみると、2013年度は公立⇒国立⇒私立の順番で年俸制適用教員割合が高かったが、その後国立大学が大きくその割合を伸ばし、2022年度では国立⇒公立⇒私立の順に割合が高くなっている。

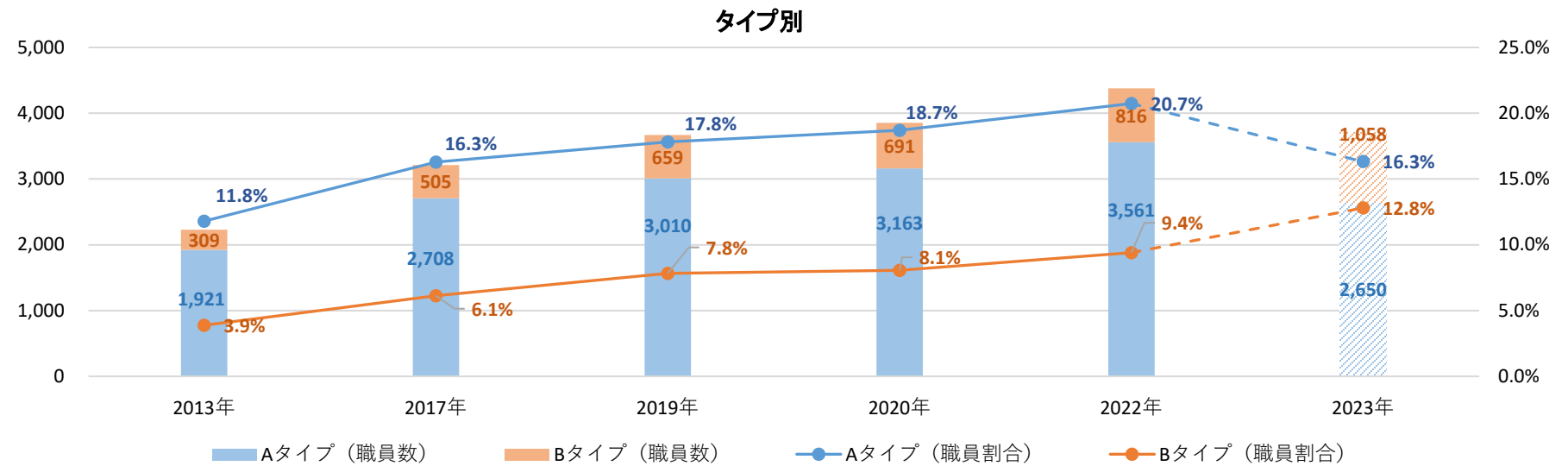




⑭-2 年俸制導入　年俸制適用職員数・割合(5/1時点)

- 全体的に2013年度から2022年度にかけて、年俸制適用職員数とその割合は約2倍と順調に増加。
- タイプ別でみると、SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりも年俸制適用職員数とその割合が大きい。また、2013年度から2022年度にかけての年俸制適用職員数とその割合の増加率については、Bタイプの方がAタイプよりも大きく増加しており、約2.5倍程度伸びている。

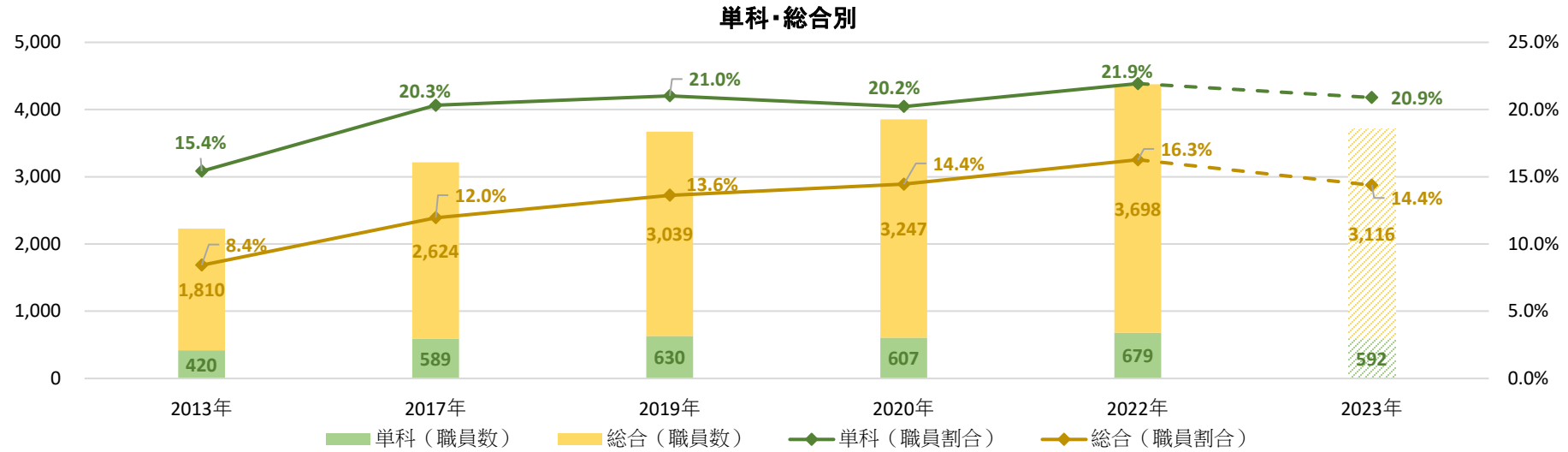


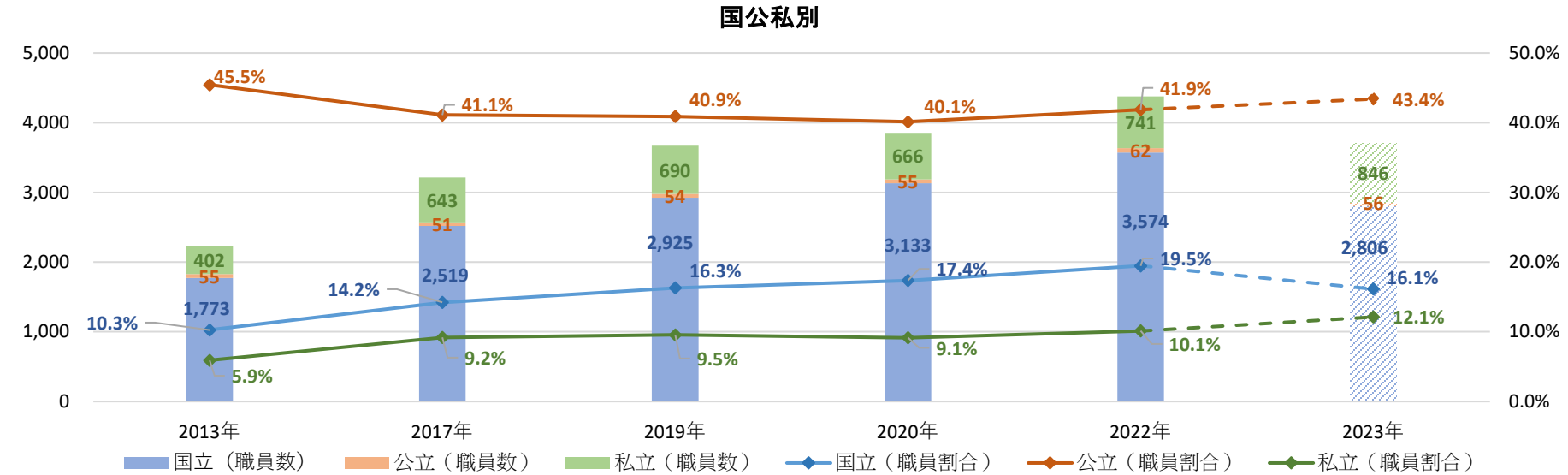


ガバナンス関連指標

⑭-2 年俸制導入　年俸制適用職員数・割合(5/1時点)

- 単科・総合別でみると、SGU実施前から2022年度まで単科大学の方が総合大学よりも年俸制適用職員割合が高い。一方で、増加率の点では、総合大学は2013年度から2022年度まで年俸制適用職員数およびその割合が約2倍と大きく増加させている。
- 国公私別でみると、SGU実施前から2022年度まで公立⇒国立⇒私立の順に年俸制適用職員割合が高い。ただし、国立および私立については当該割合を順調に増やしている一方で、公立大学はSGU実施前よりもその割合を減らしている

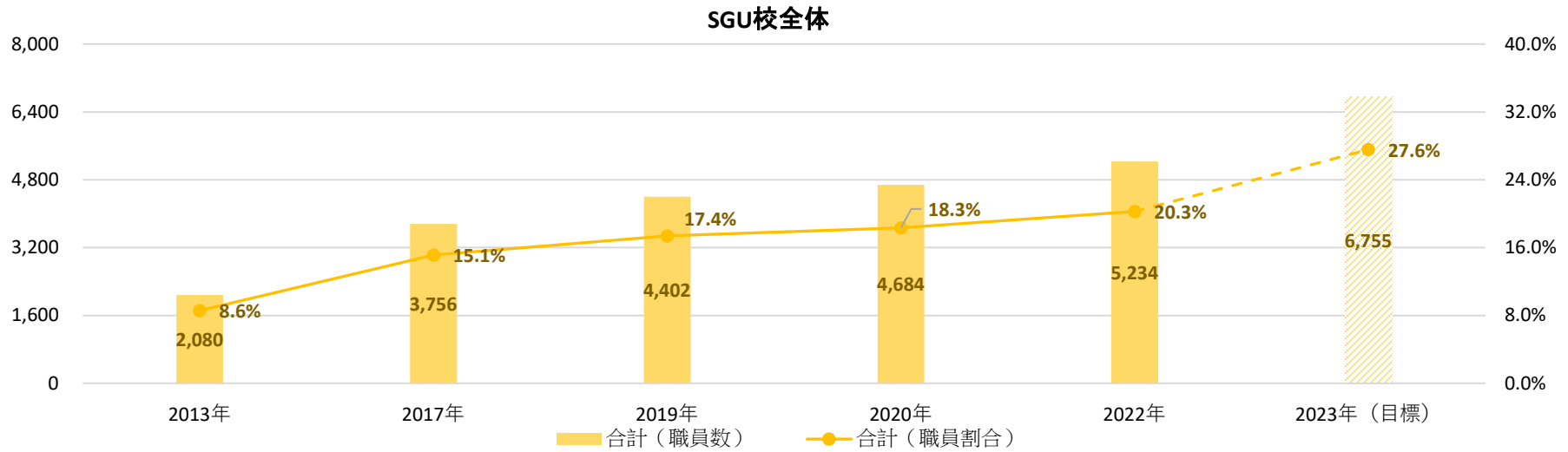


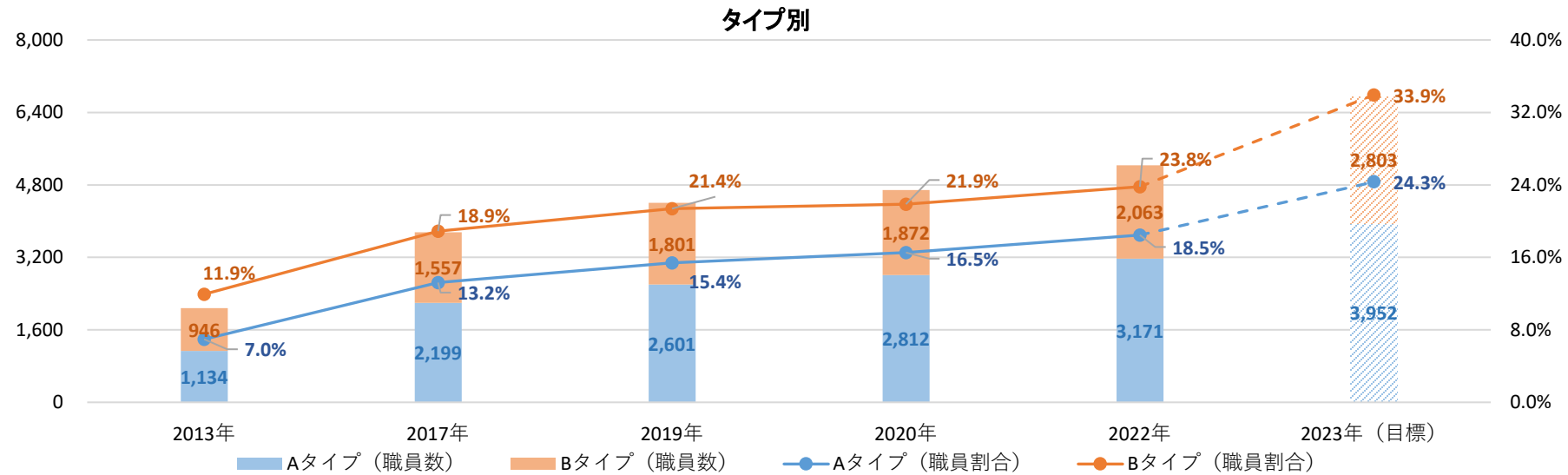


ガバナンス関連指標

⑯ 事務職員の高度化への取組　外国語力基準を満たす専任職員数・割合

- 全体的に2013年度から2022年度まで外国語力基準を満たす専任職員数とその割合はおよそ2倍と順調に増加。
- タイプ別でみると、SGU実施前からBタイプの方がAタイプよりも外国語力基準を満たす専任職員割合が大きい。また、2013年度から2022年度にかけての外国語力基準を満たす専任職員数とその割合の増加率については、Aタイプの方がBタイプよりも大きく増加しており、約2.5倍程度伸びている。

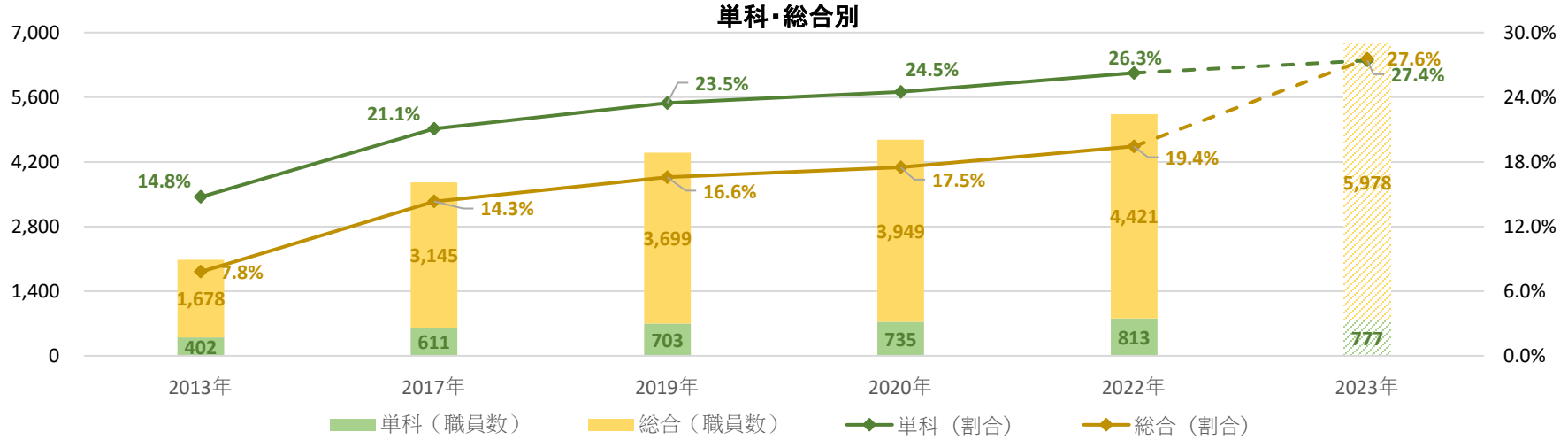


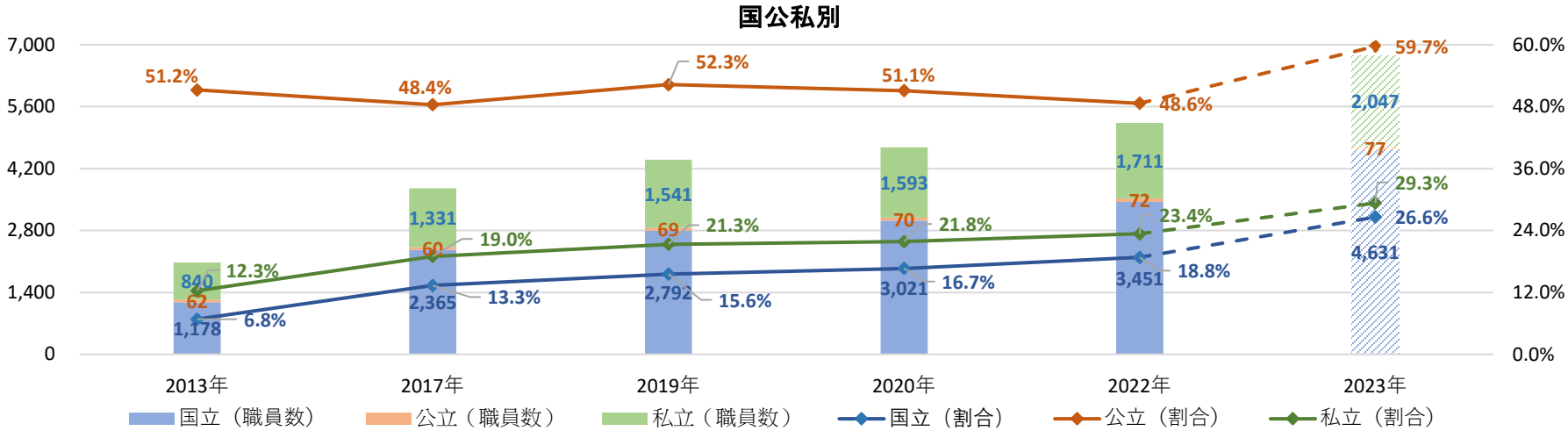


ガバナンス関連指標

⑯ 事務職員の高度化への取組　外国語力基準を満たす専任職員数・割合

- 単科・総合別でみると、SGU実施前から2022年度まで単科大学の方が総合大学よりも外国語力基準を満たす専任職員割合が高い。また、いずれの大学も外国語力基準を満たす専任職員数およびその割合は2013年度から2022年度までおよそ2倍にまで増加しており、順調に推移している。
- 国公私別でみると、SGU実施前から2022年度まで公立⇒私立⇒国立の順に外国語力基準を満たす専任職員割合が高い。一方で、2013年度から2022年度までの外国語力基準を満たす専任職員数とその割合の増加率については、公立大学はほぼ変化がないのに対し国立大学は約3倍、私立大学は約2倍と大きく増加。

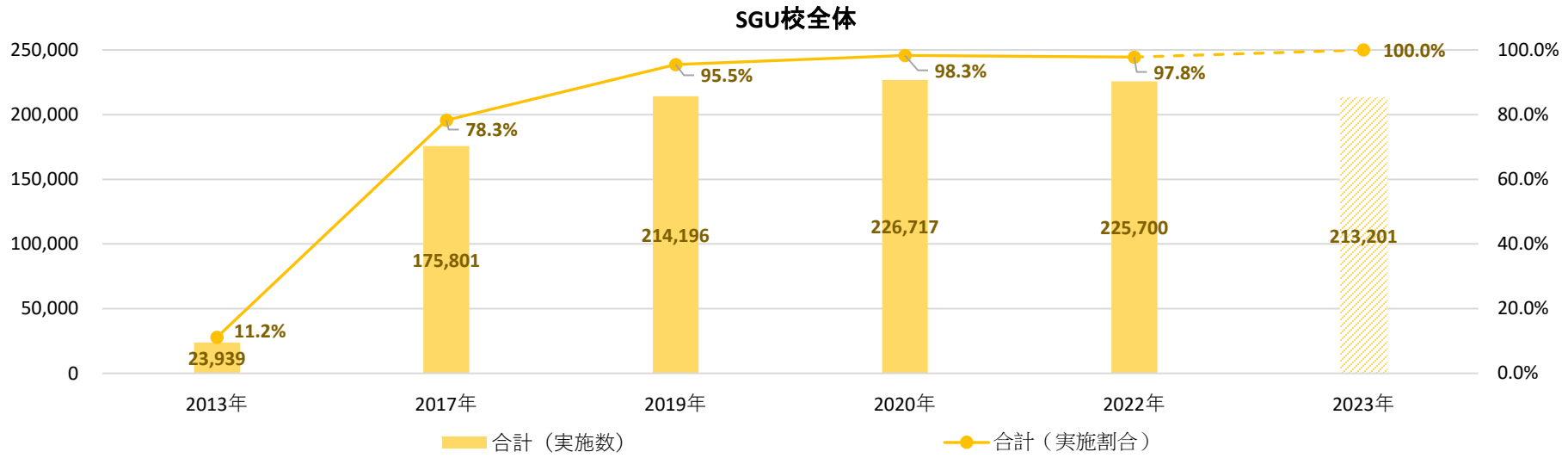


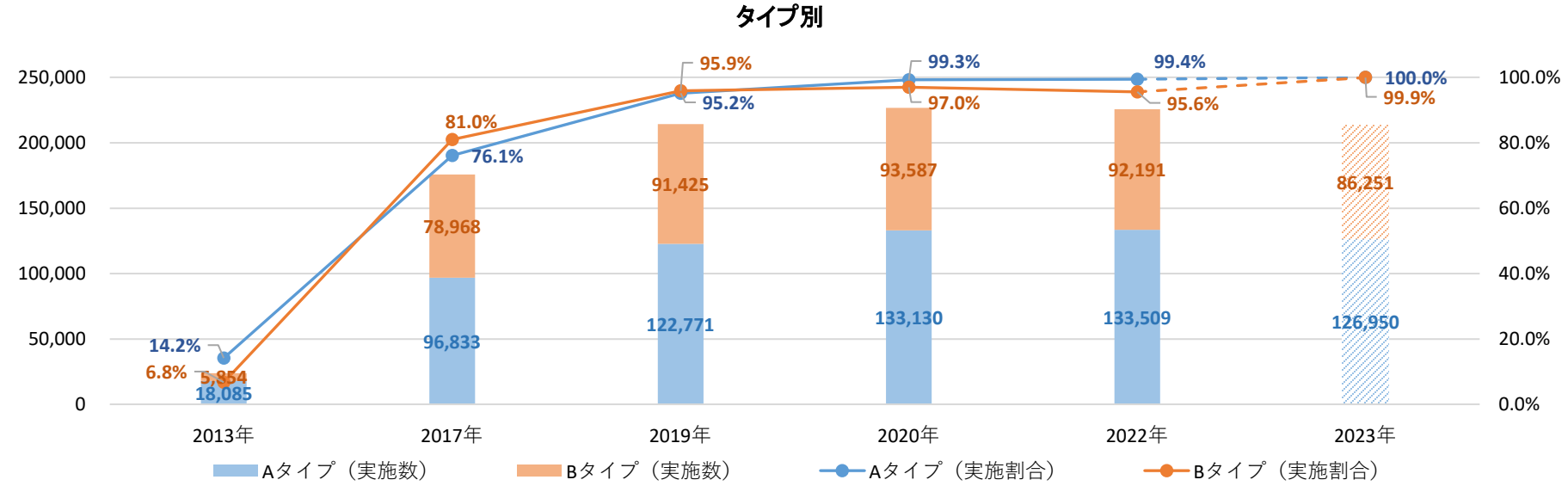


教育の改革的取組関連指標

⑩ ナンバリング実施状況・割合(5/1時点)

- 全体的に2013年度から2022年度までナンバリング実施科目数とその割合は顕著に増加。
- タイプ別でみると、SGU実施前からAタイプの方がBタイプよりもナンバリング実施科目数およびその割合が大きい。また、両タイプとも2017年度までで急増しその後は緩やかに増加、2022年度にはほぼ100%となっている。

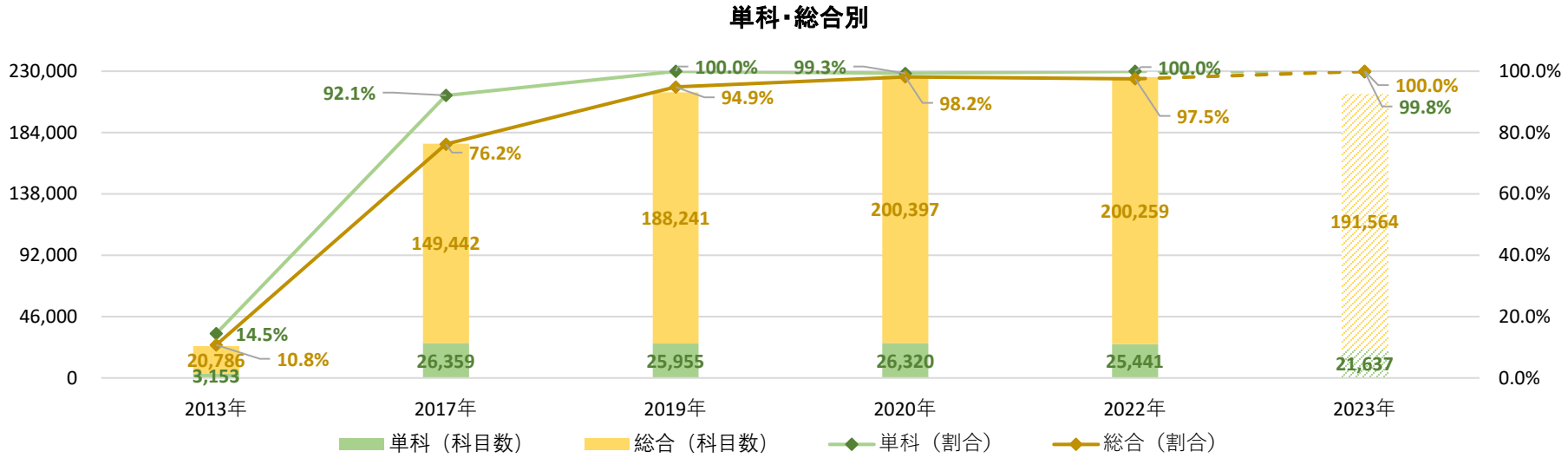


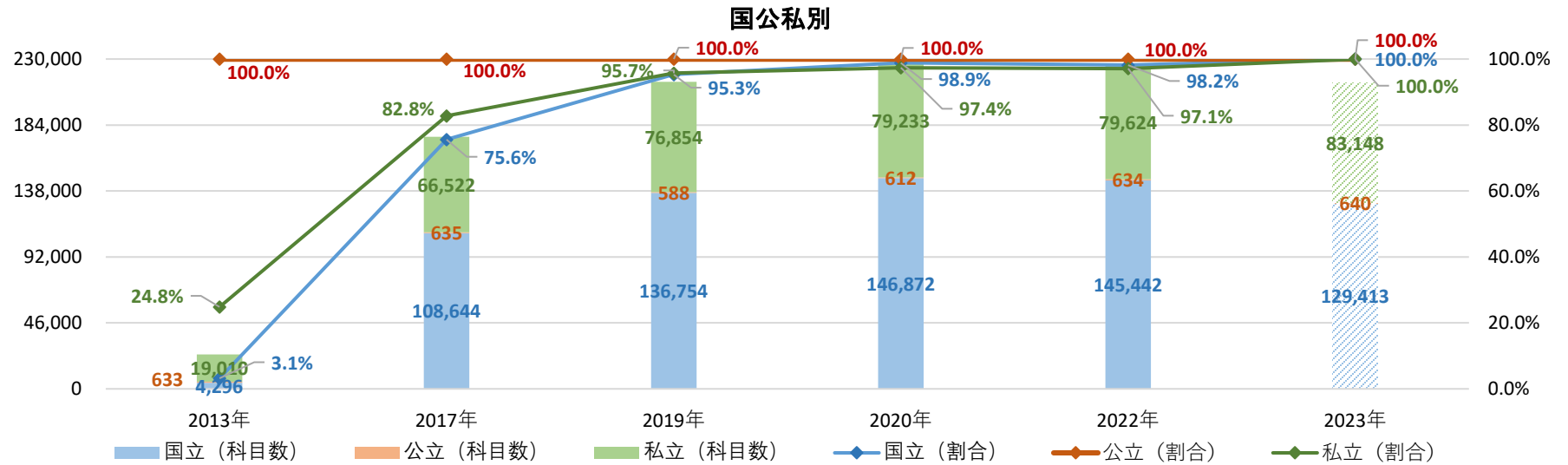


教育の改革的取組関連指標

⑩ ナンバリング実施状況・割合(5/1時点)

- SGU実施前は単科大学、総合大学ともナンバリング実施科目割合は15%未満であったが、2017年度には90%以上に急増し、2022年度にはほぼ100%となっている。
- 国公私別でみると、SGU実施前は公立⇒私立⇒国立の順にナンバリング実施科目割合が高かったが、2022年度では公立⇒国立⇒私立の順に変化。なお、ナンバリング実施科目割合は2022年度にはいずれのタイプもほぼ100%と高い水準になっている。

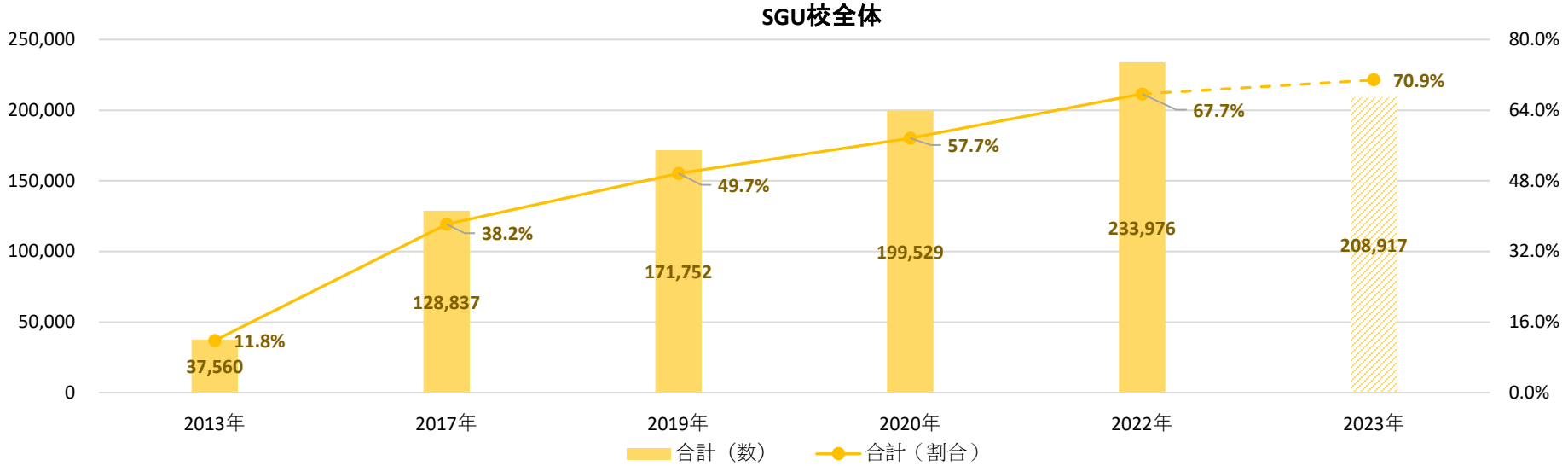


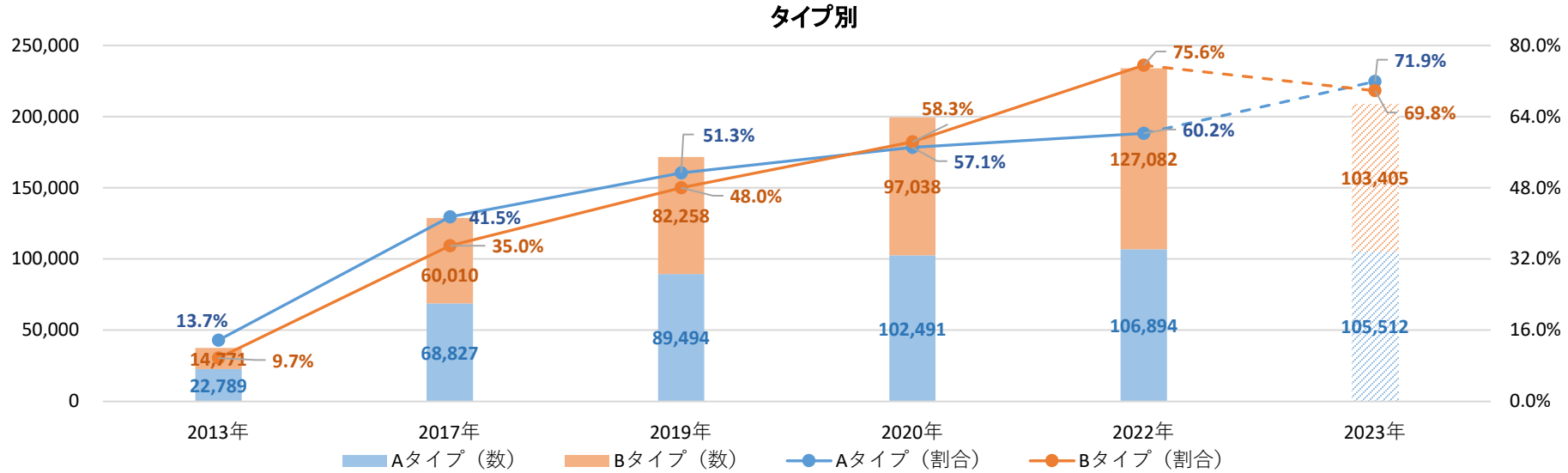


教育の改革的取組関連指標

⑪ シラバスの英語化の状況・割合(5/1時点)

- 全体的に2013年度から2022年度までシラバスの英語化を実施している科目数とその割合は約6倍に増加しており、顕著に推移。
- タイプ別でみると、SGU実施前はAタイプの方がBタイプよりもシラバスの英語化を実施している科目数とその割合が高かったが、Bタイプは2013年度から2022年度までに約8倍と伸びたことで、2022年度はBタイプのほうがAタイプよりも大きくなっている。

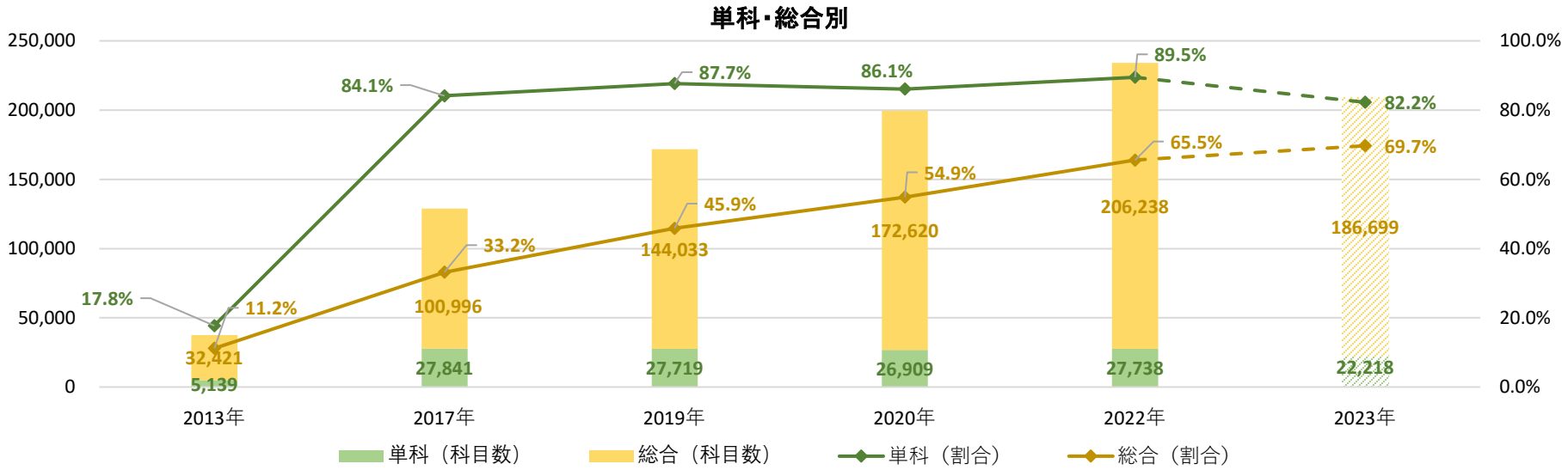


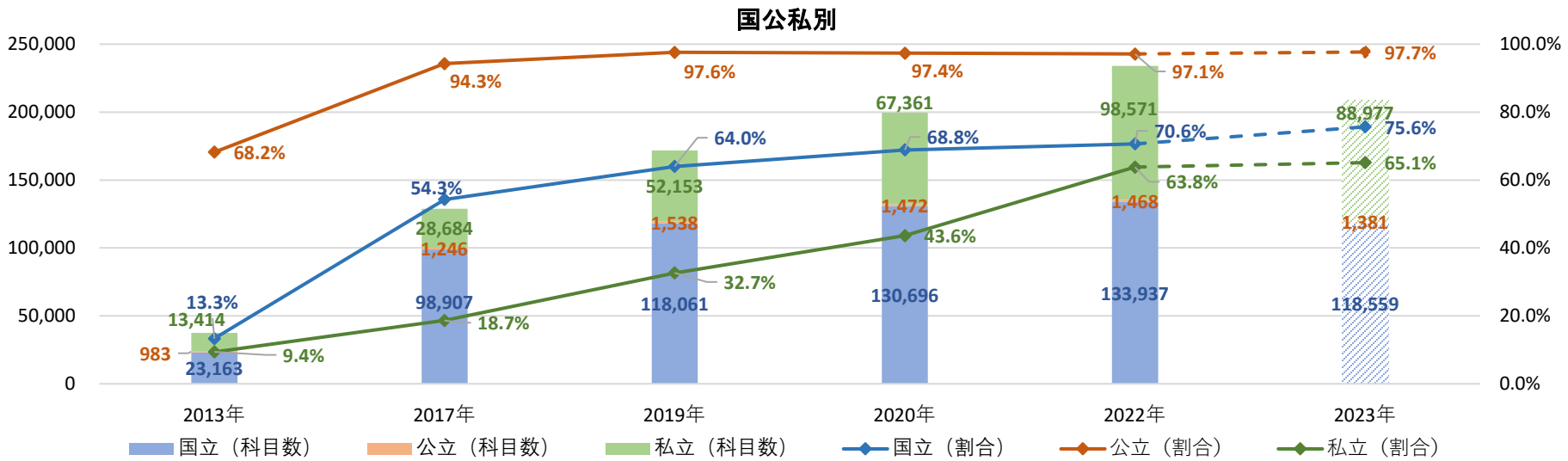


教育の改革的取組関連指標

⑪ シラバスの英語化の状況・割合(5/1時点)

- 単科・総合別でみると、SGU実施前より単科大学の方が総合大学よりもシラバスの英語化を実施している科目割合が大きい。また、単科大学については2017年度で既に2023年度目標を達成している状況。
- 国公私別でみると、2013年度から2022年度まで、公立⇒国立⇒私立の順にシラバスの英語化を実施している科目割合が高く、公立についてはほぼ100%に到達している。

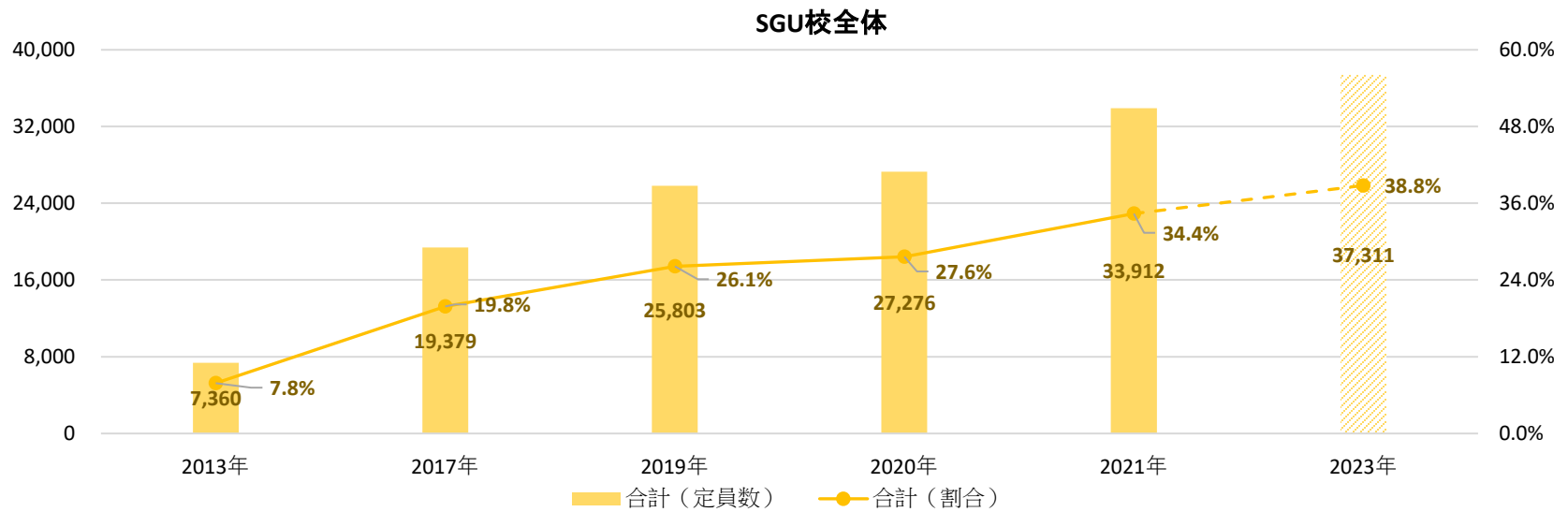


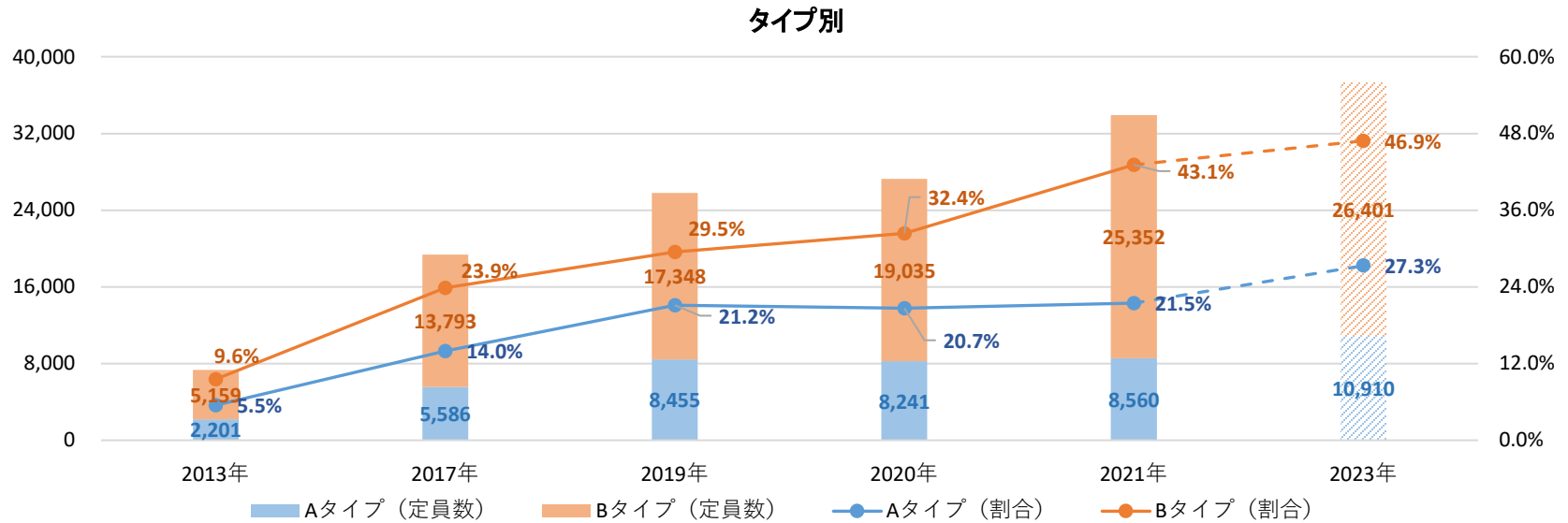


教育の改革的取組関連指標

⑱ TOEFL等外部試験の学部入試への活用対象学部定員数・割合(通年)

- 全体的に2013年度から2022年度まで英語外部試験を学部入試に活用する学部の定員数とその割合は約4.5倍と大きく増加。
- タイプ別でみると、SGU実施前からBタイプの方がAタイプよりも英語外部試験を学部入試に活用する学部の定員数とその割合が大きい。また、2013年度から2021年度までの増加率の点からも、Bタイプの増加幅は約5倍とAタイプより大きい。

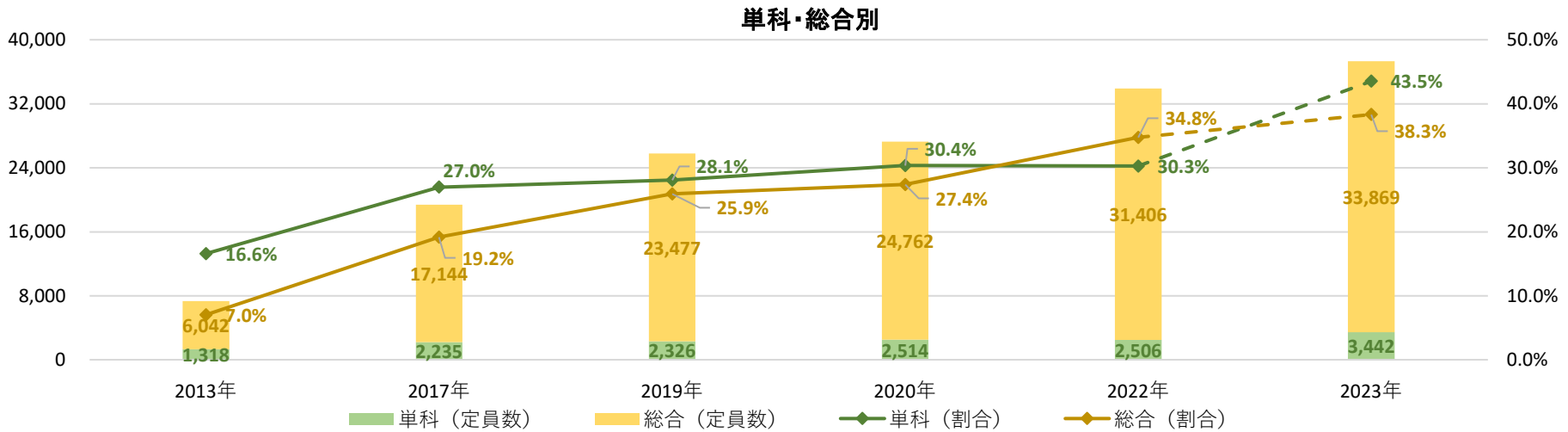


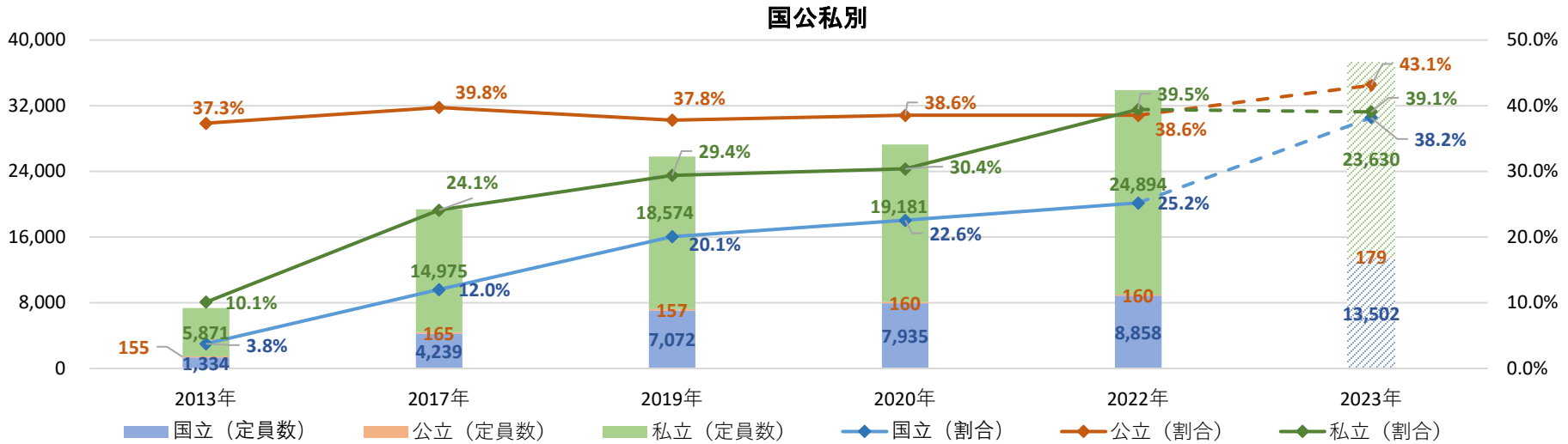


教育の改革的取組関連指標

⑱ TOEFL等外部試験の学部入試への活用対象学部定員数・割合(通年)

- 単科・総合別でみると、2013年度は単科大学の方が総合大学よりも英語外部試験を学部入試に活用する学部の定員割合が大きかったが、総合大学が当該割合を2022年度までにおよそ5倍程度増加させたことで、2022年度には総合大学の方が高くなっている。
- 国公私別でみると、SGU前は公立⇒私立⇒国立の順に英語外部試験を学部入試に活用する学部の定員割合が高かったが、国立大学と私立大学は大きく増加した一方で、公立大学は微増であったことから、2022年度では私立⇒公立⇒国立の順に割合が高くなっている。



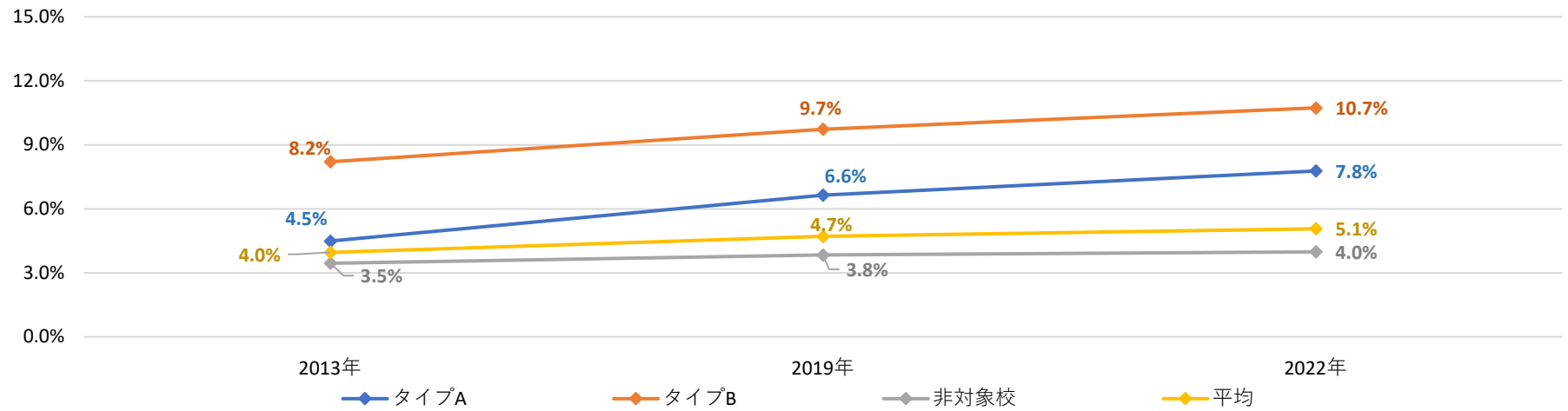


４．SGU採択大学とSGU非採択校の比較

国際化
関連指標

指標①関連　教員に占める外国人専任教員割合（5/1時点）

- SGU非採択校と比較しSGU採択大学は外国人専任教員の割合が高く、また2013年度から2022年度までの増加幅も大きい。

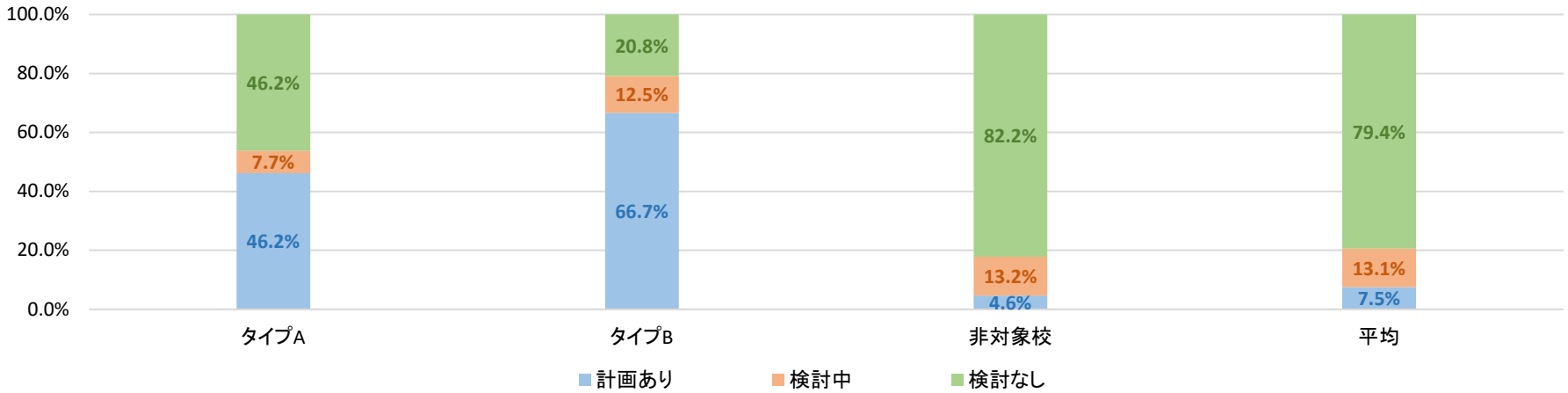


※外国の大学で学位を取得した日本人教員は含まれない。
※出典：学校基本調査

国際化
関連指標

指標②関連　職員に占める外国人専任職員に関する方針

- 外国人専任職員採用計画ありの比率が、SGU非採択校は5%程であるのに対し、SGU採択大学はその比率が50%を超えている。

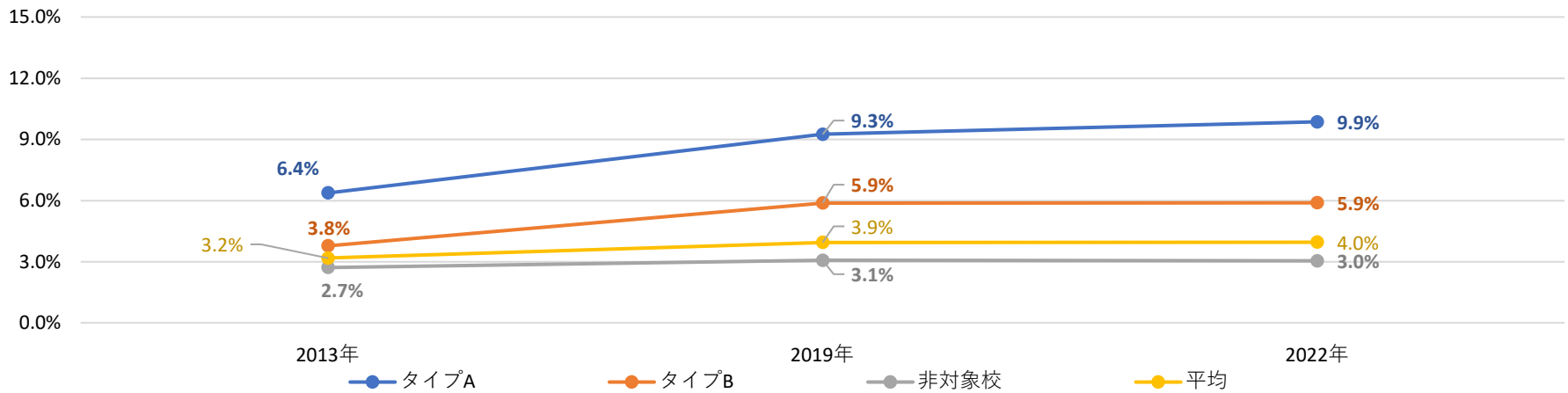


※出典：大学における国際化に関する調査（2022年度時点）

国際化
関連指標

指標④関連 全学生に占める外国人留学生の割合（5/1時点）

- SGU非採択校と比較しSGU採択大学のほうが全学生に占める外国人留学生の割合は高く、また2013年度から2022年度までの増加幅も大きい。

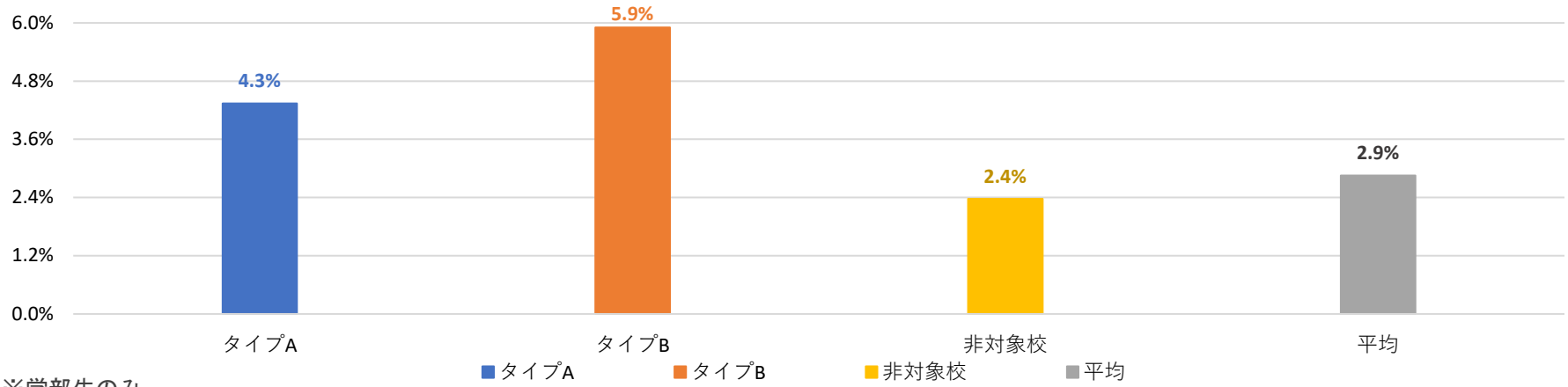


※外国の大学で学位を取得した日本人教員は含まれない。
※出典：学校基本調査

国際化
関連指標

指標⑤関連　全学部生に占める留学経験者の割合（通年）

- SGU非採択校と比較しSGU採択大学の方が留学経験者割合はわずかに高くなっている。

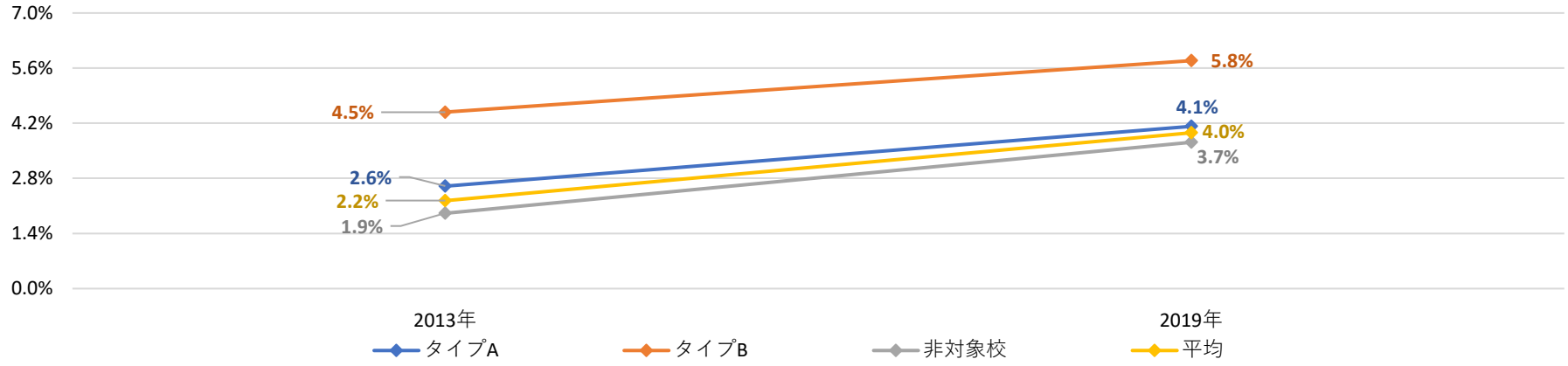


※学部生のみ
※出典：大学入試のあり方に関する検討会議参考資料（2019年度時点）

国際化
関連指標

指標⑥-1関連 大学間協定に基づく派遣日本人学生割合（通年）

- SGU非採択校と比較し、派遣日本人学生割合はSGU採択大学の方が高くなっており、全体の平均の底上げに繋がっている。

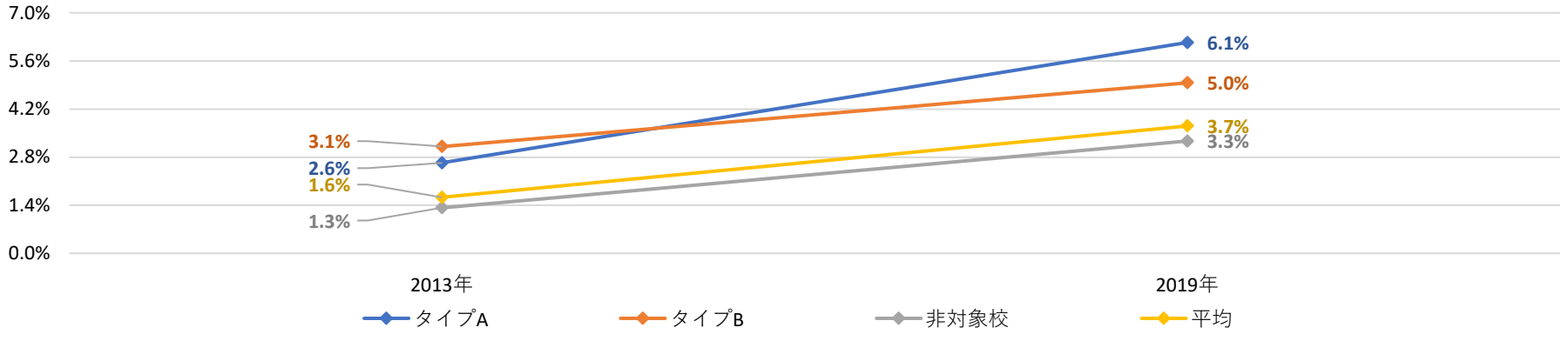


※協定ごとの派遣者のため、複数協定に基づき派遣された学生は複数カウントとしている。
※オンラインによる交流は含まれない。
※出典：（派遣数）改革状況調査、（全学生数）学校基本調査

国際化
関連指標

指標⑥-2関連 大学間協定に基づく受入外国人学生割合（通年）

- SGU非採択校と比較し、SGU採択大学は外国人留学生割合が高くなっており、全体の平均の底上げに繋がっている。

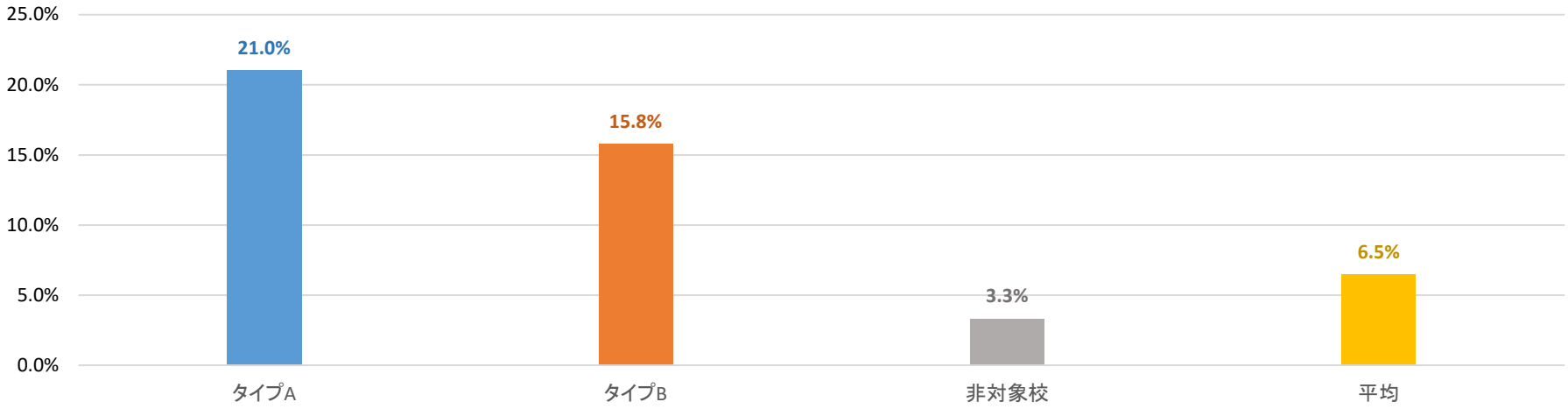


※協定ごとの派遣者のため、複数協定に基づき派遣された学生は複数カウントとしている。
※オンラインによる交流は含まれない。
※出典：（派遣数）改革状況調査、（全学生数）学校基本調査

国際化
関連指標

指標⑦関連 外国語による授業科目割合（通年）

- SGU非採択校における外国語による授業科目割合が3.3%であるのに対し、SGU採択大学は15%以上と非常に高くなっている。

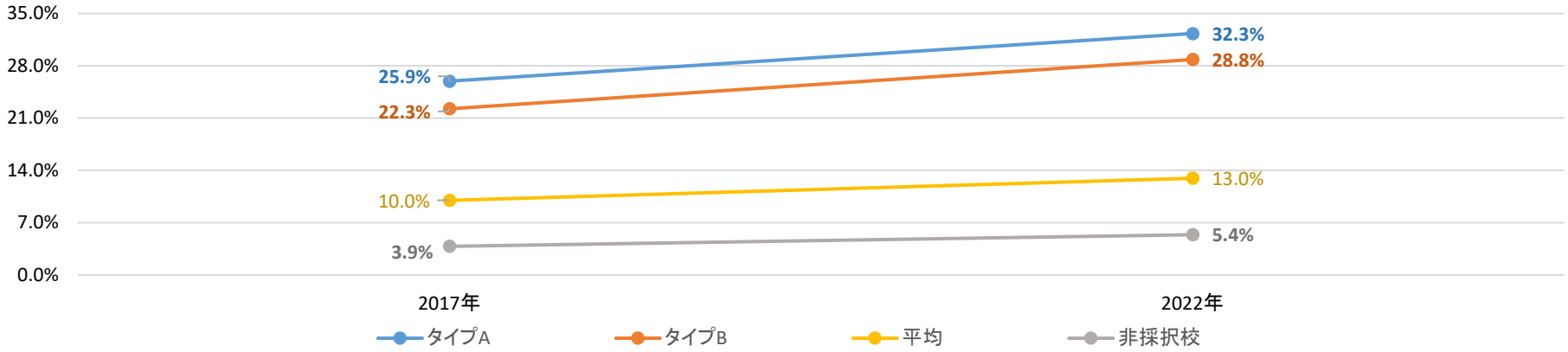


※出典：（非対象校）大学における国際化に関する調査（2022年度時点）
（SGU校）SGU指標（2021年度時点）

国際化
関連指標

指標⑧-1関連 外国語のみで卒業できる課程の設置割合(5/1時点)

- 外国語のみで卒業できる課程の設置割合は、SGU非採択校と比較しSGU採択大学の割合が20%以上も高く、全体の底上げに繋がっている

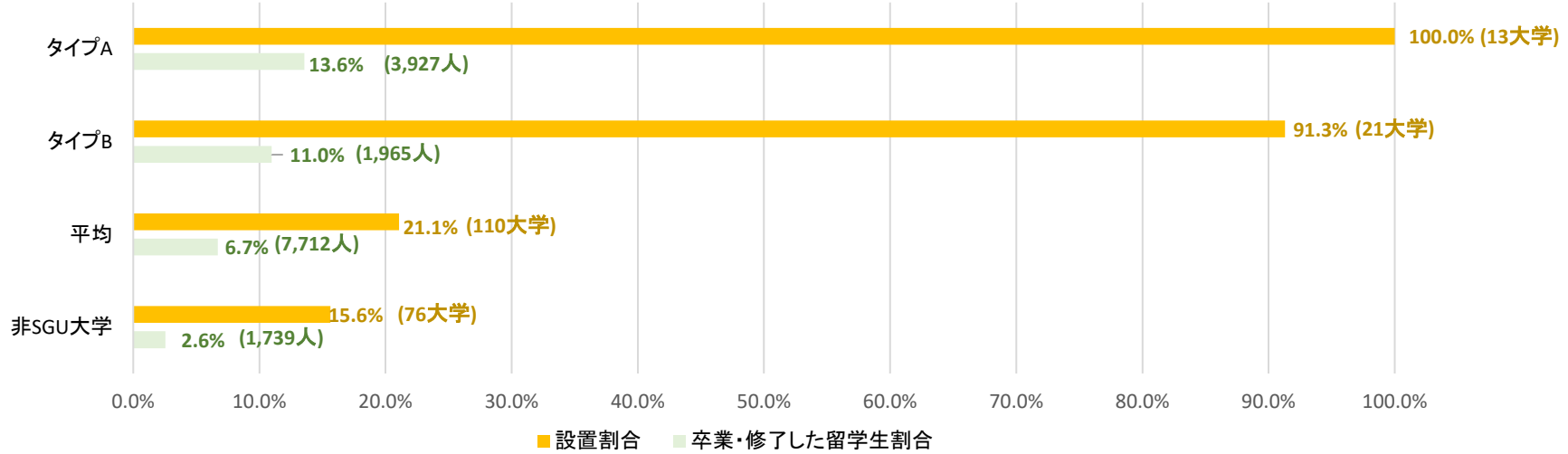


※出典:(非対象校)大学における国際化に関する調査、(SGU校)SGU指標

国際化
関連指標

指標⑧-1関連 外国語のみで卒業できる課程を設置している大学割合と当該課程を卒業・修了した外国人留学生割合

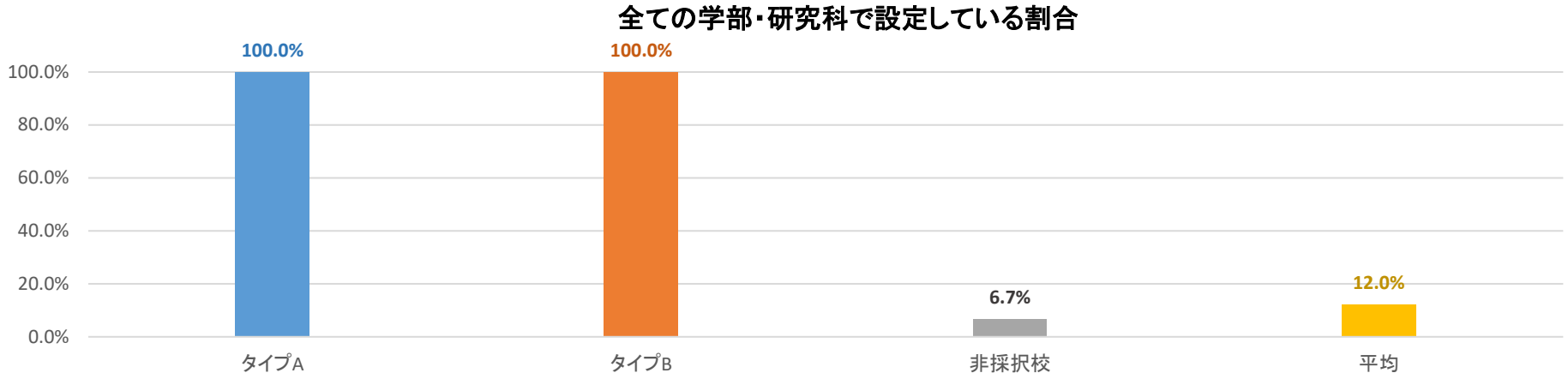
- 外国語のみで卒業できる課程を設置している大学割合は、SGU採択大学ではAタイプで100%、Bタイプで91%と非常に高い。また、在籍留学生に対する当該課程を卒業・修了した外国人留学生の割合も、SGU非採択校に比して大きくなっている。



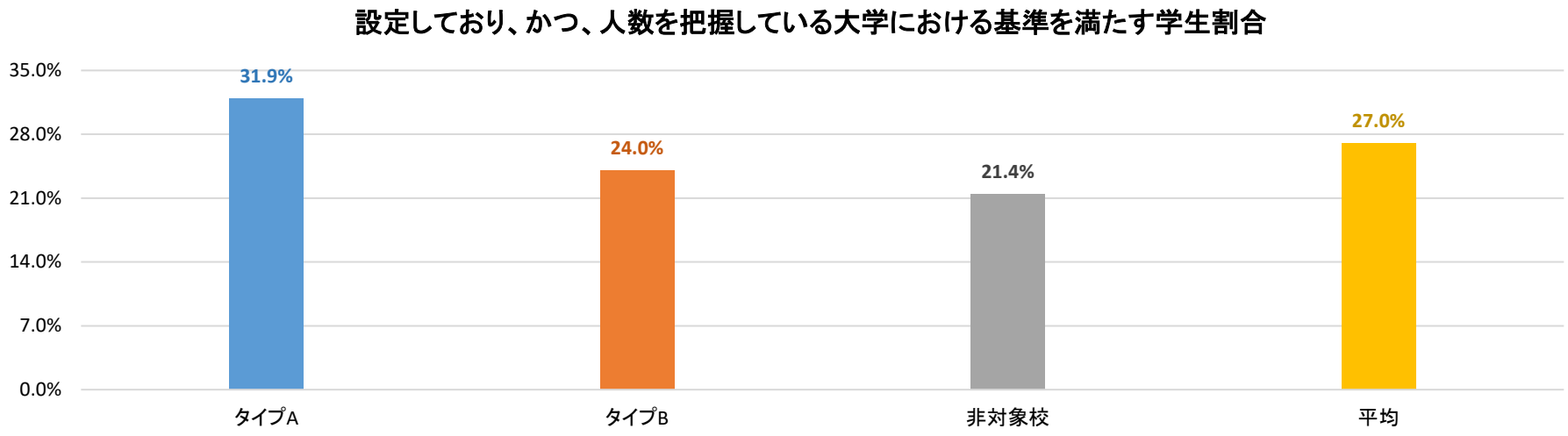
国際化
関連指標

指標⑨関連 外国語力基準を満たす学生割合

- 外国語力基準を設定している大学はSGU非採択校では6.7%しかないが、SGU採択大学は全大学で設定している。
- 設定している大学における外国語力基準を満たす学生割合はSGU採択大学のほうが高く、特にタイプAとSGU非採択校では10%以上の差がある。



※出典：（非対象校）大学における国際化に関する調査（2022年度時点）
（SGU校）SGU指標（2021年度時点）

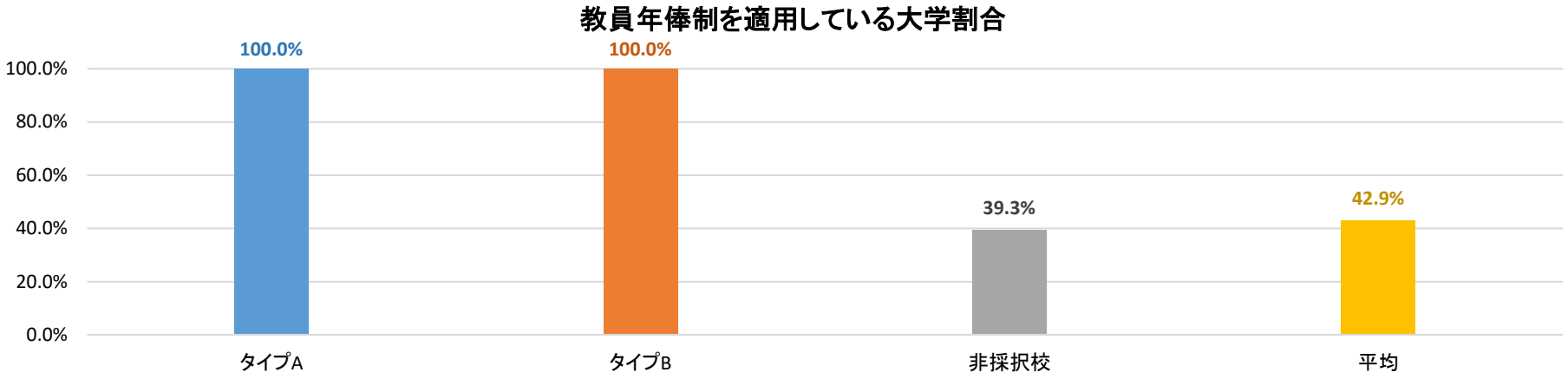


※出典：（非対象校）大学における国際化に関する調査、学校基本調査（2022年度時点）
（SGU校）SGU指標（2021年度時点）

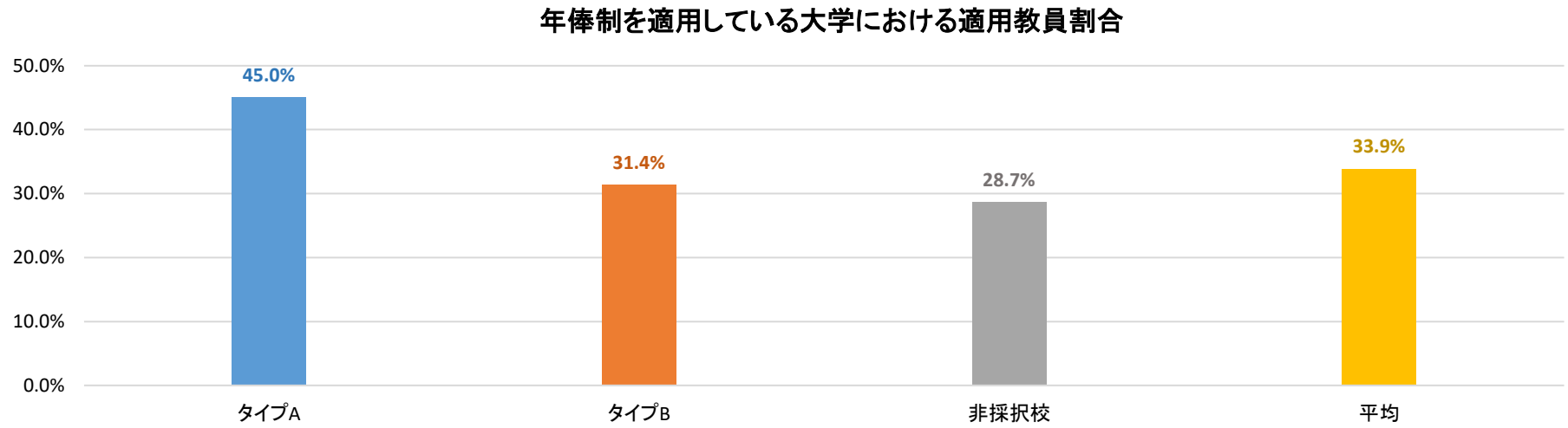
ガバナンス関連指標

指標⑭関連 年俸制導入　年俸制適用教員割合

- 年俸制を適用している大学はSGU非採択校では39.3%しかないが、SGU採択大学は全大学で設定している。
- 設定している大学における基準を満たす教員割合はSGU非採択校が30%未満であるのに対し、SGU大学では30%を超えている。



※出典：（非対象校）大学における国際化に関する調査（2022年度時点）
（SGU校）SGU指標（2022年度時点）



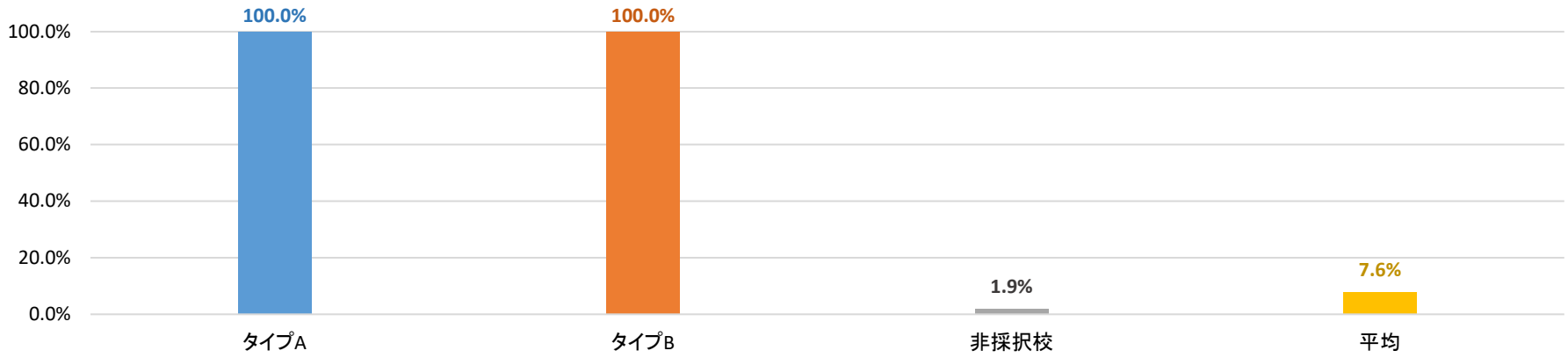
※出典：（非対象校）大学における国際化に関する調査、学校基本調査（2022年度時点）
（SGU校）SGU指標（2022年度時点）

ガバナンス関連指標

指標⑯関連 外国語力基準を満たす専任職員割合

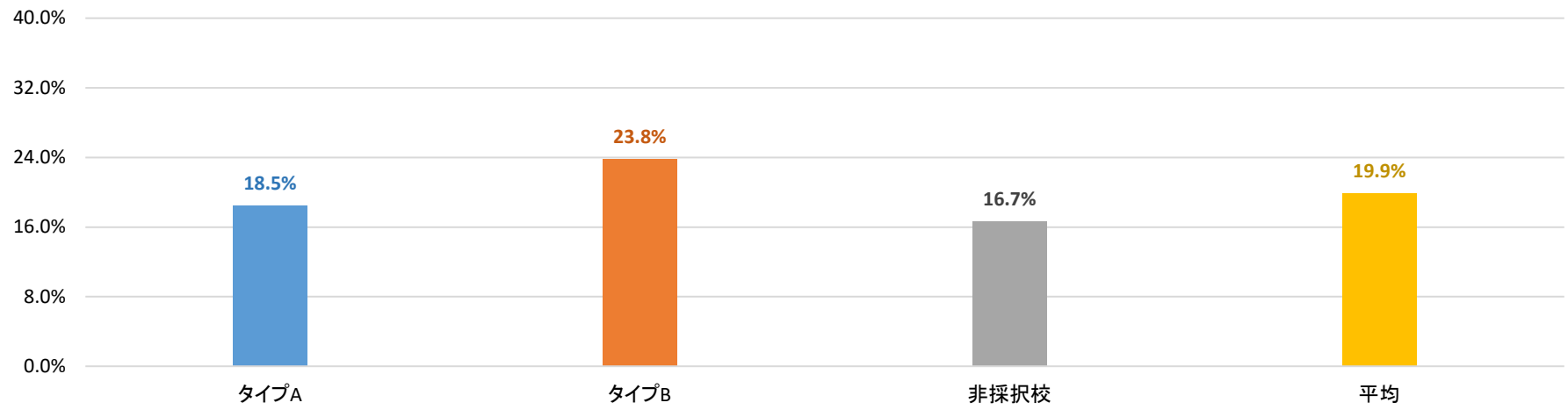
- 職員に対し外国語力基準を設定しているSGU非採択校は僅か1.9%しかないが、SGU採択大学は全大学で設定。
- 設定している大学における基準を満たす職員割合もSGU非採択校と比較し、SGU採択大学が大きくなっている。

外国力基準を設定している大学割合



※出典：（非対象校）大学における国際化に関する調査（2022年度時点）、
（SGU校）SGU指標（2021年度時点）

設定している大学における基準を満たす職員割合

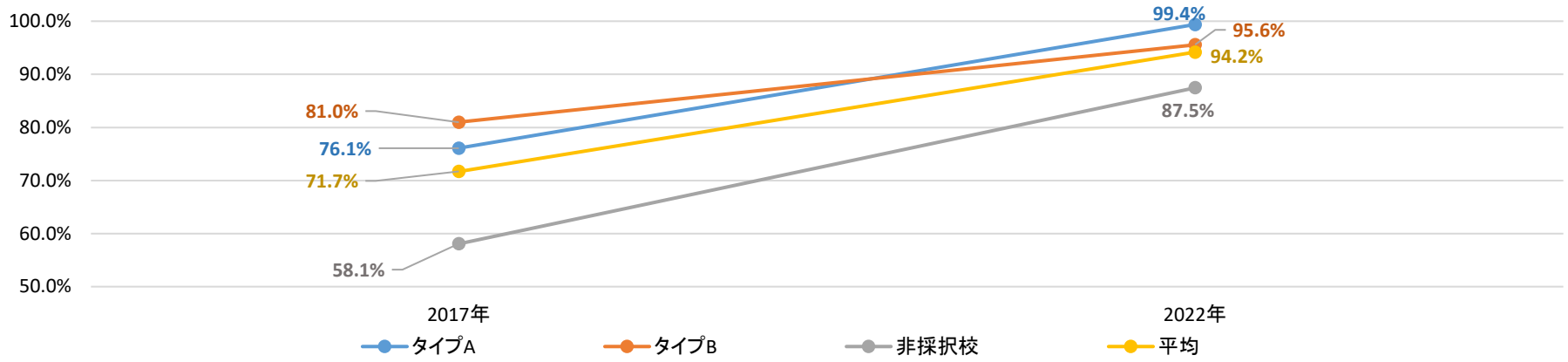


※出典：（非対象校）大学における国際化に関する調査、学校基本調査（2022年度時点）
（SGU校）：SGU指標（2021年度時点）

教育の改革的取組関連指標

指標⑩関連 ナンバリング実施状況・割合(5/1時点)

- 全体として、ナンバリング実施割合は8割を超えており高い水準で推移しているが、さらにSGU採択大学は95%以上と非常に高くなっている。

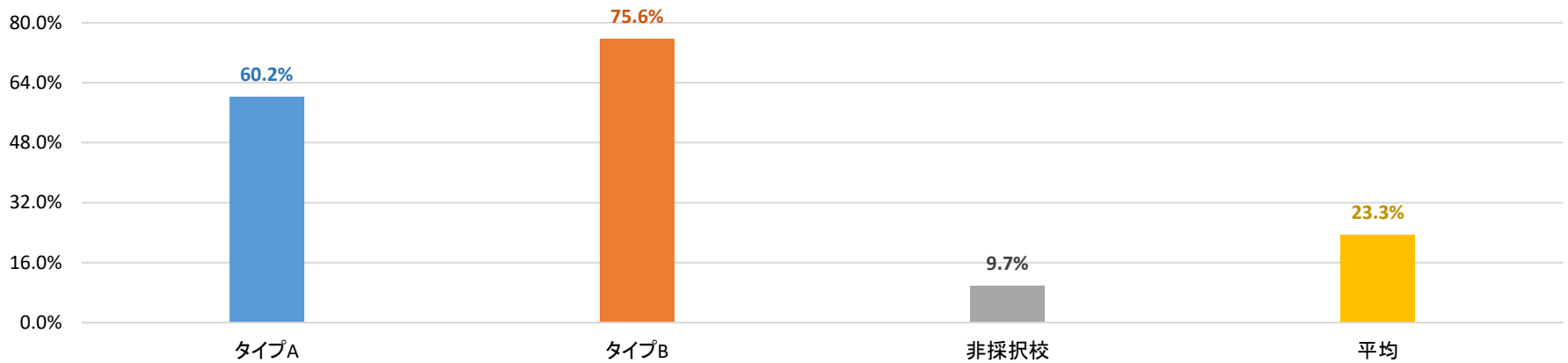


※出典:(非対象校)大学における国際化に関する調査
(SGU校)SGU指標

教育の改革的取組関連指標

指標⑪関連 シラバスの英語化の状況・割合

- シラバスを英語化している科目割合に関しSGU非採択校が9. 7%であるのに対し、SGU採択大学は60%以上を超え、高い割合となっている。

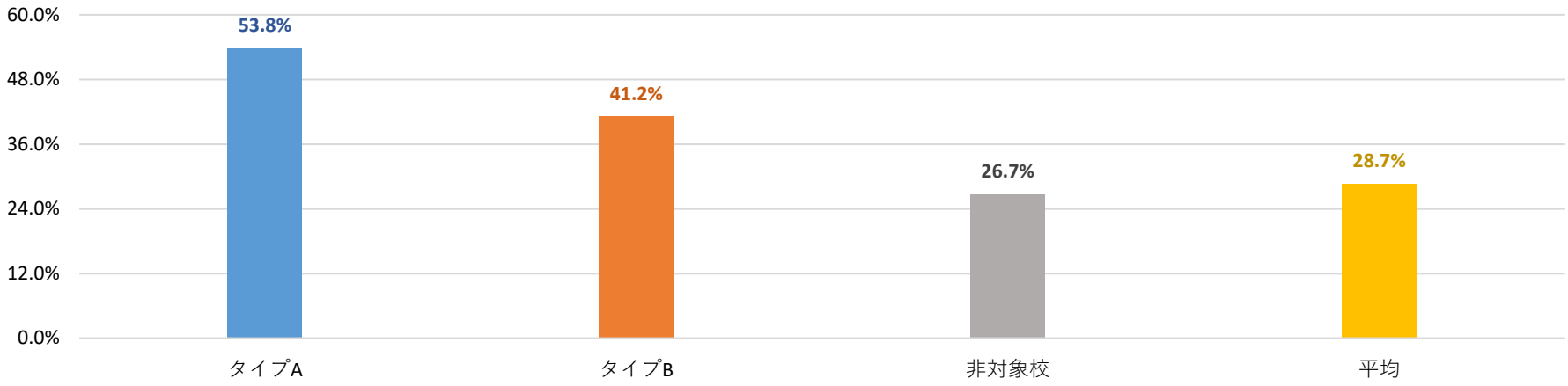


※出典:(非対象校)大学における国際化に関する調査(2022年度時点)
(SGU校)SGU指標(2022年度時点)

教育の改革的取組関連指標

指標⑱関連　外部英語試験を入試に利用する学部率

- SGU非採択校における外部英語試験の入試利用率が26.7%であるのに対し、SGU採択大学は40%以上を超え、高い割合となっている。



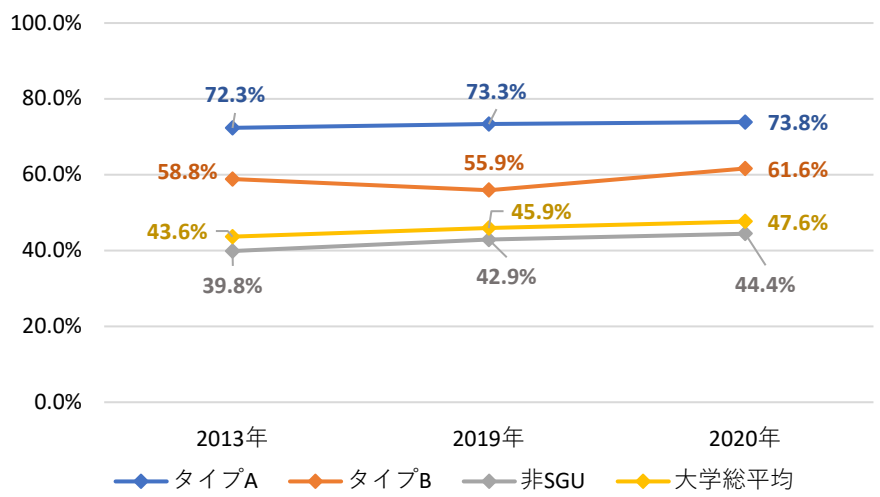
※出典：大学入試のあり方に関する検討会議参考資料（2020年度時点）

任意指標

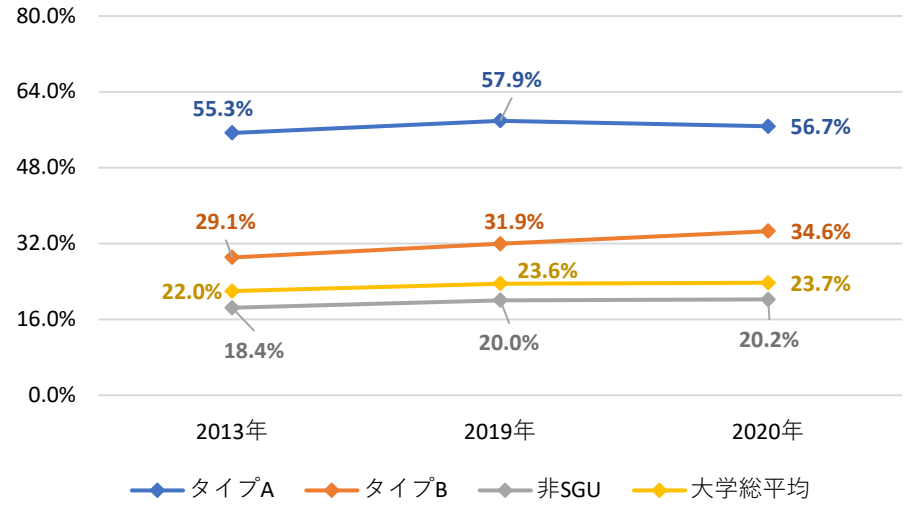
入学時期の弾力化

- SGU採択大学では5割を超える制度設定率であり、実際に受け入れている学部・研究科比率もSGU非採択校が10%前後であるのに対し、タイプAは学部比率52.7%、タイプBは学部比率29.8%と顕著に高い。

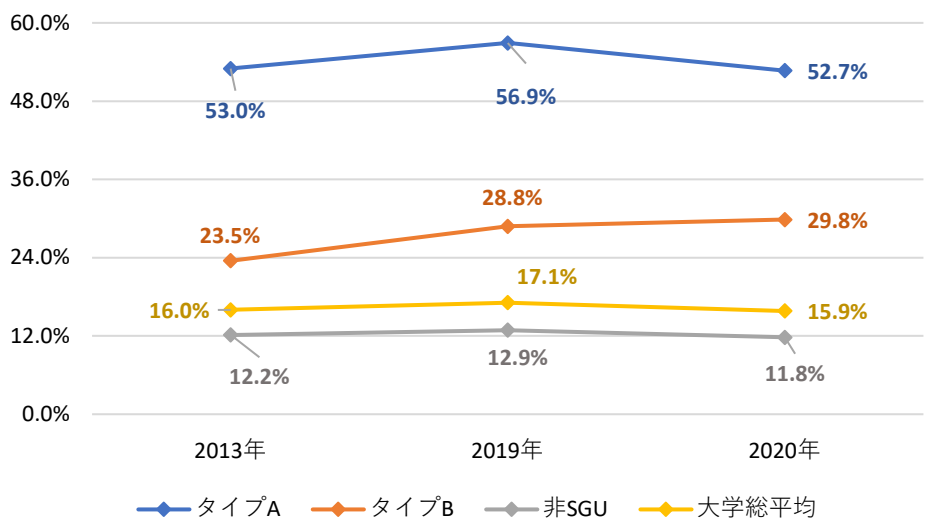
制度ありの学部研究科割合



募集ありの学部研究科割合



受入実績ありの学部研究科割合

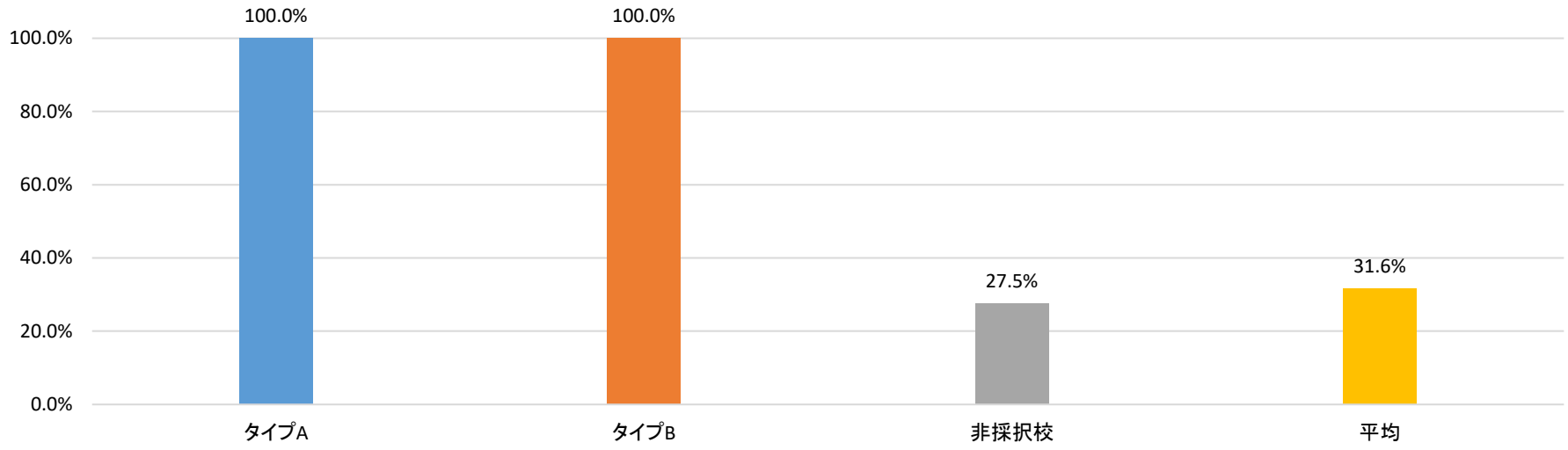


※出典：改革状況調査

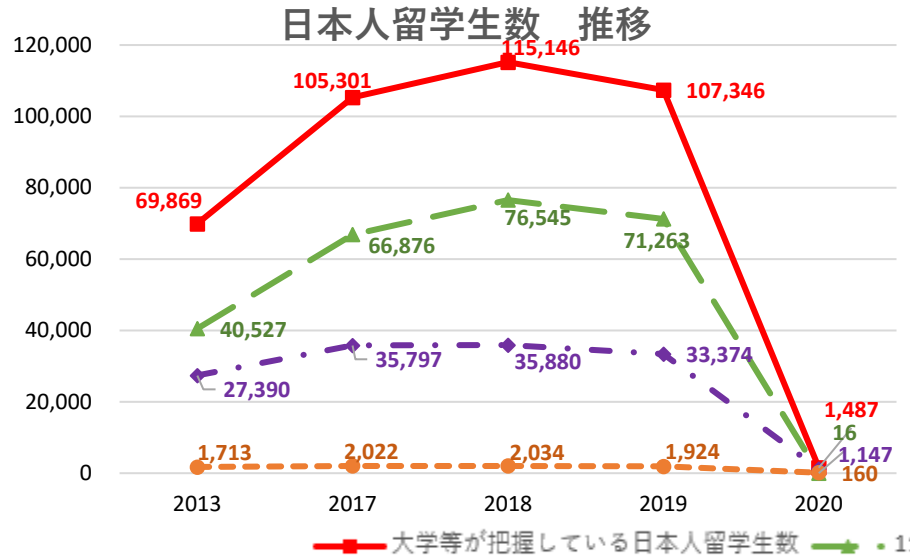
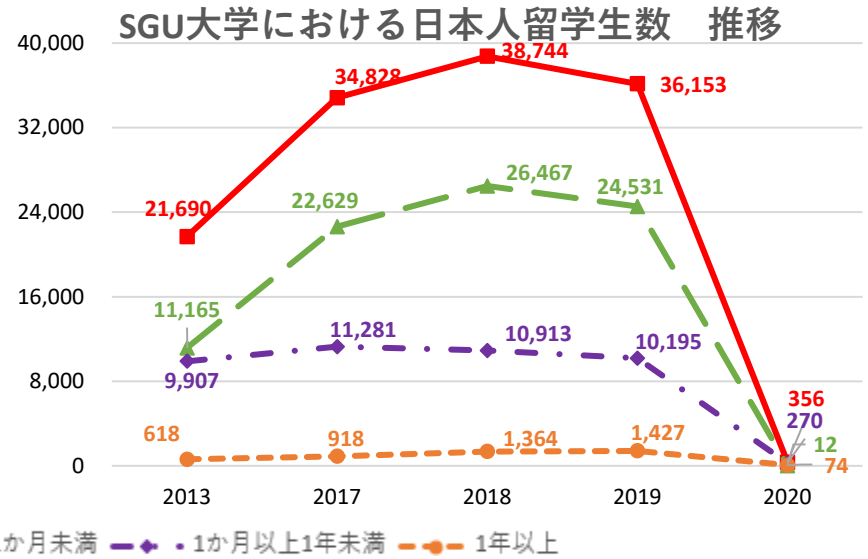
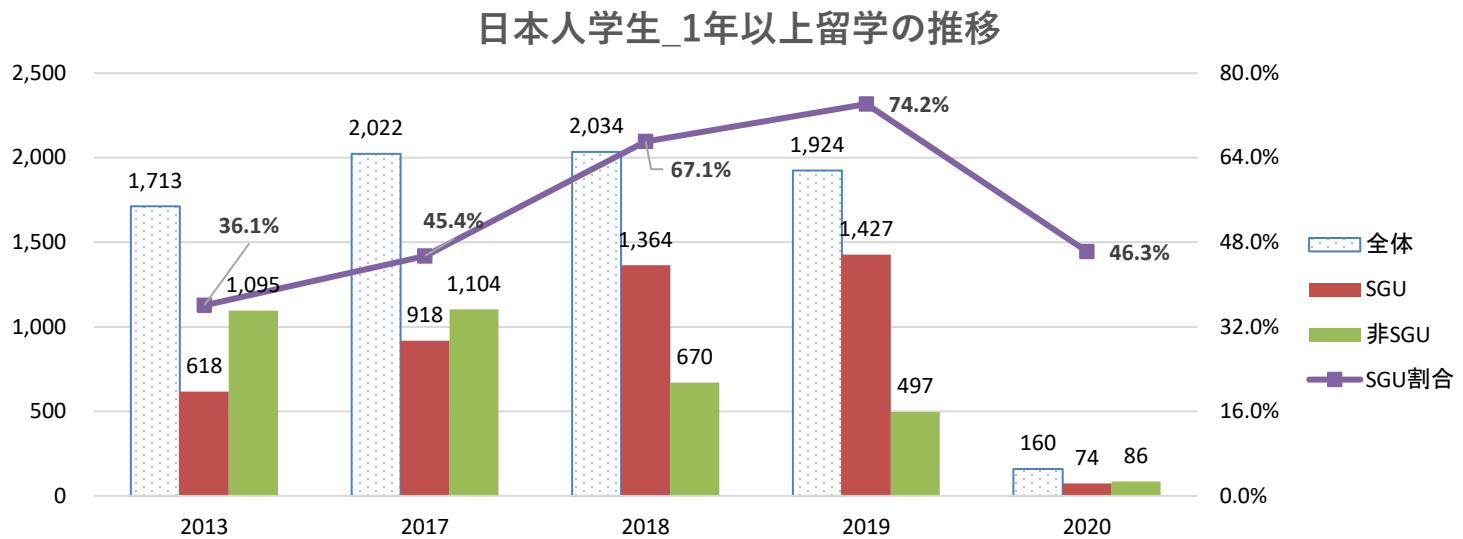
任意指標

混住型学生宿舎の有無

- SGU非採択校における混住型学生宿舎を設けている大学割合が27.5%であるのに対し、SGU採択大学は100%の設置率と顕著な成果が出ている。



※出典：大学における国際化に関する調査(2022年度時点）

日本人留学生数の推移

- 1年未満の留学をしている日本人学生数については、全大学とSGU採択大学で同じような推移をたどっている。
- 1年以上留学をしている日本人学生数に関しては、SGU採択大学では事業開始以降、順調に推移し、2013年度から2019年度で2.3 倍となり、全体に占める割合も 74%超となる。一方で、SGU非採択校においては、派遣者数が2013年度から2019年度で半分以下と減少している。